

盛岡市内遺跡群

— 平成 22・23 年度発掘調査報告 —

西黒石野遺跡	第 13 次
小山遺跡	第 35 次
二又遺跡	第 9・10 次

2013. 3

盛岡市教育委員会

盛岡市内遺跡群

— 平成 22・23 年度発掘調査報告 —

西黒石野遺跡	第 13 次
小山遺跡	第 35 次
二又遺跡	第 9・10 次

2013. 3

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市は、北上平野を縦断する北上川と、その東西に位置する奥羽山脈と北上山地から流れ出る雫石川・中津川との合流点に位置し、雄大な岩手山や姫神山を望む約 30 万人の人口を抱える岩手県の県都です。北東北の拠点都市として緑豊かな環境と高度都市機能の調和したまちづくりを目指しています。

市内には旧石器時代から江戸時代まで、786 箇所の遺跡が存在します。その中には、国・県・市指定の史跡として保存・活用が図られているものもありますが、各種開発等によって姿を変え、消滅していく遺跡があることも事実であります。

盛岡市では、文化財保護の立場から、国の補助を受け市内各地の個人住宅建設にともなう調査を継続的に実施しており、当市の歴史を紐解く上で、大変貴重な成果をあげております。

本書は、平成 22・23 年度に実施した市内遺跡群の発掘調査の報告書であります。西黒石野遺跡では縄文時代前期の集落が確認されています。また、二又遺跡では 10 世紀代の竪穴住居跡が発見されるなど、貴重な成果が得られています。市民の皆様の地域理解の一助として、また学術的な研究資料として広く活用いただければ幸いです。

最後に事業の実施や調査・報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただいた地権者ならびに多くの市民の皆様、ご指導やご助言くださった文化庁記念物課、岩手県教育委員会生涯学習文化課をはじめ関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁一

例 言

- 1 本書は、「盛岡市内遺跡群 ―平成 22・23 年度発掘調査報告―」である。
- 2 本書の執筆は神原雄一郎，佐々木亮二，佐々木紀子，三品花菜子が行い，遺跡の学び館職員と協議して編集した。
- 3 遺構平面位置は，日本測地系 平面直角座標 X 系を座標変換した調査座標 (R X ± 0,) で表示した。
西黒石野遺跡 X - 29,000 ・ Y + 26,000 小山遺跡 X - 34,000 ・ Y + 29,500
二又遺跡 X - 36,000 ・ Y + 24,000
- 4 高さは標高値をそのまま使用している。
- 5 土層図は堆積のしかたを重視し，線の太さを使い分けた。土層注記は層理ごとに本文でふれ，個々の層位については割愛した。層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』(1994 小山正忠・竹原秀雄)を参考にした。
- 6 遺構記号は次のとおりとした。

遺 構	記 号	遺 構	記 号	遺 構	記 号
竪穴住居跡	RA	土 坑	RD	竪穴跡	RE

- 7 調査体制 ―平成 22・23 年度―

教育長 八巻恒雄 (～22 年度)，千葉仁一 (23 年度～)
教育部長 佐藤義見
教育次長 萬 明夫
歴史文化課長 亀山助正 (～22 年度)，田山浩充 (23 年度～) [遺跡の学び館長兼務]
主幹兼課長補佐 千田和文 [遺跡の学び館長補佐兼務]
主幹兼課長補佐 袖上 寛
副 主 幹 大沼信忠 (23 年～)
主 査 吉田 尚 (23 年～)
文化財主査 室野秀文，菊地幸裕，津嶋知弘，神原雄一郎
学芸主査 岡 聡 (23 年～)
主 任 江本淳史
文化財主任 権頭祐子，今野公顕，花井正香，佐々木亮二
主 事 寺島幸子，佐々木俊一，明地幹子
文化財調査員 佐々木紀子，鈴木賢治 (～22 年度)，吉田里和 (～22 年度)，木幡里美 (23 年度～)
三品花菜子 (23 年度～)，渡邊久美子，米澤 綾，福島 茜 (23 年度～)
小西治子 (～22 年度)
学芸調査員 相馬容子 (～22 年 6 月)，佐々木逸人 (～23 年 10 月)，山岸佳澄 (22 年 7 月～)
山野友海 (23 年 11 月～)

[発掘調査・室内整理作業]

阿部正幸, 天沼芳子, 伊藤敬子, 及川京子, 長内理恵, 嘉糠和男, 川村久美子, 工藤エキ, 熊谷あさ子, 小松愛子, 佐藤和子, 佐藤公一, 佐藤美智子, 竹花栄子, 谷藤貴子, 千葉ふさ子, 千葉留里子, 袴田英治, 日野杉節子, 平賀眞利子, 藤田友子, 細田幸美, 藤原亮子, 武蔵照子, 山下摩由美

[地権者・調査協力]

大沢 衛, 永沼 鉄平, 西 友子, 松下 國雄, 岩手県教育委員会

8 発掘調査にともなう出土遺物および諸記録は, 盛岡市遺跡の学び館で保管している。

○遺物の表現について

- (1) 土器……土器の区分は, 縄文土器・土師器・あかやき土器・須恵器に大別した。
 - a 縄文時代早期, 前期初頭に属する土器の実測図・拓本の縮小率は1/2とし, その他は1/3とした。
 - b 挿図の土器の配列は器種・器形・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。
 - c 縄文土器で稜線・沈線は実線・破線で表し, 陰影は表現していない。
 - d 土師器の黒色処理や彩色されたものは, 網目(スクリーントーン)で表現した。
- (2) 石器
 - a 剥片石器の縮小率は1/2, 礫石器は1/3とした。
 - b 石器の展開順序は, 基本的に左側に表面(背面), 中央に右側面, 右側に裏面(腹面・主要剥離面)を配列し, 必要に応じて側縁・縦断面・横断面を付け加えた。
 - c 挿図の配列は出土層位順に配列し, さらに器種ごとにまとめ, 配列した。
 - d 剥片石器の摩擦痕は網目(スクリーントーン)で示し, 礫石器の自然面はドットで示した。
- (3) 土製品・石製品
 - a いずれも縮小率を1/2とした。
 - b 挿図の配列は出土した層位順とし, さらに器種ごとにまとめて配列した。
- (4) 挿図中の記号番号は, 遺物の出土地点及び出土層位を表している。

(例) G 6 - A20 IIIa層 (例) 1号墓 A層 → 1号墓A層より出土

↓ ↓ ↓
※1 ※2 ※3

 - ※1 大グリッド……遺跡の全体を50mメッシュで区切り設定した。北西隅を起点に西から東にA・B・C……のアルファベット, 北から南には1・2・3……のアラビア数字を付し, A6, C12など, 両方の組み合わせでグリッド名を表した。
 - ※2 小グリッド……大グリッドの中をさらに2mメッシュで区切り, 北西隅を起点として西から東にA～Yのアルファベット, 北から南に1～25のアラビア数字を付し, グリッド名は両方の組み合わせで表した。
 - ※3 遺物の出土層位を示す。

○遺構の表現について

各遺構の平面図で, 複数の遺構を同一図面に表示する場合, 説明する遺構は実線で表し, 重複遺構は一点鎖線で表し, 掘込面に層位差のある重複遺構は二点鎖線で表した。

土層図は堆積のしかたを重視し, 線の太さを使い分けた。層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』(1994 小山正忠・竹原秀雄)を参考にした。

目 次

序 言

例 言

目 次

表目次

挿図目次

写真図版目次

I	平成22・23年度発掘調査の概要	1
II	西黒石野遺跡（第13次調査）	5
III	小山遺跡（第35次調査）	19
IV	二又遺跡（第9・10次調査）	30
	写真図版	53
	報告書抄録	

表 目 次

第1表	平成22年度盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧	1
第2表	平成23年度盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧	1
第3表	西黒石野遺跡調査成果一覧	5
第4表	小山遺跡調査成果一覧	19
第5表	二又遺跡調査成果一覧	30

挿 図 目 次

I. 平成22・23年度発掘調査の概要		
第1図	盛岡周辺の主な遺跡	2
II. 西黒石野遺跡（第13次調査）		
第2図	西黒石野遺跡全体図	6
第3図	西黒石野遺跡第13次調査区全体図	8
第4図	R A003竪穴住居跡	9
第5図	R A003竪穴住居跡出土遺物	10
第6図	R D071～074, R D1001～1009土坑（1）	12
第7図	R D071～074, R D1001～1009土坑（2）	13
第8図	土坑出土遺物（1）	14
第9図	土坑出土遺物（2）	15
第10図	遺物包含層出土土器（1）	17
第11図	遺物包含層出土土器（2）, 石器	18

Ⅲ. 小山遺跡（第35次調査）

第12図	小山遺跡全体図	20
第13図	小山遺跡第35次調査区全体図	22
第14図	RA001竪穴住居跡	23
第15図	RA001竪穴住居跡出土遺物	23
第16図	遺物包含層出土土器（1）	25
第17図	遺物包含層出土土器（2）	26
第18図	遺物包含層出土土器（3）	27
第19図	遺物包含層出土石器，土製品	28

Ⅳ. 二又遺跡（第9・10次調査）

第20図	二又遺跡全体図	31
第21図	二又遺跡第9次調査区全体図	32
第22図	RA007竪穴住居跡	35
第23図	RA008竪穴住居跡	36
第24図	RA009竪穴住居跡	37
第25図	RA007竪穴住居跡出土遺物（1）	38
第26図	RA007竪穴住居跡出土遺物（2）	39
第27図	RA008竪穴住居跡出土遺物	40
第28図	RE001・005竪穴跡	43
第29図	RE002～004竪穴跡	44
第30図	RD003～006土坑，グリットピット断面図	45
第31図	RA009竪穴住居跡，RE001・002・004竪穴跡，RD003・006土坑出土遺物	46
第32図	二又遺跡第10次調査区全体図	47
第33図	RA010竪穴住居跡	49
第34図	RA011竪穴住居跡	50
第35図	RA010・011竪穴住居跡出土遺物	51

写真図版目次

- 第1図版 西黒石野遺跡第13次調査区全景（北から・西から）
- 第2図版 西黒石野遺跡第13次調査R A003竪穴住居跡（西から・東から）
- 第3図版 西黒石野遺跡第13次調査R A003竪穴住居跡出土遺物、包含層出土遺物
- 第4図版 西黒石野遺跡第13次調査土坑出土遺物
- 第5図版 小山遺跡第35次調査区全景（北から）、RA001竪穴住居跡（南から）
- 第6図版 小山遺跡第35次調査R A001竪穴住居跡出土遺物、包含層出土遺物（1）
- 第7図版 小山遺跡第35次調査包含層出土遺物（2）・（3）
- 第8図版 小山遺跡第35次調査包含層出土遺物（4）・（5）
- 第9図版 小山遺跡第35次調査包含層出土遺物（6）・（7）
- 第10図版 二又遺跡第9次調査区北・南 全景（西から）
- 第11図版 二又遺跡第9次調査R A007竪穴住居跡・遺物出土状況（西から）
- 第12図版 二又遺跡第9次調査R A008竪穴住居跡・遺物出土状況（南から）
- 第13図版 二又遺跡第9次調査R A009竪穴住居跡（東から）、RE001～005竪穴跡（南から）
- 第14図版 二又遺跡第10次調査R A010・011竪穴住居跡（西から）、R A010竪穴住居跡遺物出土状況（北から）
- 第15図版 二又遺跡第9次調査R A007・008・009竪穴住居跡出土遺物
- 第16図版 二又遺跡第9次調査RE001・002・004竪穴跡、RD003・006土坑出土遺物、第10次調査R A010・011竪穴住居跡出土遺物

I. 平成 22・23 年度発掘調査の概要

1. 平成 22 年度事業の概要

市内の遺跡 盛岡市内には、現在 786 箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。近年では周知の遺跡内における大規模公共事業（区画整理、道路等）、各種民間開発、個人住宅建築等の土地開発にともなう事前の発掘調査や試掘調査を毎年 30 件前後実施している。平成 22 年度は発掘調査・試掘調査（公共事業・各種民間開発・個人住宅等）をあわせて 31 件実施した。

発掘調査 平成 22 年度の国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は、本調査が西黒石野遺跡第 13 次、小山遺跡第 35 次調査、二又遺跡第 9・10 次調査、志波城跡第 104 次調査の 5 件である。なお、志波城跡第 104 次調査については、「志波城跡－平成 20・21・22 年度発掘調査概報－」（2011.3）で報告済である。

遺 跡 名	所 在 地	調査期間	調査面積	調査原因
西黒石野遺跡(第13次)	盛岡市黒石野2丁目35-22	10.06.10 10.06.29	350㎡	個人住宅建築
小山遺跡(第35次)	盛岡市東中野町17-1	10.07.26 10.08.23	200㎡	個人住宅建築
二又遺跡(第9次)	盛岡市下飯岡1-59-9	10.06.01 10.06.10	500㎡	個人住宅建築
二又遺跡(第10次)	盛岡市下飯岡1-55	10.06.04 10.06.09	40㎡	農業用倉庫建築
志波城跡(第104次)	盛岡市中太田方八丁70-5	10.09.14 10.10.12	184㎡	史跡現状変更 (個人住宅建築)

第 1 表 平成 22 年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧

2. 平成 23 年度事業の概要

発掘調査 平成 23 年度は、発掘調査・試掘調査をあわせて 23 件実施した。このうち国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は、試掘調査の安庭館遺跡第 4 次調査、町田遺跡第 16・17 次調査、前九年遺跡第 5 次調査の 4 件である。いずれも遺構・遺物は確認されなかったため第 2 表に所在地・調査期間・調査面積を示すのみとした。

遺 跡 名	所 在 地	調査期間	調査面積	調査原因
安庭館遺跡(第4次)	盛岡市東中野字五輪39-1	11.11.28 11.11.29	21㎡	個人住宅建築
町田遺跡(第16次)	盛岡市乙部30-45-2	11.05.18	75㎡	個人住宅建築
町田遺跡(第17次)	盛岡市乙部30-71-2	12.01.17	42㎡	個人住宅建築
前九年遺跡(第5次)	盛岡市前九年2丁目217-3	11.11.23	37㎡	個人住宅建築

第 2 表 平成 23 年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧

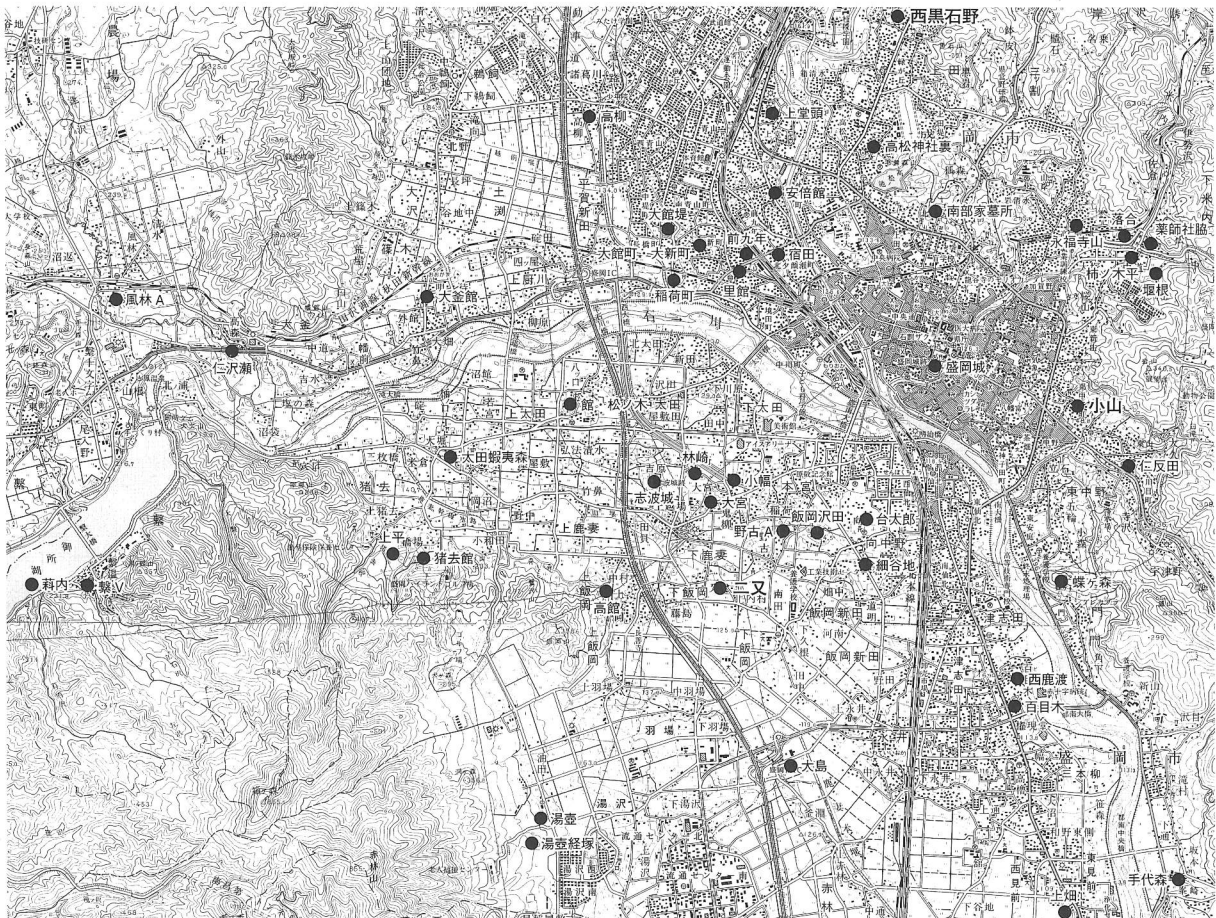
3. 盛岡の地形・地質

盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山(2,038m)を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地質・地形に大きく影響を及ぼしている。

北上山地 北上山地は日本列島の中でも形成年代の古い地層が分布する地帯であり、地質構造上、古生代や中生代の堆積岩および花崗岩からなる。北上山地はその主要な境界である早池峰構造帯により、北部北上山地と南部北上山地に区分される。盛岡市東部は早池峰構造帯の西縁にあたる。これらの山地縁辺には、中津川・築川などの北上川水系の河川やその支流により浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達している。

盛岡市北東部を流れる中津川は、その最大支流である米内川と盛岡市浅岸付近で合流して水量を増し、市街地を西流して北上川と合流する。

築川は盛岡市東部、北上山地の分水嶺となる岩神山(1,103m)の西斜面より流れ、最大支流である根田茂川と盛岡市水沢付近で合流し、閉伊街道(宮古街道)に沿って蛇行しながら、盛岡市東安庭付近で北上川と合流する。その流れは丘陵地や高位段丘面を開析して流域沿いに中・小規模な低位段丘を形成する。



第1図 盛岡周辺の主な遺跡 (1:100,000)

奥羽山脈 奥羽山脈は北上山地に比べると比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山はこの新規火山地域に含まれる。奥羽山脈より東流する雫石川は、雫石盆地を形成し盛岡市北の浦付近において急激に流路が狭められ、北上平野に流れ込む。雫石川北岸および南岸ではその地質が大きく異なる。

雫石川北岸には、岩手山起源の大石渡岩層なだれ堆積物を基盤とした火山灰砂台地（滝沢台地）が広がっている。その範囲は盛岡市北部から滝沢村北部まで広範囲に及んでいる。

雫石川南岸は、雫石川の流路転換によって運ばれた土砂で形成された沖積段丘が広がっている。その規模は東西約 8.0km、南北 3.5km で、段丘上からは主に古代から江戸時代にかけての遺跡が多数確認されている。現在は宅地造成や圃場整備が進み、旧地形を留めているところは少ないが、航空写真などを見ると旧河道の流路が残された水田や古い住宅街の区割り等で確認できる。

4. 歴史的環境

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、市街地から北東へ約 11km の玉山区藪川字外山に小石川遺跡が所在する。山間部の小河川に臨む台地上にあり、後期旧石器時代の遺跡で木葉形尖頭器や石核、剥片、台石などが出土している。また、対岸には細石刃や石核の採集された大橋遺跡がある。

縄文時代 滝沢台地上に立地する大新町遺跡・大館町遺跡・安倍館遺跡からは、草創期の「爪形文土器」が出土している。滝沢台地上には後続する縄文時代早期の遺跡が数多く存在し、前述の 3 遺跡以外にも大館堤・館坂・前九年・宿田遺跡などで早期初頭～末葉の土器が出土している。

縄文時代前期は日本列島全体で温暖化が進み、遺跡数が増加し大規模な集落が出現する時期である。しかし、盛岡周辺に限っては北上山地内に散見するのみで遺跡の数は少ない。これは、約 6,000 年前に起こった岩手山の山体崩壊による自然災害の影響が関連していると考えられている。

縄文時代中期になると遺跡数は爆発的に増加する。雫石川南岸の沖積平野を除く、広い地域に分布する。繫 V・大館町・柿ノ木平・川目 C 遺跡など、主要河川の流域に大規模な拠点集落が営まれるようになる。

後期から晩期には、集落の規模は小さくなり、遺跡数も減少する。柿ノ木平遺跡や大葛遺跡では後期初頭の集落。葎内遺跡や湯壺遺跡では後期から晩期の集落が確認されている。また、宇登遺跡・上平遺跡では晩期の遺物包含層、手代森遺跡では晩期の集落と遺物包含層が確認されている。

弥生～古墳 弥生時代の遺跡数は少ないが、浅岸地区の向田遺跡、堰根遺跡で前期（砂沢式期）や終末期（赤穴式期）の土器を伴う竪穴住居跡が確認されている。古墳時代の集落遺跡は現在のところ確認されていないが、永福寺山遺跡や薬師社脇遺跡で北海道系の形態をもつ土坑墓群が検出されている。永福寺山遺跡では後北 C2-D 式土器と古式土師器が共伴し、薬師社脇遺跡では古式土師器が埋納されていた。

古 代 古墳時代終末から奈良時代にかけて、雫石川南岸等沖積面の遺跡が飛躍的に増加する。7 世紀中ごろには上田蝦夷森古墳群、8 世紀代には太田蝦夷森古墳群、高館古墳群などの終末期古墳が築造され、野古 A 遺跡、台太郎遺跡、百目木遺跡などで安定した集落が形成される。

平安時代になると、803 年に陸奥国最北端の城柵志波城が造営された。志波城は陸奥北部地域の経営拠点であると同時に、北方地域との結節点でもあったが、雫石川の水害を理由に、813 年～814 年に徳丹城（矢巾町）へ移転している。その後 9 世紀中ごろより、陸奥北部の経営は鎮守府胆沢城に集約されていく。志波城東側の林崎遺跡、大宮北遺跡、小幅遺跡では、集落の中に官衙的な建物群が存在している。同様の建物跡は堰根遺跡でも確認されており、在地の有力者が律令体制を背景に

台頭する様子うかがえる。この時期の集落は沖積面だけではなく、上猪去・猪去館・新道Ⅱ遺跡など、山麓台地や丘陵の斜面にも拡がりをみせる。

10世紀後半から12世紀までの遺跡はひじょうに少ないが、大新町遺跡や上堂頭遺跡、高松神社裏遺跡では10世紀後半頃の掘立柱建物や竪穴と土器が出土している。

12世紀の村落や屋敷、居館の遺構は落合遺跡や堰根遺跡、稻荷町遺跡などで確認されている。また、平泉藤原氏の影響下にあったと考えられる宗教遺跡も多数存在する。12世紀以降、街道筋や山頂などに経塚が築かれるようになり、内村遺跡では経塚に埋納したとみられる常滑の大甕が出土しているほか、湯壺経塚からは常滑の三筋文壺、一本松経塚からは渥美の壺が発見されている。大宮遺跡では大溝から12世紀～13世紀のかわらけが出土している。

中 世 鎌倉時代から室町時代については、台太郎遺跡で居館と村落跡、墓域等が確認されている。戦国期の盛岡周辺は、南部氏、斯波氏などの衝突が激しかった地域であるが、市内に数多く分布する城館跡の多くは、室町時代から戦国時代のものと考えられている。これらの城館跡は丘陵や山頂など見晴らしい場所だけでなく、平野部の微高地などにも多数築かれている。現在の盛岡城の場所には南部氏の家臣であった福士氏が築いた北館(慶善館)、南館(淡路館)からなる不來方城が存在した。

近 世 現在の城下の町並みの形成は、その南部氏の盛岡城築城から始まる。

九戸合戦終結後の天正19年(1591)、南部信直は帰還する豊臣軍の軍監浅野長政から不來方城において、この不來方の地に新城を築くよう、積極的に奨められている(『祐清私記』)。信直の居城三戸城は、周囲を山に囲まれて堅固な構えではあるが、広い田畑もなく、決して豊かな土地ではないこと、対して不來方の地は前方に田畑が広がり、背後には大河が流れ、周囲の山河、街道に至るまで利に適った場所であることから、是非この地に新城を築くべきであると説かれた。その後、慶長3年(1598)より盛岡城の築城は始まり、寛永10年(1633)に一応の完成をみる。

その後、石垣補修に係る発掘調査により、盛岡城は1～5期の変遷を経て現在に至っていることが判明している。

盛岡城は当初の基本的縄張りに浅野長政が関わり、実際の築城工事には前田利家の家臣内堀伊豆世頼式が奉行並として参画していたことから、戦国期の北奥地域の城館とは大きく異なり、総石垣の豊臣系城郭として国内最北の事例となっている。

Ⅱ. 西黒石野遺跡（第13次調査）

1. 遺跡の環境

(1) 遺跡の概要

遺跡の位置 西黒石野遺跡は、盛岡市の中心部より北へ約4.5kmの盛岡市黒石野二丁目地内に位置する（第1図）。以前は畑や果樹園等が多かったが、現況は近年の開発による宅地化が進んでいる。遺跡の範囲は東西約500m、南北約500mと推定され、標高は148～170mである。

地形・地質 西黒石野遺跡は北上川東岸、四十四田丘陵の裾に発達する河岸段丘西辺に位置し、段丘は四十四田丘陵より流れる沢の開析により、いくつもの舌状地形に分かれており、全体的に起伏の多い地形となっている。西黒石野遺跡を含む周辺一帯は、浜民火山灰層、分火山灰層などの主に岩手山・秋田駒ヶ岳に噴出起源をもつ火山灰で構成される。

周辺の遺跡 西黒石野遺跡を始め、四十四田丘陵には数多くの遺跡が立地している。南側には黒石野平遺跡（縄文時代早期～晩期、平安時代）、7世紀の土師器甕、衝角付冑、環状錫製品、琥珀原石などの副葬品が出土した上田蝦夷森古墳群、右京長根遺跡（縄文時代）、高松神社裏遺跡（縄文時代前期～中期・平安時代）、など縄文時代から平安時代にかけての遺跡が分布している。また近世の奥州道中の街道筋にあたり、上田一里塚（県指定史跡）が築かれている。

過去の調査 盛岡市教育委員会による発掘調査は、平成2年の宅地造成に伴う第1次調査以降、現在まで13次にわたり実施されている（第2図）。

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
1	盛岡市黒石野二丁目7外	宅地造成	3,180㎡	90.05.07 90.07.28	縄文時代早～中期竪穴住居跡12棟、土坑75基、平安時代竪穴住居跡1棟、土坑1基、近世以降溝6条、縄文土器、石器
試2	盛岡市黒石野二丁目18番1外	個人住宅建築	258㎡	90.09.11	遺構・遺物なし
試3	盛岡市黒石野二丁目18-1ほか	店舗建設	366㎡	92.11.09	遺構・遺物なし
試4	盛岡市黒石野二丁目8-8, 9, 10	共同住宅建築	116㎡	93.05.18	遺構・遺物なし
試5	盛岡市黒石野二丁目7-15	住宅建設	33㎡	94.05.13	遺構・遺物なし
6	盛岡市黒石野三丁目139-7ほか	個人住宅建築 宅地造成	470㎡	95.09.25 95.10.06	土坑5基、縄文時代遺物包含層、平安時代竪穴住居跡2棟、時期不詳柱穴群縄文土器、土師器、須恵器
7	盛岡市黒石野二丁目8の一部	個人住宅建築	770㎡	96.05.10 96.05.24	縄文時代陥し穴状土坑11基、土坑3基 縄文土器、石器
8	盛岡市黒石野三丁目146番2ほか	宅地造成	297㎡	98.10.22	遺構・遺物なし
試9	盛岡市黒石野二丁目15-1ほか	宅地造成	1,864㎡	95.12.18 95.12.20	遺構・遺物なし
10	盛岡市黒石野二丁目20・21地割	宅地造成	2,889㎡	98.11.04 98.12.15	縄文時代土坑26基、平安時代竪穴遺構2棟 縄文土器、土師器
11	盛岡市黒石野二丁目14ほか	宅地造成	6,630㎡	03.08.18 03.12.04	縄文時代早期竪穴住居跡2棟、 縄文時代中～後期陥し穴状69基、 平安時代土坑1基、縄文土器、石器
12	盛岡市黒石野二丁目28番1ほか	共同住宅建築	430㎡	09.06.01 09.06.22	縄文時代陥し穴状土坑10基、江戸時代大溝1条、 時期不詳溝跡1条、土坑1基、 縄文土器、陶磁器
13	盛岡市黒石野二丁目35-22, 24	個人住宅建築	350㎡	10.06.10 10.06.29	縄文時代前期竪穴住居跡1棟、土坑4基、 江戸時代土坑墓11基 縄文土器・石器、陶磁器、古銭、柄鏡、簪

第3表 西黒石野遺跡調査成果一覧



2. 調査成果

(1) 平成 22 年度の調査

平成 22 年度は、個人住宅建築に伴い第 13 次調査を実施した（第 3 図）。

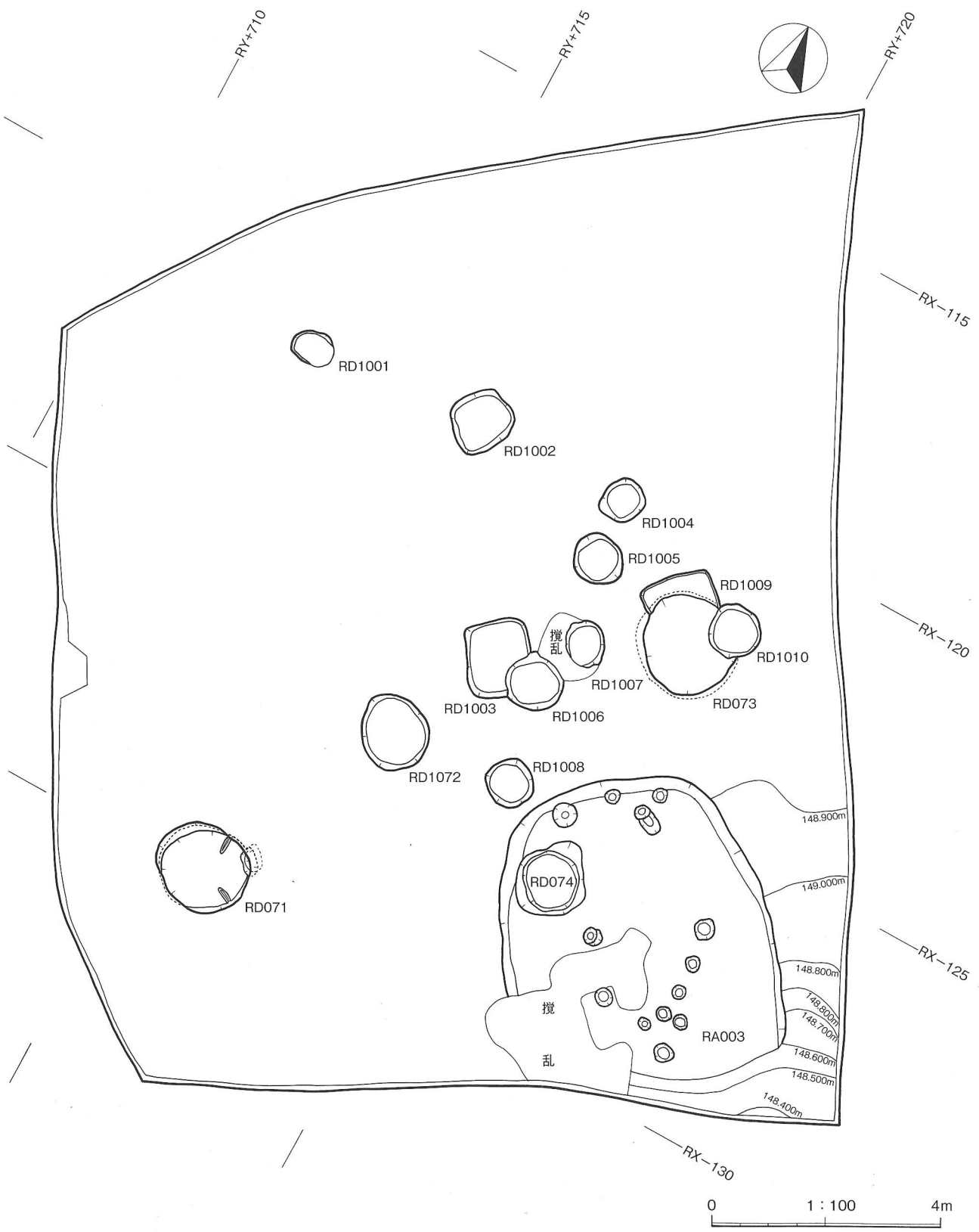
第 13 次 第 13 次調査区は遺跡西辺部の末端に位置し、南側を流れる沢に面している。調査の結果、縄文時代前期の竪穴住居跡 1 棟と土坑 4 基、江戸時代の土坑墓 10 基を検出した。調査期間は平成 22 年 6 月 10 日～6 月 29 日、調査面積は 350㎡である。

(2) 縄文時代の遺構と遺物

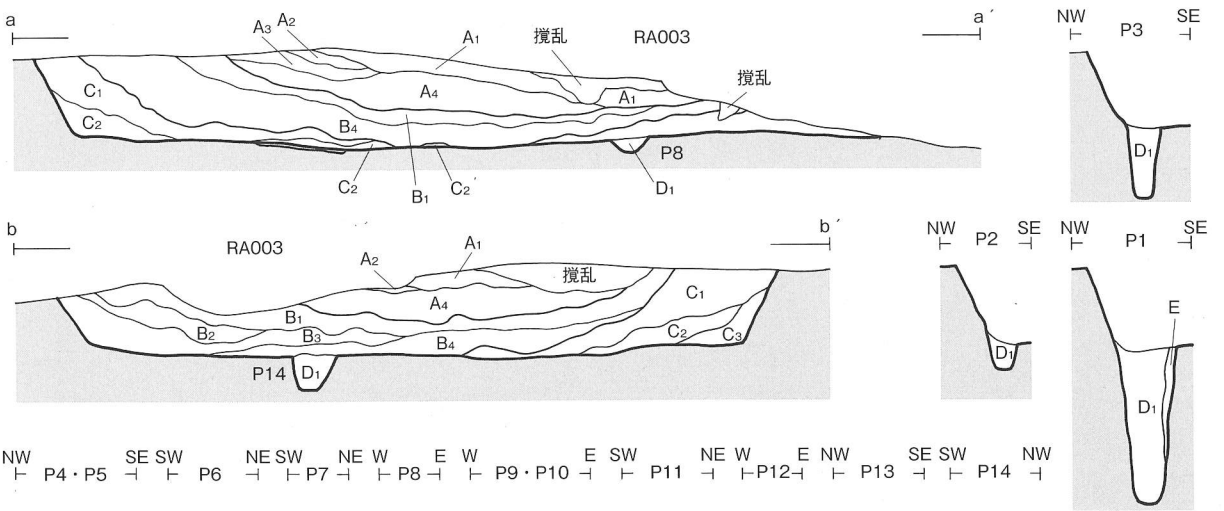
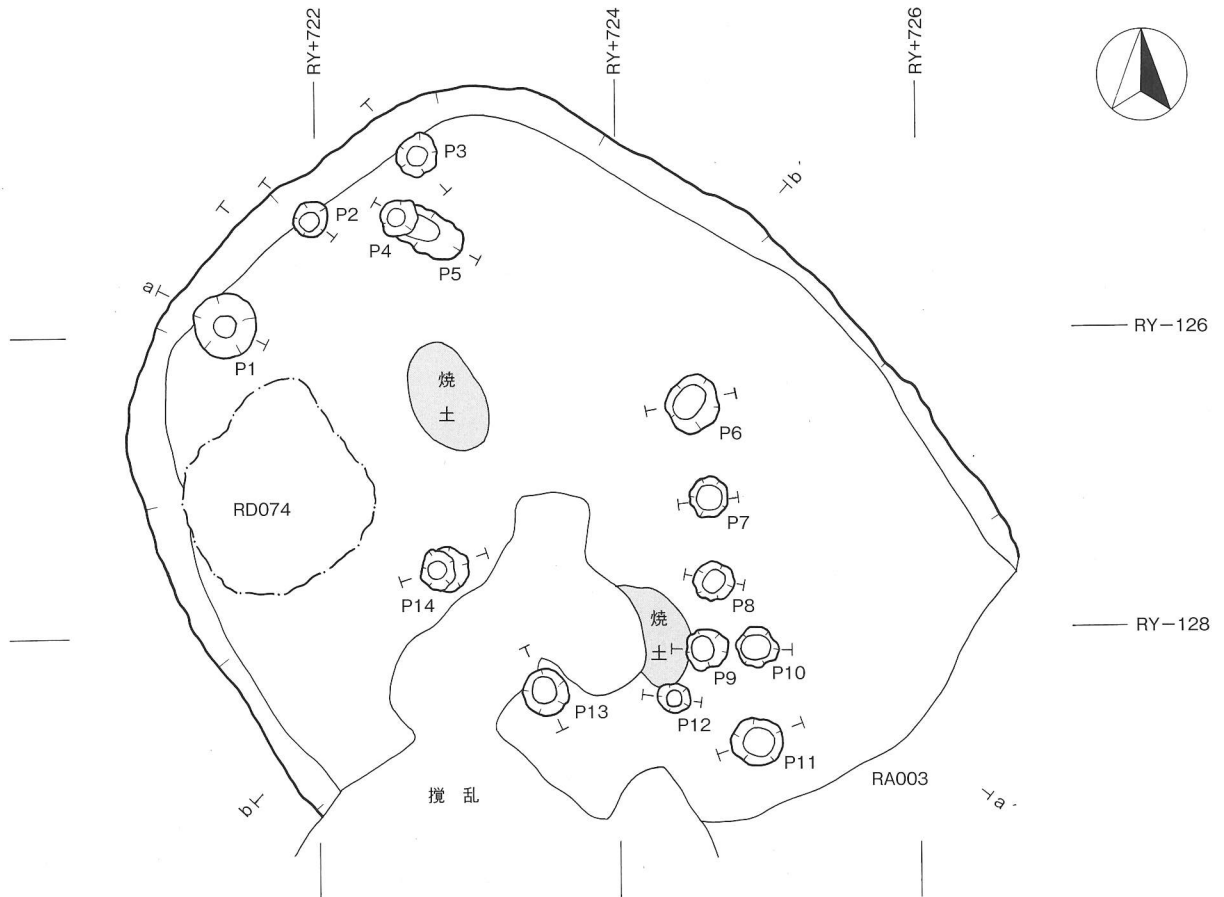
遺 構 縄文時代の遺構は竪穴住居跡 1 棟、土坑 4 基が検出された。R A 003 竪穴住居跡からは前期前葉の土器が出土している。

R A 003 竪穴住居跡（第 4 図）

時 期	前期前葉	平 面 形	不整円形	重複関係	なし
規 模	長軸上端 5.46m 以上・下端 5.14m 以上、短軸上端 4.78m・下端 4.36m、深さ 0.62m				
掘 込 面	削平	検 出 面	I a 層（耕作土）直下		
埋 土	自然堆積によるもので、層相により A～C 層に大別される。 A 層—黄褐色土を主体とし、スコリア粒を含む明黄褐色土の混入量で 4 層に細分される。 B 層—暗褐色土を主体とし、スコリア粒を含む褐色土の混入量で 4 層に細別される。 C 層—褐色シルトを主体とし、暗褐色土を少量～多量に含む。3 層に細別される。				
炉の状態	地床炉を 2 つ検出した。北側の炉の規模は長軸 0.74m、短軸 0.48m で、南側の炉の規模は長軸 0.74m、短軸 0.31m 以上をはかる。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。残存する箇所では深さは 0.62m をはかる。			床面の状態	ほぼ平坦
柱 穴	床面上に 14 口（P 1～14）検出された。P 1・P 6・P 7・P 13 は掘り込みが深く柱痕跡が認められた。各ピットの深さは P 1 - 1.10m、P 2 - 0.19m、P 3 - 0.46m、P 4 - 0.48m、P 5 - 0.26m、P 6 - 0.61m、P 7 - 0.64m、P 8 - 0.11m、P 9 - 0.10m、P 10 - 0.11m、P 11 - 0.20m、P 12 - 0.64m、P 13 - 0.65m、P 14 - 0.71m である。				
土 器	（第 5 図 1～20） 1～11 は口唇部に刻目を施す深鉢で、口縁下には網目状の撚糸文が、体部下半には羽状縄文が施される。12 は体部に羽状縄文が施される尖底深鉢である。13 は S 字状連鎖沈文が施される深鉢底部である。14 は体部下半に撚糸文が施される深鉢である。15～19 は体部に木目状撚糸文が施される深鉢である。20 は網目状撚糸文が施される深鉢である。				
石 器	（第 5 図 21～24） 21・22 は背面右側縁部に調整を施す頁岩製の削器である。23 は頁岩製の石錘である。24 は側縁両端に抉りを入れた石錘である。石材は砂質凝灰岩である。				

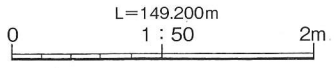
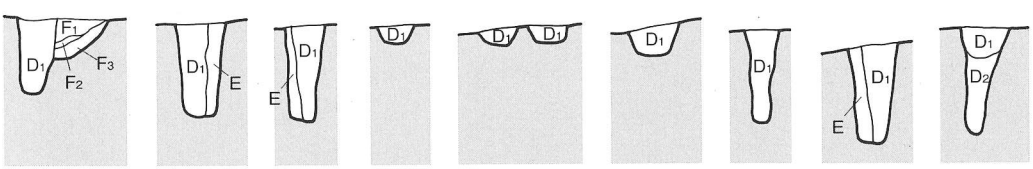


第3図 西黒石野遺跡第13次調査区全体図

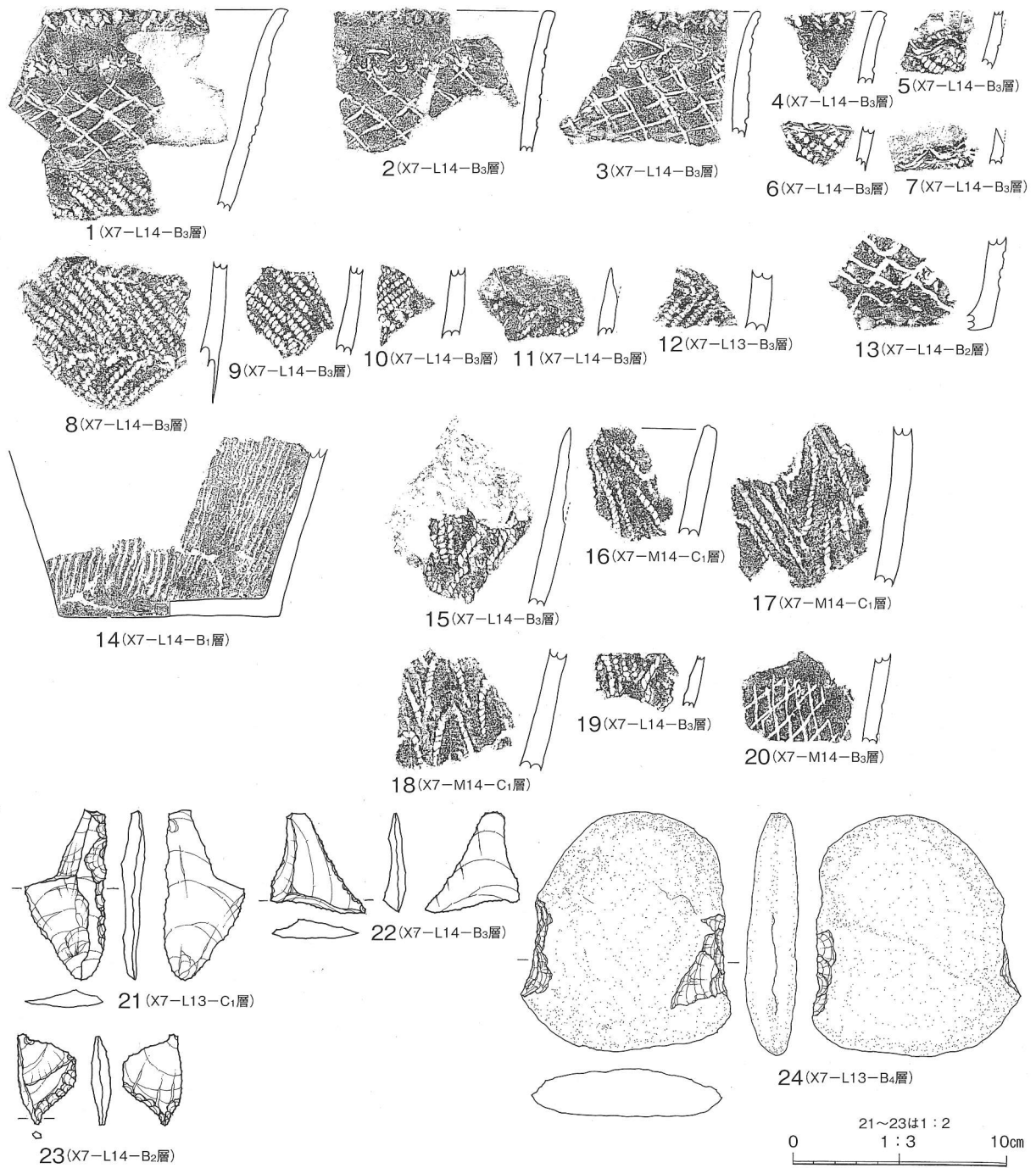


NW SE SW NE SW NE W E W E SW NE W E NW SE SW NW

├ P4·P5 ┤ ├ P6 ┤ ├ P7 ┤ ├ P8 ┤ ├ P9·P10 ┤ ├ P11 ┤ ├ P12 ┤ ├ P13 ┤ ├ P14 ┤



第4图 RA003 竖穴住居跡



第5図 RA003 竪穴住居跡出土遺物

RD071 土坑 (第6図)

平面形 不整形 重複関係 なし 掘込面 不明 検出面 Ia層直下
規模 長軸上端 1.70m・下端 1.57m, 短軸上端 1.48m 下端 1.45m
埋土 不明 壁の状態 断面はフラスコ形を呈する。深さは 0.98mをはかる。
遺物 (第8図1・2) 1は体部に羽状縄文を施す深鉢である。2は沈線で区画された幾何学文に撚糸文を充填する深鉢である。

RD072 土坑 (第6図)

平面形 不整形 重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ia層直下
規模 上端 1.22m・下端 1.08m
埋土 自然堆積によるもので、層相によりA～B層に大別される。
A層—暗褐色土を主体とし、少量～多量の褐色土を粒～塊状に含む。4層に細別される。
B層—明黄褐色シルトを主体とし、褐色土の混入量で3層に細別される。
壁の状態 垂直に立ち上がる。深さは 0.63mをはかる。
遺物 (第8図3・4) 3は体部に縄文を施す深鉢である。4は沈線による鋸歯状文を施す深鉢体部である。

RD073 土坑 (第6図)

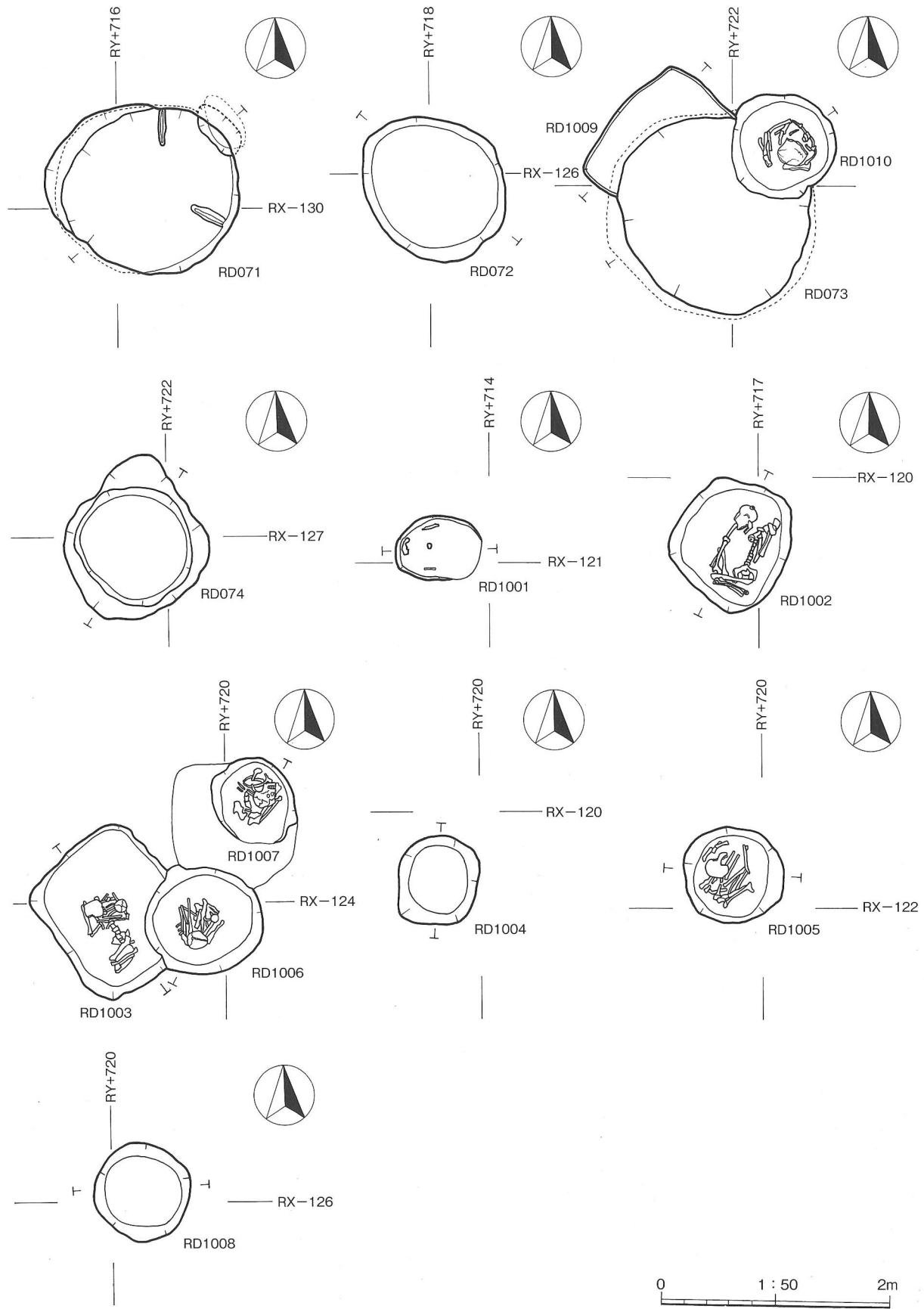
平面形 不整形 重複関係 RD1009・1010に切られる 掘込面 削平
検出面 Ia層直下 規模 長軸上端 1.68m・下端 1.81m, 短軸上端 1.63m・下端 1.82m
埋土 不明 壁の状態 断面はフラスコ形を呈する。深さは 0.28mをはかる。
遺物 (第8図5) 5は口縁部直下に3条の横位沈線文と縄文が施される高坏である。

RD074 土坑 (第6図)

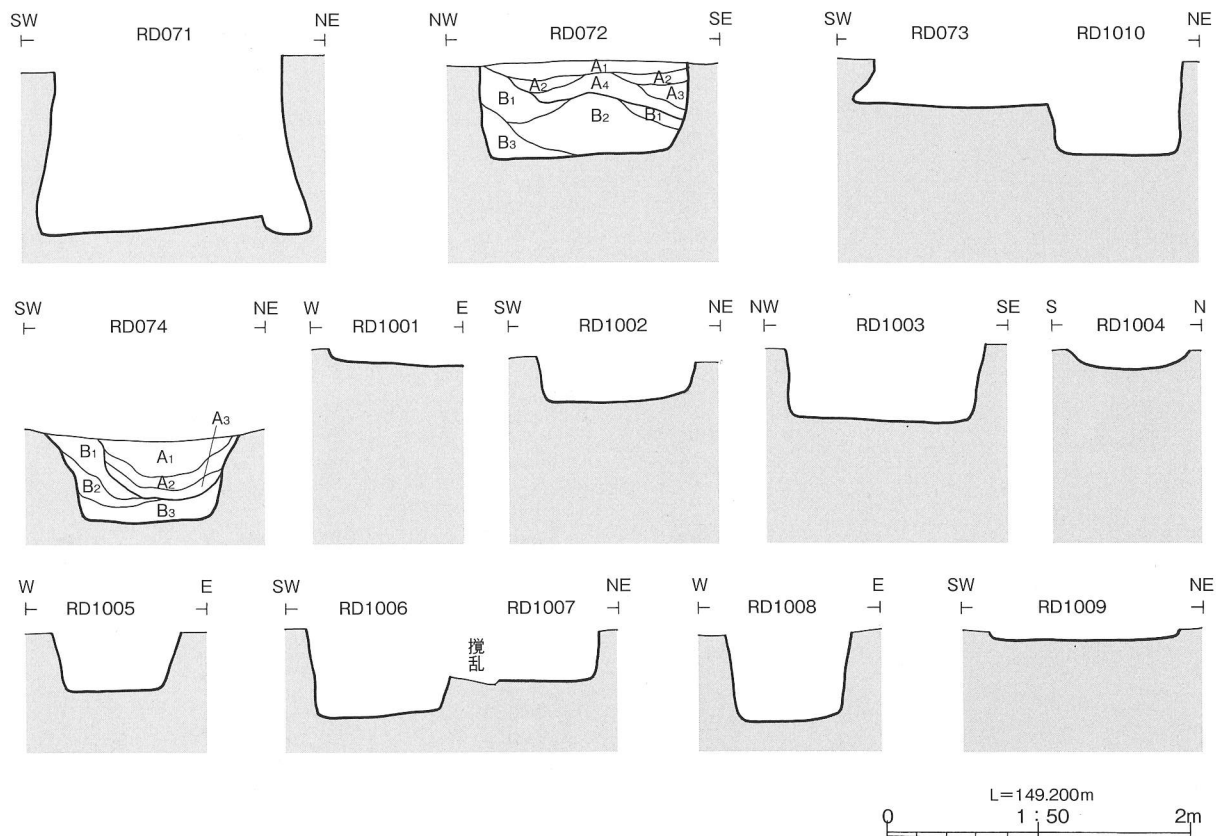
平面形 不整形 重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ia層直下
規模 長軸上端 1.42m・下端 0.88m, 短軸上端 1.28m・下端 0.93m
埋土 自然堆積によるもので、層相によりA～B層に大別される。
A層—暗褐色土を主体とし、少量～多量の明黄褐色シルトを含む。3層に細別される。
B層—褐色土を主体とし、にぶい黄橙の混入量で3層に細別される。
壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは 0.54mをはかる。
遺物 なし

(3) 近世の遺構と遺物

近世の土坑墓 (第6図) 近世の土坑は 10 基検出された。遺構の平面形は不正楕円形もしくは隅丸方形であり、規模は 0.73～1.31m, 深さは 0.04m～0.58mをはかる。また, RD1002・1003・1005・1006・1007・1010 からは人骨が見つかり土坑墓と考えられる。RD1001・1004・1008・1009 については、削平されているものの、平面形の共通性や出土遺物から土坑墓の可能性が高い。

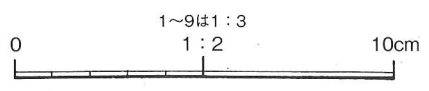
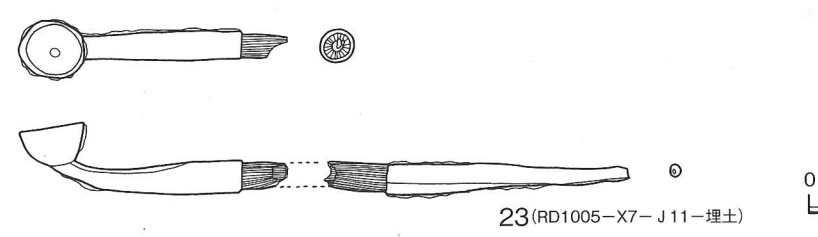
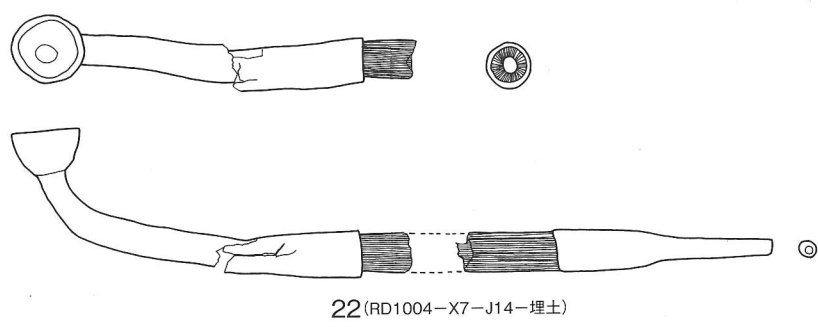
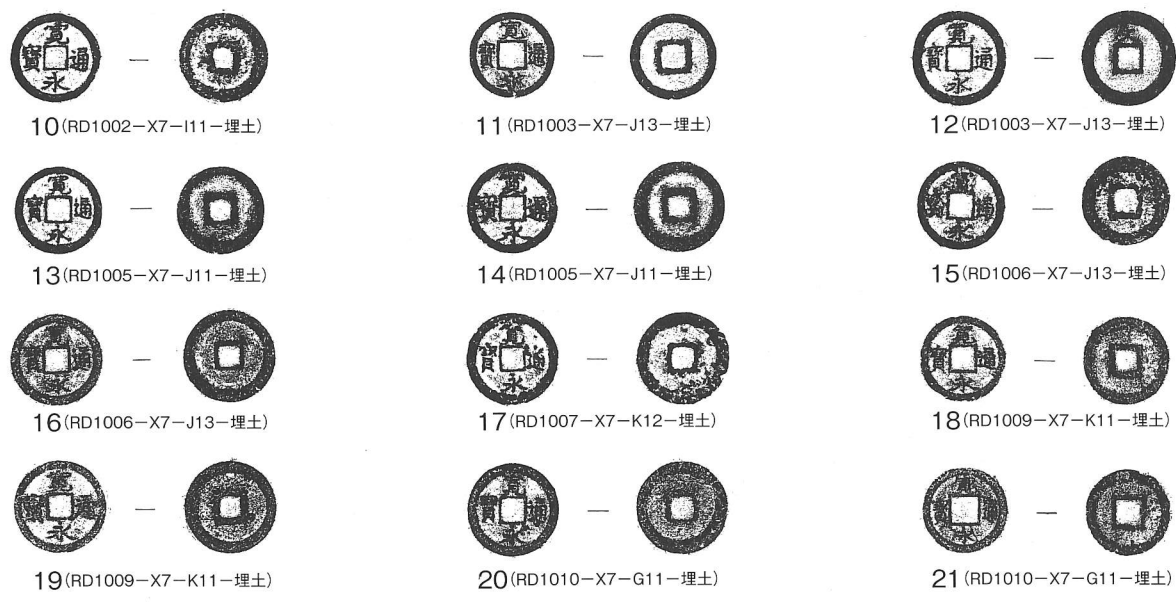
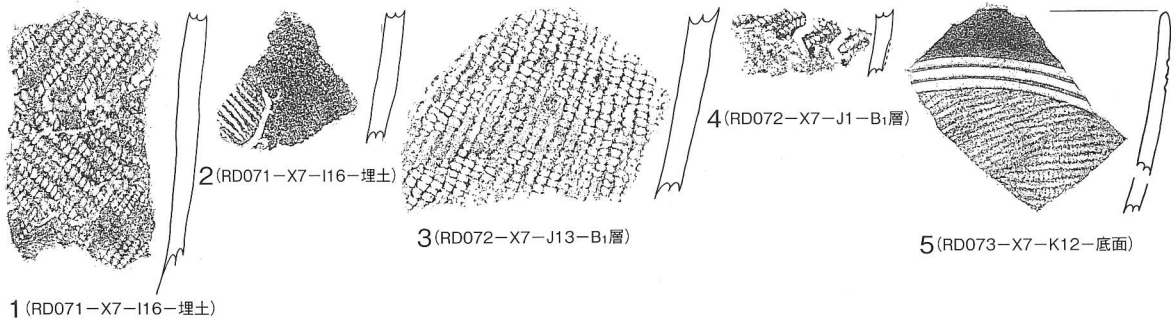


第6図 RD071~074、RD1001~1009土坑(1)

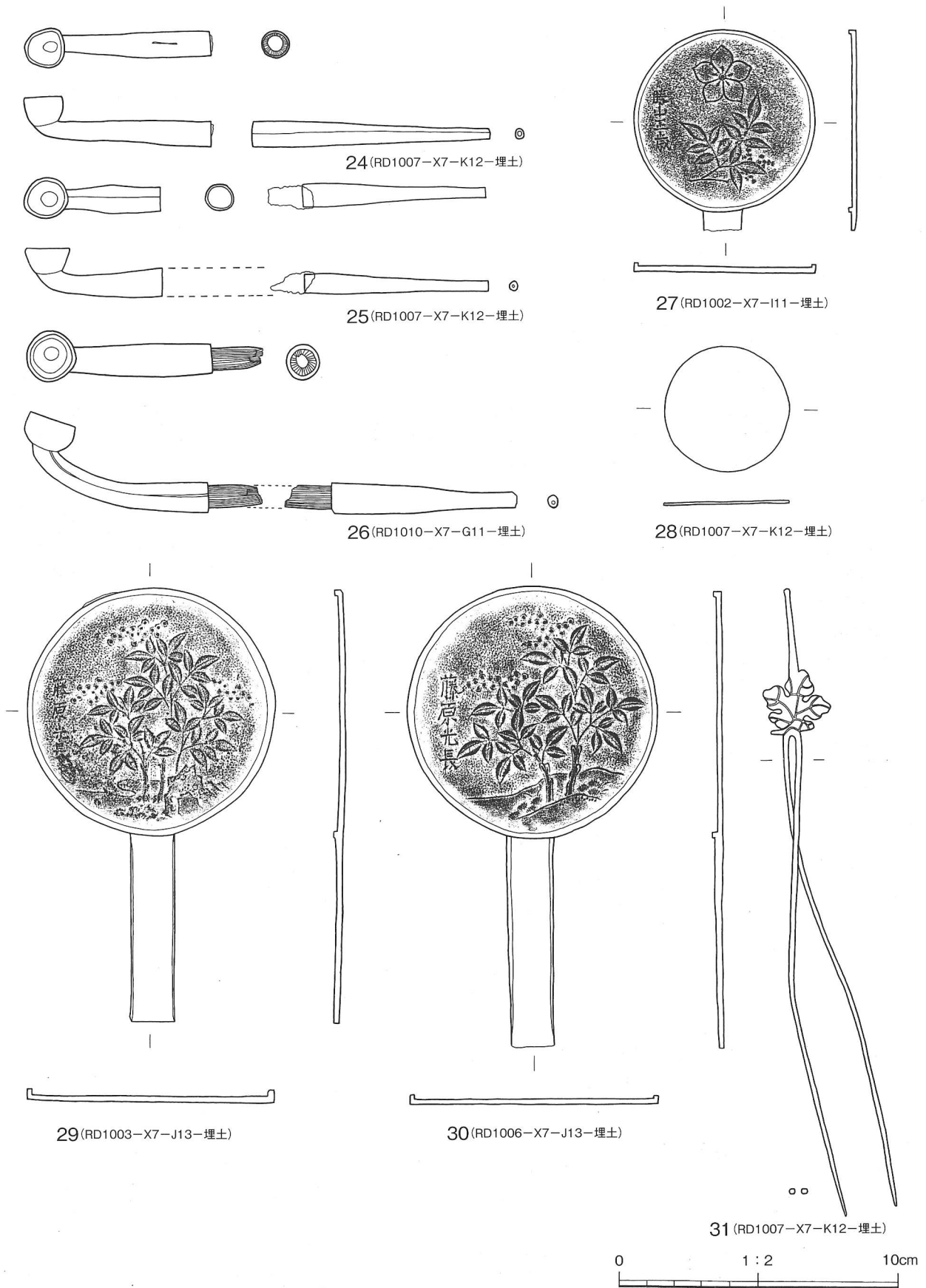


第7図 RD071~074、RD1001~1009土坑(2)

土坑墓出土遺物(第8図6~第9図31) 6は隆帯上に刺突列を施す甕の体部である。7は小波状を呈する甕の口縁部である。8は口縁部が外反する肥前の小杯である。9は草花文が施される瀬戸の染付小杯である。10~21は寛永通寶である。寛永通寶の一文銭は、鑄造年代が文字の形態によって判明しており、1期古寛永、2期新寛永(文銭)、3期新寛永と大きく3つに大別される(『近世の出土銭Ⅱ-分類図版編-』兵庫埋蔵銭調査会、1998)。10・14・15・19は1期古寛永であり、12は背面上部に文字がみられることから2期新寛永であり、その他は3期新寛永に属する。22~26は煙管である。煙管はⅠ~Ⅵ期に分けてとらえられる(『図説江戸考古学研究辞典』江戸遺跡研究会、2001)。22は脂反しが湾曲しているためⅣ期であり、23・26は湾曲が小さくなっていることからⅤ期と考えられ、24・25は湾曲がほぼみられなくなることからⅤ~Ⅵ期のものと区分できる。27・29・30は柄鏡である。27は桔梗と南天が描かれ「藤山正歳」と銘が刻まれている。柄部分は欠損している。29・30は南天が描かれ「藤原光長」と銘が刻まれている。28は手鏡である。31は飾簪である。桐の葉を模した装飾が先端部についている。



第8圖 土坑出土遺物 (1)



第9図 土坑出土遺物 (2)

(4) 遺構外出土の遺物

土器 (第10図1～第11図49) 1は縄文を施す尖底深鉢の底部である。2は横位の撚糸文が施される深鉢体部である。3～9は縄文が施される尖底深鉢の体部である。10・11は不整撚糸文を施す深鉢口縁部である。12～27は羽状縄文を施す深鉢の口縁部および体部である。28～35は縦位の縄文を施す深鉢である。36は不整撚糸文を施し、直下に縦位の縄文を施す深鉢口縁部である。37はS字状連鎖縄文を施す深鉢体部である。38・40は縄文を施す深鉢体部である。39は深鉢体部の無文部分である。41・42はS字状連鎖縄文を施す深鉢底部である。43は沈線による幾何学文の区画に縄文を充填する深鉢体部である。44は沈線による幾何学文の間に撚糸文が施される深鉢体部である。45・46は縄文が施される深鉢体部である。47は三条の横位平行沈線文を施す高坏口縁部である。48は横位の平行沈線文と縄文が施される甕体部である。49は横位縄文が施される甕体部である。

石器 (第11図50) 50は下端部に抉りを施す、流紋岩製の石錘である。

3. 総括

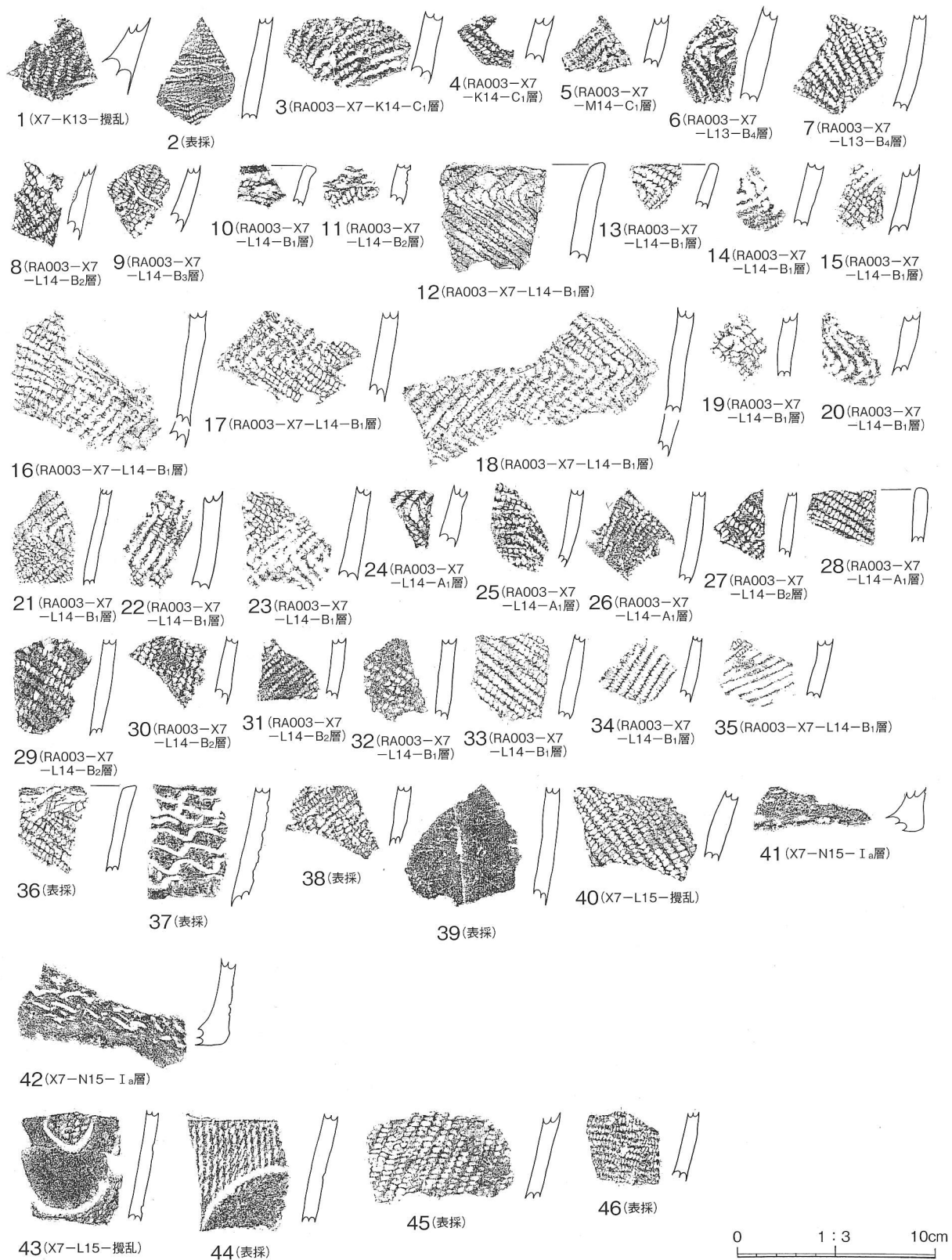
検出遺構 西黒石野遺跡第13次調査の結果、縄文時代前期の竪穴住居跡1棟、土坑4基、江戸時代の土坑墓10基を確認した。

縄文時代 縄文時代前期の竪穴住居跡は市内でもほとんど確認されておらず、当時の様相を知る上で貴重な成果となった。出土した土器は、器面にS字状連鎖縄文や網目状撚糸文を施す、所謂大木2a～b式に相当する土器が主体を占めている。土坑からの出土遺物は少ないものの、縄文時代後期に属するものと考えられ、フラスコ形やビーカー形の断面形状から貯蔵用の土坑と推定される。

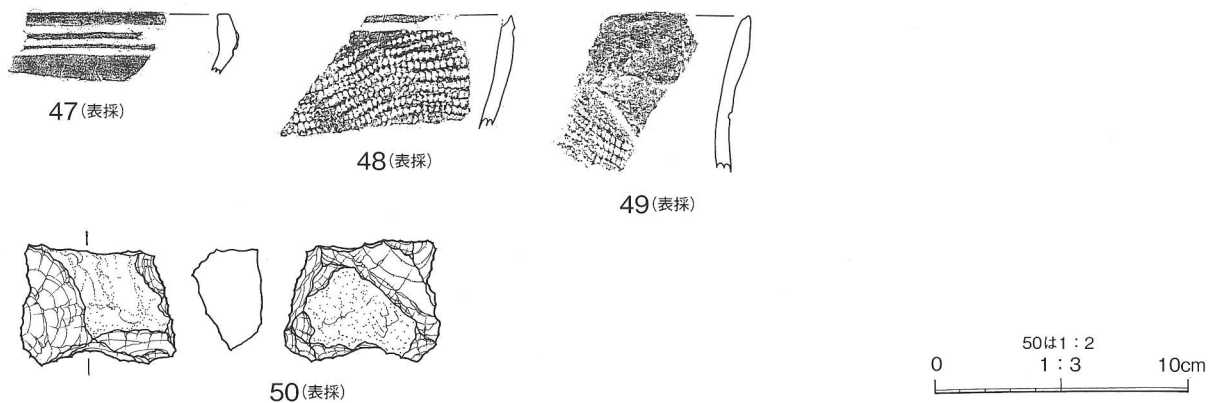
土坑墓 今回、確認された江戸時代の土坑墓は、その埋葬方法から2形態に分類される。一つは膝を抱えて座ったままの状態で見送る「座位屈葬」と、もう一つは横倒し状態の「横臥屈葬」である。RD1001～1003は平面形が方形の横臥屈葬で、RD1005～1007・1010は平面形が円形の座位屈葬に分類される。それ以外の土坑から人骨は出土していないが、平面形からRD1004・1008は座位屈葬、RD1009は横臥屈葬と考えられる。

副葬品 土坑墓には被葬者が生前使用していた物が、副葬品として納められている。陶磁器は二つの土坑墓から肥前と瀬戸の小杯が出土しているが、17世紀末～18世紀初頭に位置付けられるものである。陶磁器以外にも古銭、煙管、鏡、簪が出土している。古銭はいずれも寛永通寶で、第1期古寛永と第2・3期の新寛永に分類されるものである。煙管は形態分類から、概ね18世紀後半～19世紀のものと考えられる。鏡は柄鏡と円鏡の2種類が出土している。RD1003・1006出土の柄鏡の裏面には、南天文と「藤原光長」の鏡師銘が施されている。RD1002出土の柄鏡には南天文、桔梗文と「勝山正歳」の銘がある。『鏡師名寄』によると「藤原光長」は宝永六年(1709)と文久二年(1862)の例があるとしている。「勝山正歳」は、銘に記載されているが年代は不明である。

土坑墓の年代 横臥屈葬(平棺)は座位屈葬(桶形木棺)よりも古い形態であることが判明している(江戸遺跡研究会2001)。平棺の埋葬形式は17世紀初頭に出現し、終わりごろには消滅している。一方、桶形木棺による形式は、江戸時代を通じて近代まで存続している。埋葬形式のみで考えると平面方形のRD1001～1003・1009は17世紀に属すると考えられるが、副葬された陶磁器の年代から17世紀末～18世紀初頭と推測される。その他の土坑墓は桶形木棺であることから、埋葬形式のみでは年代を決定しがたいが、出土遺物の年代、特に煙管の形態から考えると19世紀以降のものが主体となると考えられる。つまり、二つの埋葬集団には1世紀ほどの時間の開きがあったと推測される。



第 10 図 遺物包含層出土土器 (1)



第 11 図 遺物包含層出土土器 (2), 石器

【引用・参考文献】

兵庫埋蔵銭調査会 1998 『近世の出土銭 II -分類図版編-』

江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』

Ⅲ. 小山遺跡（第35次調査）

1. 遺跡の概要

(1) 遺跡の環境

遺跡の位置 小山遺跡は盛岡市街地から南東に約2kmの盛岡市東中野町地内に所在する（第1図）。南に面した緩斜面に立地しており、以前は畑や果樹園を主体としていたが、現況は宅地開発が進み住宅地が広がっている。遺跡東側には砂溜遺跡、和田遺跡、仁反田遺跡が分布しており、小山遺跡群として包括されている。小山・砂溜遺跡の範囲は東西約1.2km、南北約0.8kmで入り込んだ埋没谷によって両遺跡は区分されている。標高は約130～160mである。

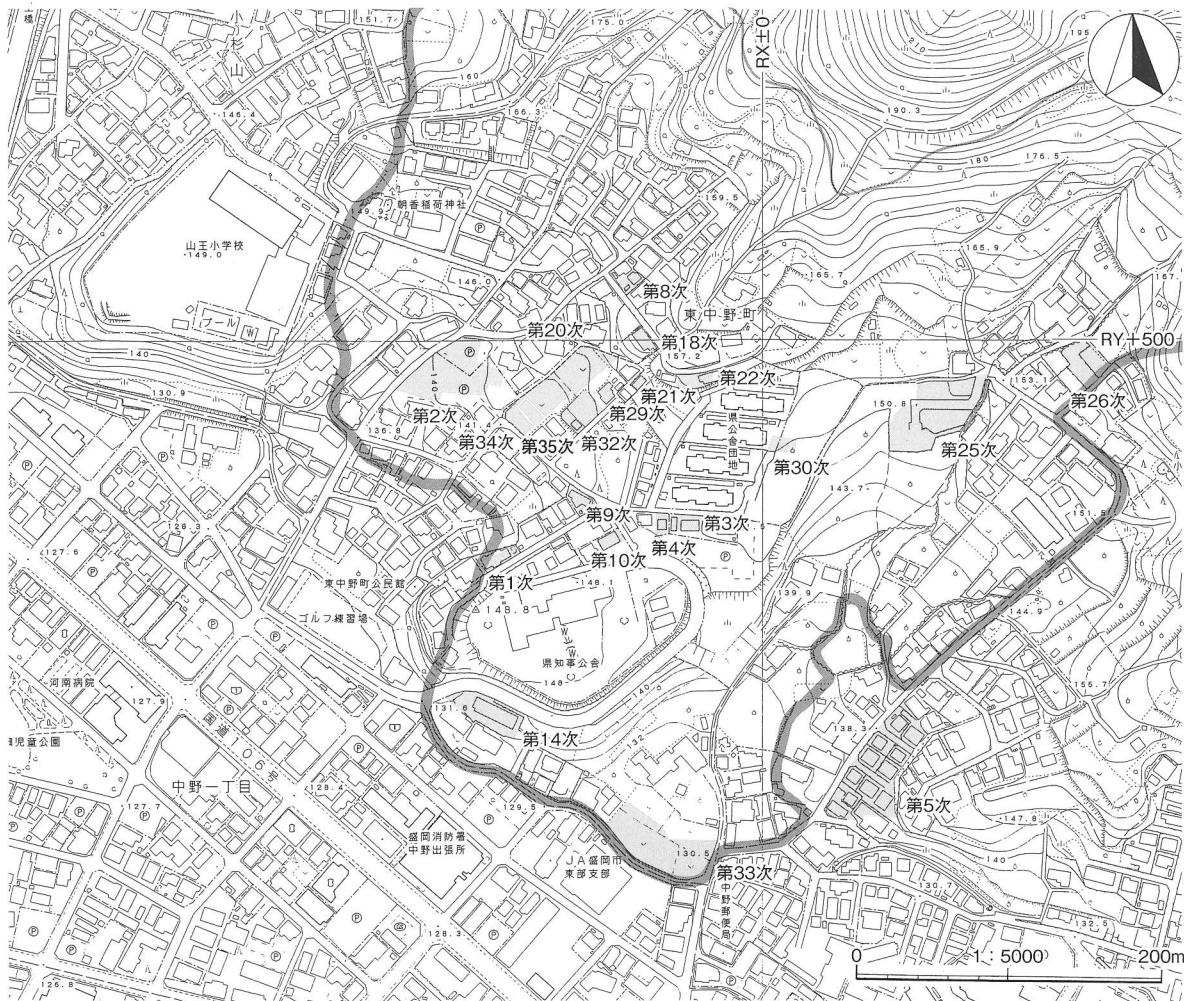
地形・地質 盛岡市東部は、北部北上山地と南部北上山地の主要な境界である早池峰構造帯の西縁部にあたり、小山遺跡が立地するのは早池峰構造帯を構成する建石山山地の西縁に発達する丘陵地上である。遺跡周辺は丘陵と埋没谷が入り組む地形でありながら、築川流域沿いに古い段丘面が残存する複雑な様相を持つ地域である。小山遺跡より東に約2km離れた川目C遺跡では赤色風化層に覆われた円礫層が確認されている。

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
試1	盛岡市東中野104-1	個人住宅建築	20㎡	82.08.10	遺構・遺物なし
試2	盛岡市東中野298-1	宅地造成	384㎡	82.10.26 82.10.29	平安時代竪穴住居跡、土坑 縄文時代前期～晩期包含層、竈道具
試3	盛岡市東中野町78-2	個人住宅建築	13㎡	86.12.09	縄文時代中期を主体とする遺構・遺物
試4	盛岡市東中野字水上79	共同住宅建築	5㎡	87.06.09	縄文時代中期を主体とする遺構・遺物
試5	盛岡市東山一丁目202-1外	宅地造成	250㎡	87.06.08 87.06.09	縄文時代中期の土器・石器
8	盛岡市東中野9-35	個人住宅建築	46㎡	88.08.01 88.08.04	縄文時代中期を主体とする遺物包含層
9	盛岡市東中野字水上23-3	個人住宅建築	100㎡	88.08.08 88.08.23	縄文時代中期を主体とする遺物包含層
10	盛岡市東中野町23-8	個人住宅建築	34㎡	88.08.29 88.09.02	縄文時代中期を主体とする遺物包含層
14	盛岡市東中野町108-1	共同住宅建築	414㎡	91.08.05 91.09.06	縄文時代貯蔵穴1基、中世堀跡1条 縄文土器・石器
試16	盛岡市東山一丁目361-7	共同住宅建築	219㎡	94.05.09	遺構・遺物なし
試18	盛岡市東中野町10番13号	個人住宅建築	97㎡	95.07.31 95.08.09	縄文時代中期の土坑1基、遺物包含層縄文土器
試20	盛岡市東中野町27-1	共同住宅建築	1,829㎡	97.04.21	縄文時代炉跡1基、遺物包含層、縄文土器
21	盛岡市東中野町28-3, 30-6	個人住宅建築	67㎡	97.06.09 97.06.30	縄文時代中期竪穴住居跡1棟、フラスコ状土坑2基、遺物包含層縄文土器、石器、土製品
試22	盛岡市東中野37-4, 37-5	個人住宅建築	52㎡	97.06.10	縄文土器
試25	盛岡市東中野町90-1ほか	宅地造成	190㎡	98.07.25	土師器
試26	盛岡市東山一丁目346-2	土地売却	116㎡	98.09.24	遺構・遺物なし
試29	盛岡市東中野町28-2	個人住宅建築	44㎡	00.10.26	縄文土器
試30	盛岡市東中野75-10, 75-11	個人住宅建築	52㎡	02.12.11 02.12.12	縄文時代中期竪穴住居跡数棟、遺物包含層 縄文土器、石器
試31	盛岡市東中野298-1	宅地造成	332㎡	05.09.13 05.09.14	縄文時代竪穴住居跡3棟、土坑5基、 竪穴建物跡2棟、遺物包含層
試32	盛岡市東中野町29-1	駐車場造成	71㎡	07.07.04	遺構・遺物なし
試33	盛岡市東中野町117番地1	駐車場造成	461㎡	07.07.05 07.07.06	平安時代竪穴住居跡10棟以上、土坑15基、江戸時代柱穴20口、溝7条、縄文土器、土師器、須恵器、近世陶磁器
試34	盛岡市東中野町17-1	個人住宅建築	84㎡	10.06.10	縄文時代遺物包含層、 縄文土器、土師器、須恵器、近世陶磁器
35	盛岡市東中野町17-1	個人住宅建築	200㎡	10.07.26 10.08.23	縄文時代前期末竪穴住居跡1棟、遺物包含層 縄文土器・石器

第4表 小山遺跡調査成果一覧

小山遺跡の南を流れる築川は、盛岡市と宮古市の境界である区界付近に源流を持ち、途中最大支流である根田茂川と合流して水量を増し東安庭で北上川に合流する。築川中～下流域には築川の流路移動によって形成された低位段丘が発達しており、川目A・B遺跡や沢田遺跡など縄文時代中期末葉以降の時代・時期を主体とする遺跡が立地する。一方で築川を見下ろす丘陵や高位段丘上には小山遺跡や川目C遺跡など縄文時代早期から中期の時代・時期を主体とする遺跡が立地する。

過去の調査 小山遺跡における考古学的調査研究の歴史は古く、特に遺跡群の中核をなす小山遺跡は、大正～昭和にかけて岩手県の考古学調査および文化財保護行政の先駆者であった小田島禄郎氏のコレクションの中にも実見することができる。昭和30年代になると、吉田義昭氏・奥健夫氏・古澤典夫氏による資料の収集が始まり、収集された資料は岩手大学草間俊一教授によって小山1類から7類に細分された。1類は前期末葉、2類は中期初頭から前葉にかけての円筒上層A・B式に類似する土器群、3類は円筒上層C式に類似する土器群、4・5類は中期初頭の五領ヶ台式に類似する土器群、6類は中期中葉の大木8a式に類似する土器群、7類は中期後葉の大木8b式に類似する土器群とした(1958 盛岡市史-先史期-)。しかし小山遺跡を含む小山遺跡群において組織的な発掘調査は昭和40年代後半まで実施されることはなく、さらに小山遺跡の中心部分であった舌状丘陵地では県知事公舎・県公舎団地が未調査に近いまま建設され、遺跡の大部分は壊滅状態にあると言える。昭和51年度から盛岡市教育委員会により住宅建設に係る試掘調査および本調査を実施している(第12図)。



第12図 小山遺跡全体図

2. 調査成果

(1) 平成 22 年度の調査

平成 22 年度の小山遺跡の発掘調査は、国庫補助事業として 1 件の個人住宅建築に係る事前本調査を実施した（第 35 次発掘調査）。

第 35 次調査 第 35 次調査区は、県知事公舎の北側、遺跡中央部の南に面する緩斜面に位置している。調査地点の標高は 140m 前後をはかる。調査期間は平成 22 年 7 月 26 日～8 月 23 日で、調査面積は 200㎡である（第 13 図）。

調査の結果、縄文時代前期末の竪穴住居跡 1 棟と調査区全面で縄文時代前～中期を主体とする遺物包含層を検出した。遺物包含層は北から南に傾斜する斜面に形成されていたが、上層部は耕作等により攪乱されていた。

(2) 縄文時代の遺構・遺物

RA001 竪穴住居跡（第 14 図）

時 期	前期末葉（併行）	平面形	楕円形	重複関係	なし
規 模	長軸上端 3.88m, 短軸上端 2.89m	掘込面	削平	検出面	Ⅱ b 層
埋 土	自然堆積によるもので、層相により A～B 層に大別される。 A 層—暗褐色土を主体とし、スコリア粒を含む褐色土の混入量で 3 層に細分される。 B 層—暗褐色土を主体とし、小塊状の褐色土、粒状の焼土を含む。				
炉の状態	床面中央に熱浸透が希薄な地床炉を確認した。規模は長軸 0.72m, 短軸 0.45m をはかる。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。深さは 0.58m をはかる。		床面の状態	ほぼ平坦	
柱 穴	東壁北寄りで 1 口検出した。直径 0.28m, 床面からの深さは 0.18m をはかる。				
土 器	（第 15 図 1～6） 1 は口縁直下の垂下隆線に交互刺突文が施される深鉢の口縁部である。2 は沈線による横位の鋸歯状文が施される深鉢口縁部である。4・5 は口縁直下に横位の原体圧痕文が 2 条並び、体部に結束羽状縄文を施す深鉢である。6 は隆線上に草の種子と見られる原体で疑縄文を押圧し、体部に押圧縄文が施される深鉢の体部である。				
石 器	（第 15 図 7） 7 は背面右側縁に調整を施す、頁岩製の削器である。				

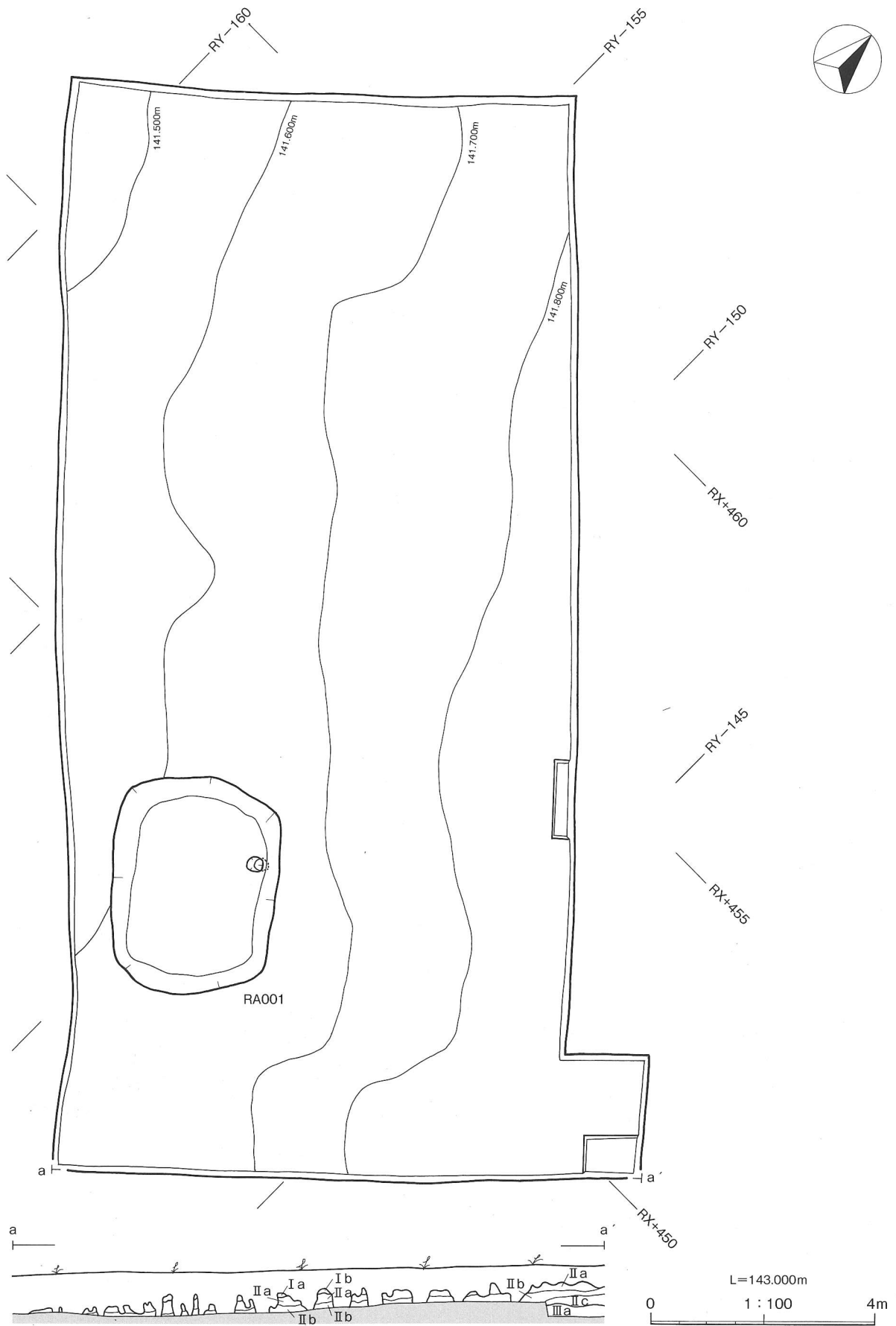
遺物包含層（第 13 図）

第 35 次発掘調査における調査区の基本土層は I～Ⅲ層に大別される。Ⅲ層以下は建物基礎の掘削が及ばないため、精査は行わなかった。

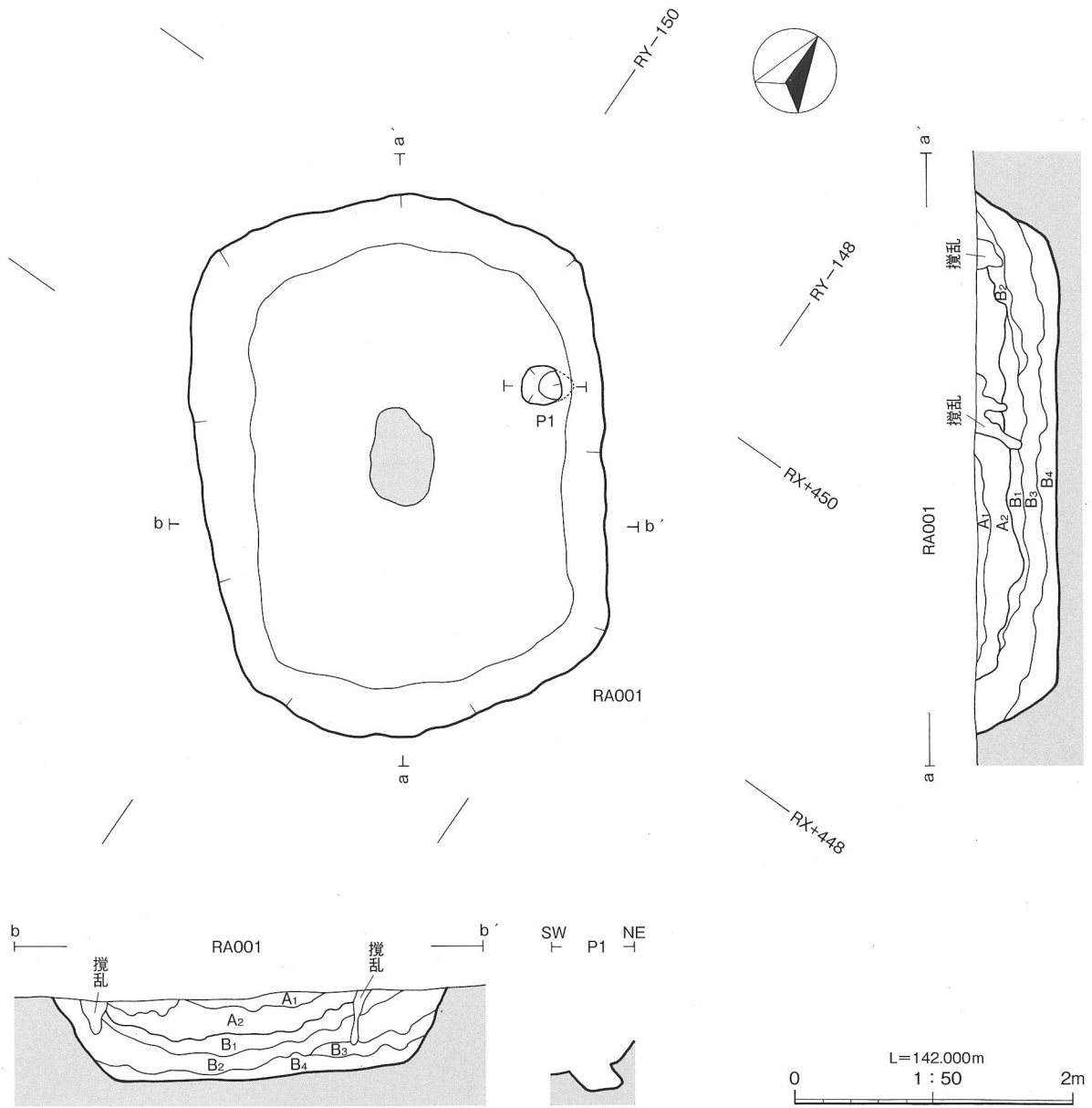
I 層—表土・耕作土。Ⅱ層—黒褐色土を主体とする層。Ⅱ a 層は暗褐色土を微量に含み、Ⅱ b 層は暗褐色土を少量含む。Ⅱ c 層は明るめの暗褐色土をやや多量に含む。

Ⅲ層—暗褐色土を主体とし、少量の褐色土とスコリア粒を含む。

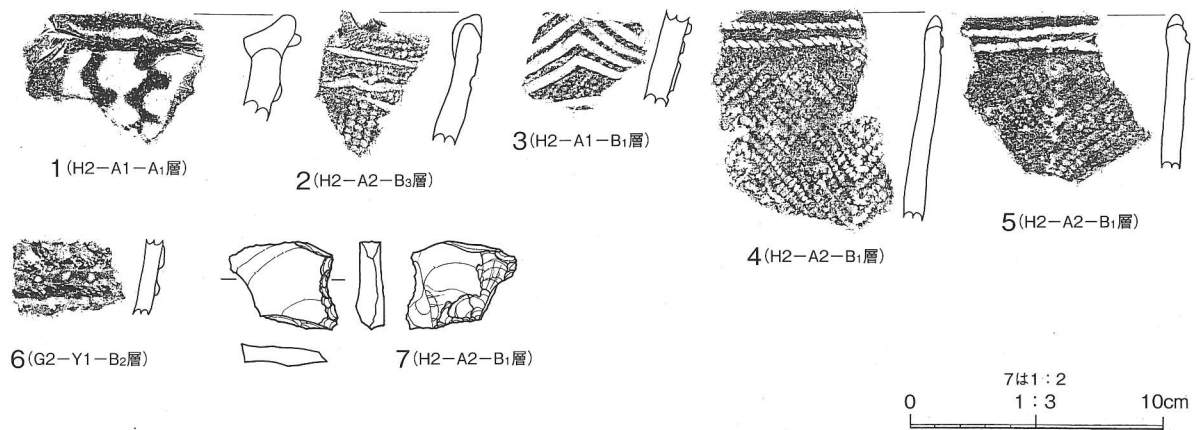
遺物は I a, Ⅱ a・b 層より出土しており、Ⅱ c, Ⅲ層からは出土しなかった。Ⅱ a 層は前～中期の遺物が、Ⅱ b 層は中～晩期の遺物が多い傾向にあるが、遺物による明確な層位差は確認されないことから、一次堆積の包含層ではなく周辺部からの流れ込みによる、二次堆積層と考えられる。



第13図 小山遺跡第35次調査区全体図

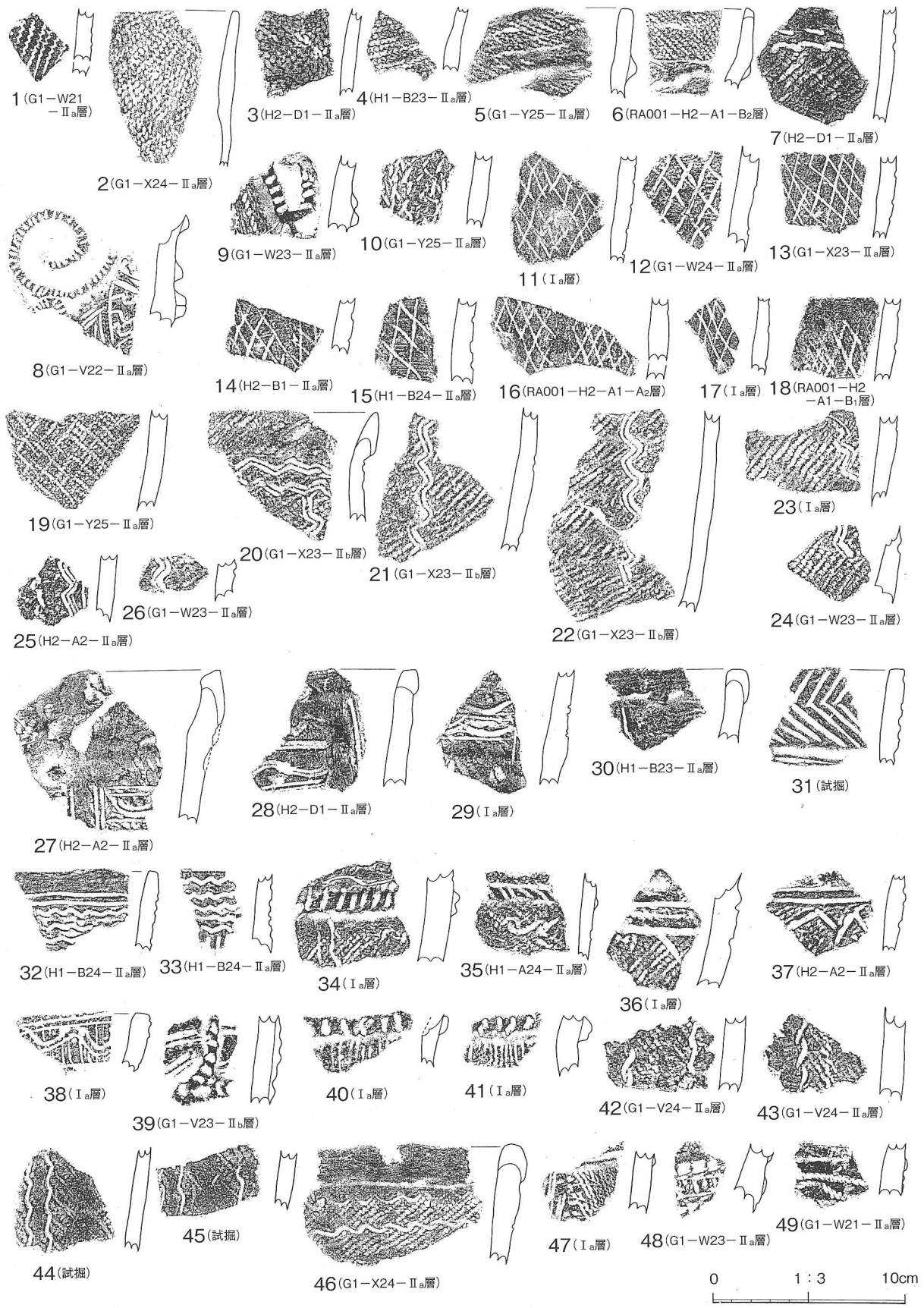


第 14 图 RA001 竖穴住居跡

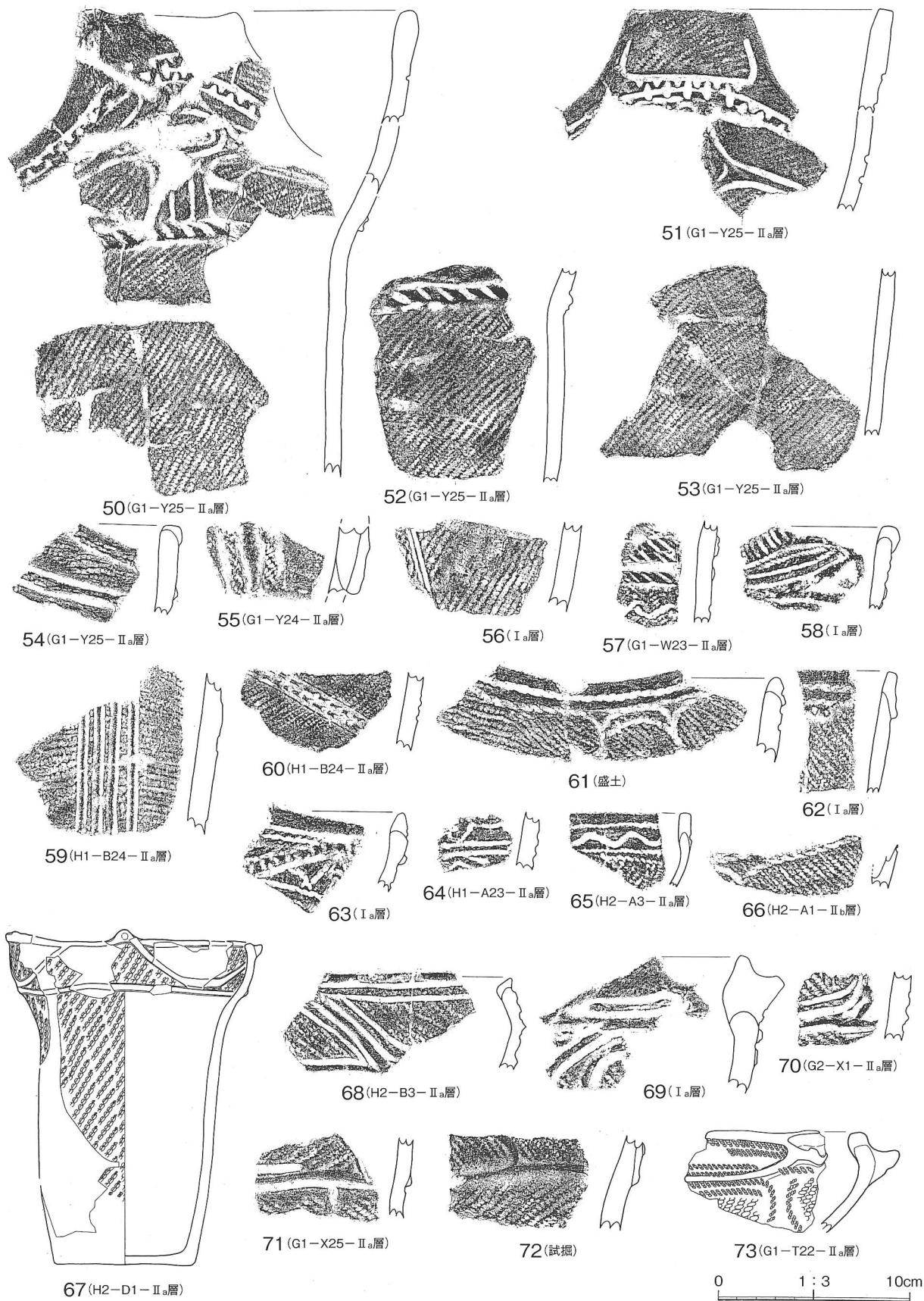


第 15 图 RA001 竖穴住居跡出土遺物

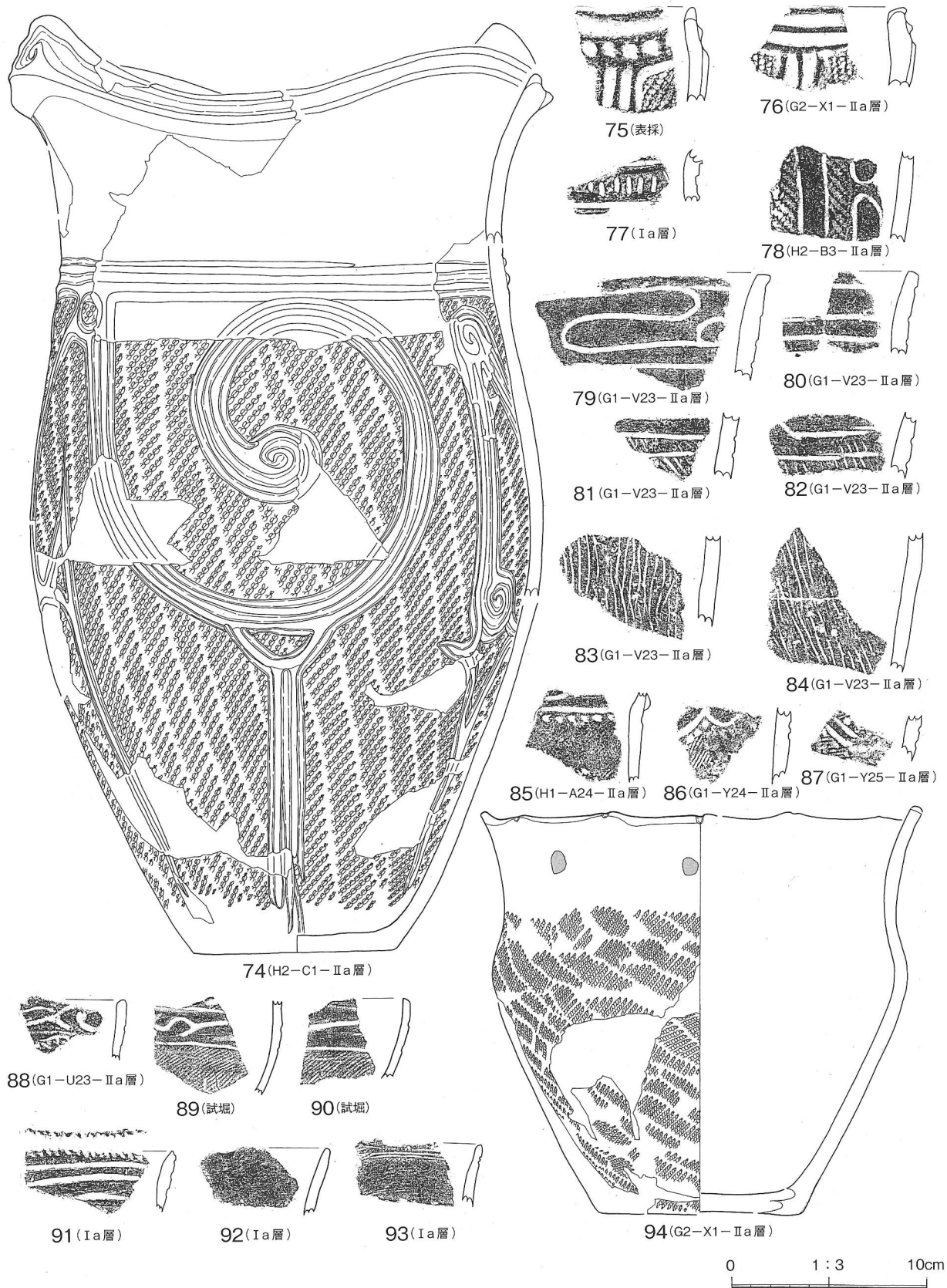
土 器 (第16図1～第18図94) 1は貝殻腹縁文を施す、早期寺ノ沢式の深鉢体部片である。2は口唇部に縄文が施される深鉢口縁部である。3・4は縄文が施文される深鉢体部である。5・6は地文に縄文を施文し複合口縁を呈する深鉢口縁部である。7は横位の原体圧痕が施される深鉢体部である。8・9は隆線上に刻目文を施す深鉢である。8は沈線による鋸歯状文を、9は撚糸文を体部に施す。10・19は附加条縄文が施される深鉢体部である。11～18は網目状撚糸文が施される深鉢体部片である。20～26は体部地文に縄文を施し、竹管による沈線で鋸歯状文を施文する深鉢である。27は口縁が波状を呈し、体部に竹管による沈線で区画文を施文する深鉢口縁部である。28は口縁から垂下する隆線文の間に竹管による沈線で曲線文を施文する深鉢口縁部である。29は沈線による鋸歯状文を施す深鉢体部である。30は沈線による波状文を施す深鉢口縁部である。31は口縁直下に矢羽状沈線文を施す深鉢口縁部である。32・33は沈線による鋸歯状文が施される深鉢である。34は隆線上に刻目を施す深鉢体部である。隆線直上には沈線による鋸歯状文が施文されている。35は隆線上に原体圧痕が施される深鉢である。36は横位平行沈線文を施す深鉢体部である。37・38は横位平行沈線文の下に鋸歯状文を施す深鉢である。38は鋸歯状文間に縦位の短沈線が施文される。39は縦位の隆線上に刺突文が施文される深鉢体部である。34・35は横位の隆線上に原体圧痕が施文される深鉢体部である。隆線下には縦位の沈線が充填されている。42～45は縦位の結節縄文が施される深鉢体部である。46は体部に結節縄文を施し、複合口縁を呈する深鉢口縁部である。47は横位隆沈線文と木目状撚糸文を施す深鉢体部である。48は竹管による押引文が施される深鉢体部である。49は原体圧痕による波状文が施される深鉢体部である。50～53は弁状突起を有する深鉢口縁部とその体部片である。50は弁状突起下部に交互刺突を施す沈線が巡り、その直下に沈線による襷文が施文される。頸部には刻目が付く横位の隆線が施される。51は弁状突起下部に交互刺突を施文する沈線が巡っている。54・55は隆線上に縄文を施す深鉢口縁部と体部である。54は二条の沈線文が波状に巡っている。56は二条の沈線文が施される深鉢体部である。57・58は隆線上に原体圧痕を施す深鉢体部と口縁部である。57は隆線下に結節縄文が施されている。58は原体圧痕による区画文が施文されている。59は4条の沈線による懸垂文が施される深鉢体部である。60は二条の隆線に刺突文が施される深鉢体部である。61は原体圧痕による文様が施される深鉢口縁部である。62は口縁直下に原体圧痕と隆線を巡らす深鉢口縁部である。63は原体圧痕による文様が施された深鉢口縁部である。64・65は沈線による鋸歯状文が施された深鉢体部と口縁部である。66は原体圧痕が施された浅鉢体部である。67は口縁部下に隆線による波状文を施すキャリパー形深鉢である。68は隆線による波状文が施されるキャリパー形深鉢の口縁部である。渦巻状の突起を持つキャリパー形深鉢の口縁部である。70は隆沈線による区画文が施される深鉢体部である。71・72は隆沈線が施されるキャリパー形深鉢の頸部である。73は渦巻状の突起を持ち原体圧痕による文様が施された浅鉢口縁部である。74は波状口縁を呈する深鉢である。頸部に平行沈線文を巡らし、体部器面には隆沈線による大渦巻文を2つ配している。その間は垂下する有棘渦巻文によって区画されている。75は口縁部直下に刺突文を施す深鉢口縁部で、体部には隆沈線による懸垂文が施文される。76は隆沈線による懸垂文が施される深鉢口縁部である。77は隆沈線による区画内に短沈線を充填する深鉢体部である。78は沈線によるU字文が施される深鉢体部である。79～82は同一個体で口縁部に沈線による曲線文を施文し、体部には縦位の撚糸文が施される深鉢である。85～87は沈線文と円形竹管による押引文が施される深鉢体部である。88は沈線による玉抱文を施す注口土器口縁部である。89・90は沈線による玉抱文を施す鉢体部である。91は口唇部に刻目文を施し口縁部に平行沈線文を巡らす深鉢口縁部である。



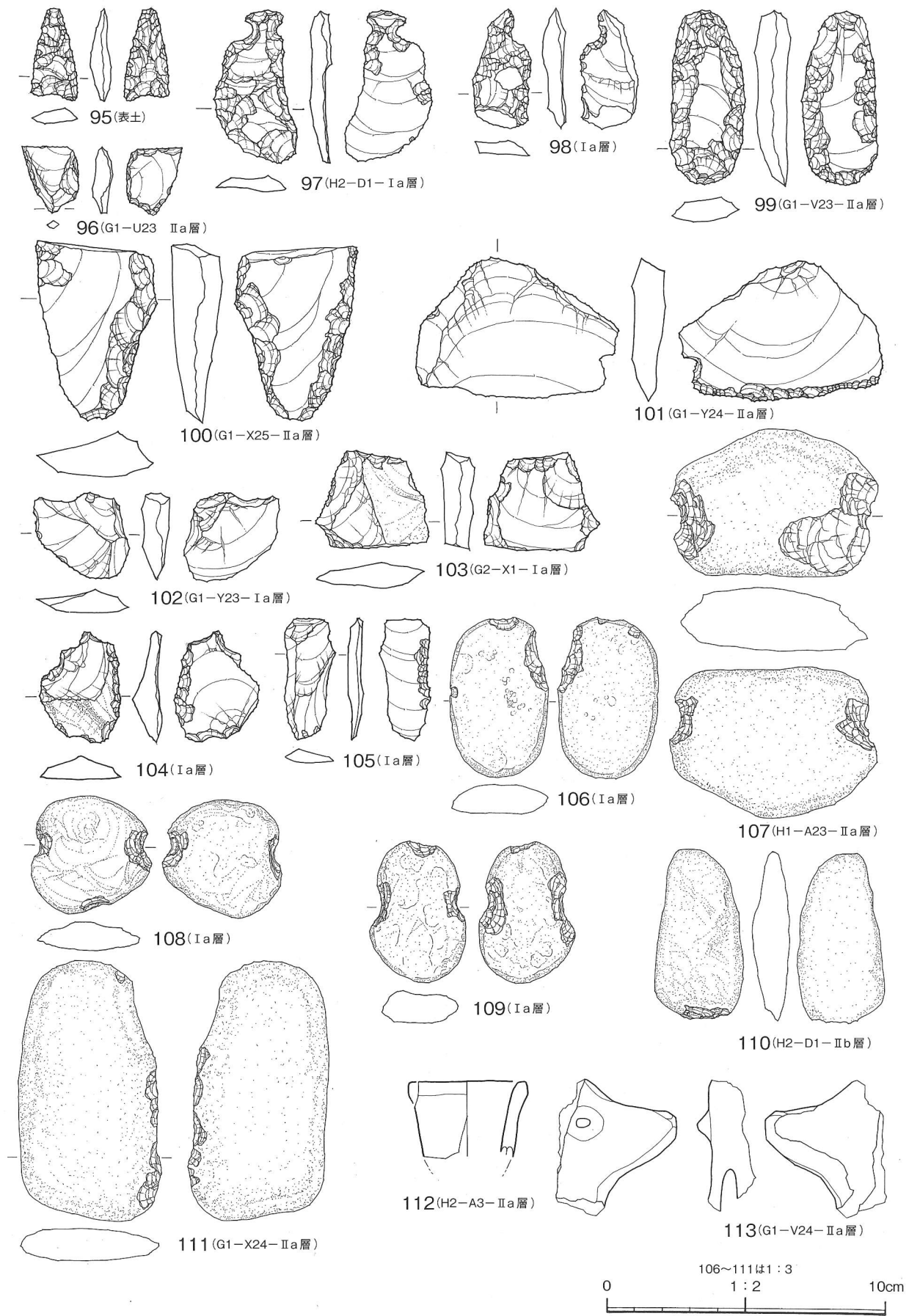
第 16 図 遺物包含層出土土器 (1)



第 17 図 遺物包含層出土土器 (2)



第 18 図 遺物包含層出土土器 (3)



第19図 遺物包含層出土石器，土製品

92・93は口唇部に刻目を施す甕口縁部である。93は平行沈線文と縄文が施される。94は刻目を施す小波状口縁を呈し、口縁部文様帯には朱による列点文が施文される甕である。体部には縄文が施される。

石器 (第19図95～111) 95は頁岩製の凹基無茎鏃である。先端部に衝撃剥離が観察される。96は先端部が欠損した石錐である。97・98は頁岩製に縦形石匙である。背面側縁に調整を施している。99は頁岩製の石篋である。両面全周に調整を施している。100は両面側縁に調整を施す頁岩製の削器である。101は腹面下端部に調整を施す頁岩製の削器である。102は背面側縁に調整を施す削器である。103は背面左側縁に調整を施す削器である。背面には原礫面が残る。104は背面右側縁と腹面左側縁に顕著に調整を施す削器である。105は腹面右側縁に調整を施す削器である。106～109は石錘である。106は砂岩製で先端部と右側縁に抉りを入れている。107～109は蛇紋岩製で両端部あるいは両側縁に抉りを入れている。110は蛇紋岩製の打製石斧である。111は砂質凝灰岩製の敲石である。側縁部に敲打痕が観察される。

土製品 (第19図112・113) 112はミニチュア土器である。113は板状土偶の左上半身である。中央部分に縦穴が穿たれている。

3. 総括

第35次調査および過去の成果を踏まえた結果、小山遺跡が立地する段丘縁辺の斜面には縄文時代～弥生時代中期の遺物包含層が形成されていることが明らかになった。

今回の調査では縄文時代前期～弥生中期の遺物包含層が確認されたが、層位差による土器の時期区分は明確でなく、また、図示はしていないが土師器等の平安時代の遺物も混入していることから、周辺部からの流れ込みによる二次堆積層と考えられる。過去の調査において、やはり層位的ではないものの縄文時代前期末～中期中葉の遺物が主体となっていることが確認されており、今次調査でも同様の傾向が確認された。

IV. 二又遺跡（第9・10次調査）

1. 遺跡の環境

（1）遺跡の概要

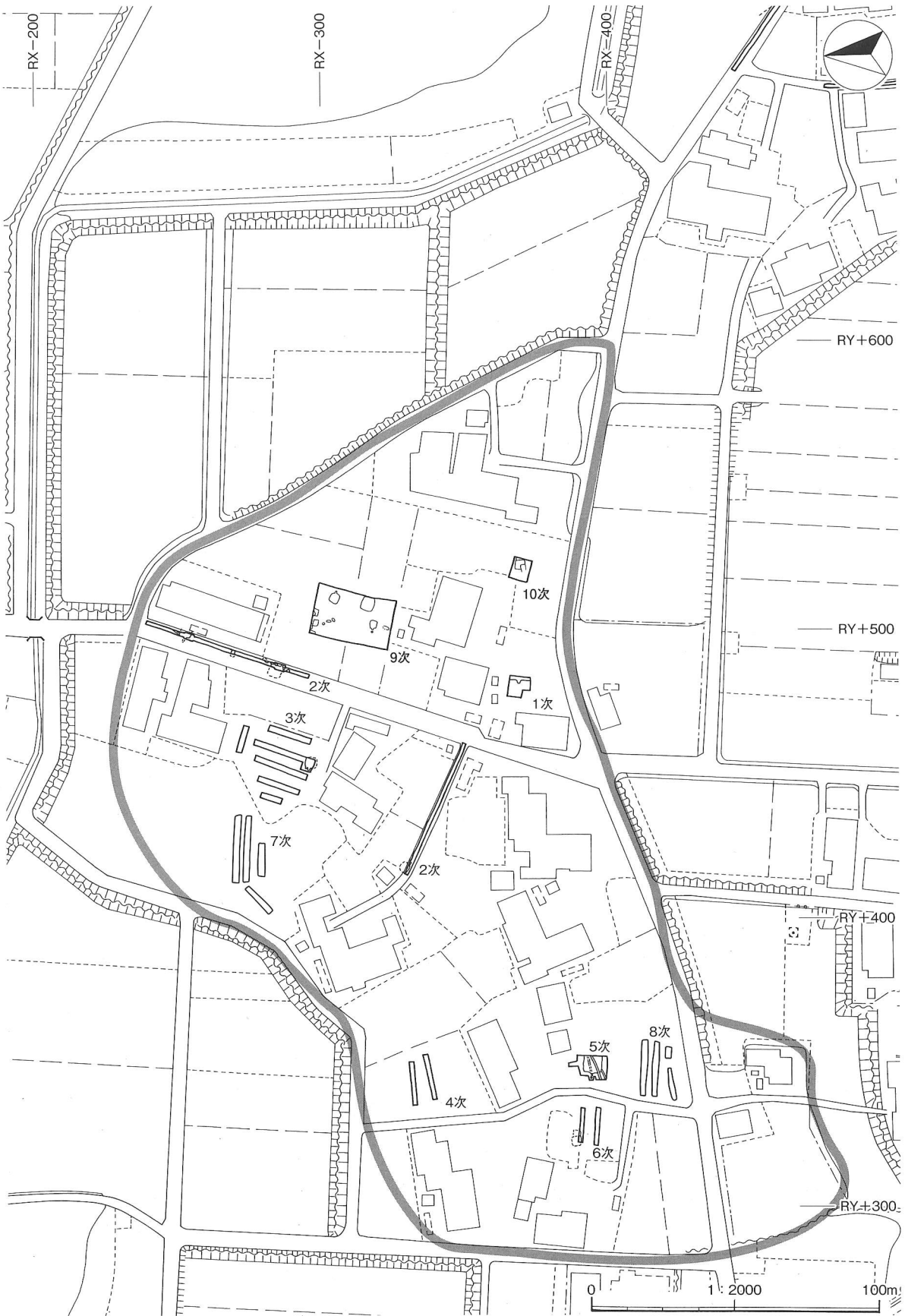
- 位置** 二又遺跡は、盛岡市街地より南西約4.2kmの盛岡市下飯岡1地割・2地割地内に所在する（第1図）。現況は宅地や水田、畑などの農地が主体となっている。遺跡範囲は南北約250m、東西約300mである。標高は約127mをはかる。
- 地形** 雫石川は奥羽山脈から東進し、雫石盆地を形成するが、北上平野に入る直前に鳥泊山と箱ヶ森に挟まれた北の浦付近で急激に流路が狭められる。この狭窄部を抜け北上川と合流するまでの間、南岸に沖積面を形成する。この沖積面における雫石川の流路の転換は激しく、過去に何度も大きく流路が変わったことが確認されている。二又遺跡は、この沖積段丘の微高地上に立地している。
- 周辺の遺跡** 雫石川によって形成された沖積段丘上には数多くの遺跡が立地する。縄文～古墳時代までの遺跡数は少ないが、奈良・平安時代の遺跡数は飛躍的に増加する。7世紀後半～8世紀代には太田蝦夷森古墳群などの末期古墳が築造され、野古A遺跡、台太郎遺跡、百目木遺跡などで竪穴住居跡が増加する。9世紀代になると志波城（803年）や徳丹城（812年）が造営され、周辺の集落は律令体制下に組みこまれていく。9世紀後半、志波城・徳丹城が廃城となり、その機能が胆沢城に集約されるとさらに周辺集落の数は増加する。

（2）過去の調査

二又遺跡の発掘調査は、平成8年度以降これまでに本調査3件、試掘調査5件を実施している。その結果、古代の竪穴住居跡10棟、土坑10基、溝跡1条を確認している（第20図）。

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
1	盛岡市下飯岡1-54	個人住宅建築	100㎡	96.04.03 96.05.02	平安時代竪穴住居跡
2	盛岡市下飯岡1地割地内	排水管敷設	230㎡	97.11.17 97.12.11	平安時代竪穴住居跡、土坑、溝跡 土師器 須恵器
試3	盛岡市下飯岡1-49-2	個人住宅建築	98㎡	99.06.11	平安時代竪穴住居跡(保存)
試4	盛岡市下飯岡1-83	農作業小屋建築	49.6㎡	03.04.07	遺構・遺物なし
5	盛岡市下飯岡1-35-1	個人住宅建築	77㎡	03.09.01 03.09.18	平安時代竪穴住居跡、溝跡 時期不明溝跡 土師器 須恵器
試6	盛岡市下飯岡1-21-2、21-6	個人住宅建築	37㎡	04.03.04	平安時代竪穴住居跡(保存)
試7	盛岡市下飯岡1-44	個人住宅建築	116㎡	04.04.06	平安時代竪穴住居跡(保存)
試8	盛岡市下飯岡1-34	個人住宅建築	118㎡	08.10.26	溝跡1条(近現代以降)
9	盛岡市下飯岡1-59-9	個人住宅建築	500㎡	10.05.06 10.06.10	平安時代竪穴住居跡、竪穴状遺構 土坑、土師器、須恵器
10	盛岡市下飯岡1-55-1	農業用倉庫建築	40㎡	10.06.04 10.06.09	平安時代竪穴住居跡 土師器、須恵器

第5表 二又遺跡調査成果一覧



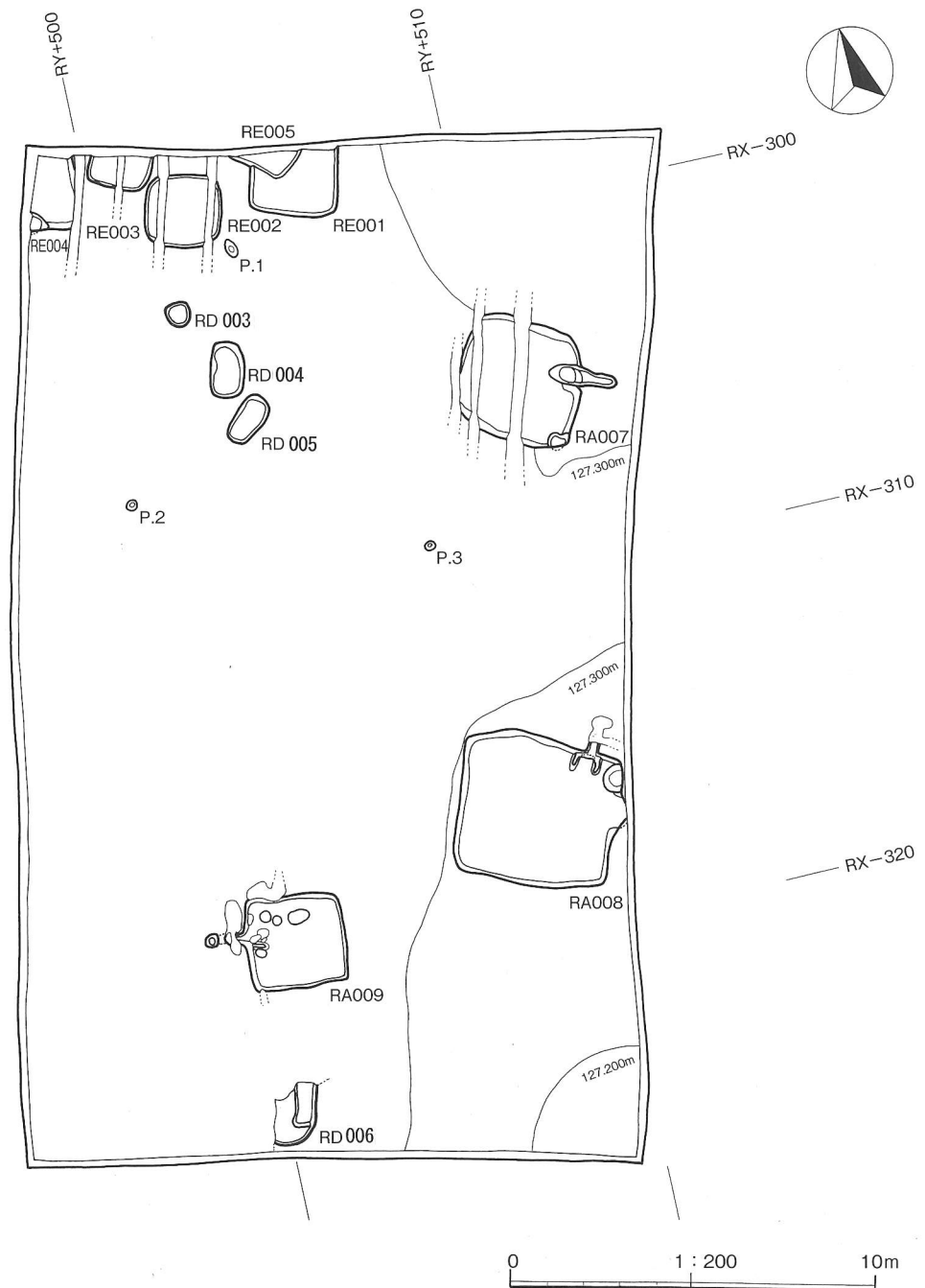
第 20 図 二又遺跡全体図

2. 調査成果

(1) 二又遺跡第9次調査

第9次調査区は遺跡中央部に位置する。市内遺跡群発掘調査事業（国庫補助）として個人住宅新築の試掘調査を実施した結果、現地表面下約25～40cmで遺構が検出されたため、申請範囲の全面本調査に切り替えて精査を行った。調査期間は平成22年5月6日から6月10日まで行い、調査面積は500㎡である（第21図）。

検出遺構 検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡3棟、竪穴建物跡5棟、土坑3基である。



第21図 二又遺跡第9次調査区全体図

(2) 古代の遺構・遺物

RA007 竪穴住居跡 (第22図)

位置	調査区北東	平面形	方形	主軸方向	E25° S
規模	南北 3.25m × 東西 3.36m				
重複関係	なし	掘込面	削平	検出面	褐色シルト層上面
埋土	自然堆積によるものである。A～B層に大別される。 A層—黒色土を主体に黄褐色シルトを粒～塊状に含む。2層に細別される。 B層—黒褐色土を主体に黄褐色シルトを粒状に多量に含む。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.17～0.25mで、外傾して立ち上がる。				
床の状態	床面はほぼ平坦である。層厚0.03～0.29mの構築土(L1層)で、黒褐色土に黄褐色シルトを粒～塊状と火山灰を少量含む。L2層は黒褐色土に黄褐色シルトを塊状に大量に含む。				
かまど	かまどは東壁北寄りに位置し、煙道平面形は溝状で、底面は住居の床面から一段高い構造を呈する。煙道内にはかまど崩壊土(J層)が堆積している。煙道の規模は基底部中央から煙出しの先端までの長さが1.25m、幅0.29m、深さは0.07mをはかる。煙出しは検出されなかったが、削平された可能性がある。				
燃焼部	かまど基底部は南側のみが残存する。褐色土を主体とする、暗褐色シルトとの混合土(K層)で構築されている。規模は、長さ0.54m、幅0.18m、高さ0.12mをはかる。火床面はみられない。住居廃絶後に多量の遺物を意図的にカマド内に廃棄している。				
ピット	ピットは床面上で1口検出した。床面からの深さはP1-0.27mである。ピット内の埋土(B層)は暗褐色土を主体に粒～塊状のい黄褐色シルトを多量に含む層である。				
遺物	(第25図1～第26図12) 1は土師器の坏である。内面にミガキが施されていたと考えられるが、ほぼ磨滅している。2～4はあかやきの坏である。いずれも底部は回転糸切で無調整である。5は土師器の坏である。内側は黒色処理後ヘラミガキが施されている。7はあかやきの球胴甕である。外面にヘラケズリが施されている。煤が付着している。8～11は須恵器の甕である。8・9は同一個体で外面に平行タタキ(一部格子目状)が施されている。10～12は外面に平行タタキがみられる。				

RA008 竪穴住居跡 (第23図)

位置	調査区南東	平面形	方形	主軸方向	N30° E
規模	南北 4.2m × 東西 4.4m				
重複関係	なし	掘込面	削平	検出面	褐色シルト層上面
埋土	自然堆積によるものである。A～C層に大別される。 A層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に少量含む。 B層—暗褐色土を主体に褐色シルトを粒～塊状に含む。 C層—黒褐色土を主体に黄褐色シルトを粒～塊状に含む。4層に細別される。C1層とC3層は火山灰を少量含み、C3層は褐色シルトの割合が若干多い。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.25～0.35m、外傾して立ち上がる。				
床の状態	床面はほぼ平坦である。層厚0.03～0.15mの構築土(L層)で、褐色シルトに黒褐色土を粒状に含む混合土である。				

- かまど** かまどは北壁東寄りに位置し、煙道平面形は溝状である。底面は住居の床面から一段高い構造を呈するが、攪乱によりほとんど残存していない。煙道内にはかまど崩壊土（J層）が堆積している。J層は黒褐色土と黒色土を主体とし、塊状の黄褐色シルトや粒～塊状の焼土を少量含む。混入土の割合により7層に細別される。残存している煙道の規模は、基底部中央から煙出しまでの長さが0.95m、幅0.24m、検出面から煙出し底面までの深さは0.17mである。
- 燃焼部** かまどの基底部は角礫・円礫などを心材として構築し、褐色シルトを主体とする黒色土の混合土（K層）で石組み部を覆っている。西側基底部の規模は、長さ0.51m、幅0.17m、高さ0.24mをはかり、東側基底部は、長さ0.56m、幅0.18m、高さ0.20mである。基底部および天井部は被熱しているものの底面にはほとんど火床面は認められない。底面中央部に意図的に逆さまにした高台付あかやき坏を重ねて置いてある。
- 貯蔵穴** 貯蔵穴は床面上で2口検出した。貯蔵穴1の口縁は1.15m、深さは0.77mである。貯蔵穴1内にはかまどの崩壊土（J1層）が流れ込んでおり、その後住居の埋土が堆積している。貯蔵穴2は東壁面を抉るように造られている。埋土（D層）は黒褐色土を主体とし、粒～塊状の褐色シルトを少量と微量の焼土を含む。
- 遺物（第27図1～15）** 1～4はあかやきの高台付坏である。1～3は口縁部が外反し、厚さ1.5～2cmほどの柱状高台が付いている。4はハの字に開くリング状の高台が付く。5～9はあかやきの坏である。底部は回転糸切の無調整である。5は磨滅しており、ゆがみもみられる。10～15は土師器の坏である。10は内面に黒色処理の後ヘラミガキが施され、外面はロクロ成形の後、部分的にヘラミガキがみられる。11は内外に黒色処理とヘラミガキが施されている。底部は回転糸切の無調整である。12は、内外面に黒色処理とヘラミガキがみられる。13は、内面に黒色処理の後ヘラミガキが施されているが、磨滅が著しい。外面もヘラミガキがみられる。底部はヘラケズリが施されている。14は内面の黒色処理の後ヘラミガキを施している。15は内面に黒色処理の後ヘラミガキがみられる。

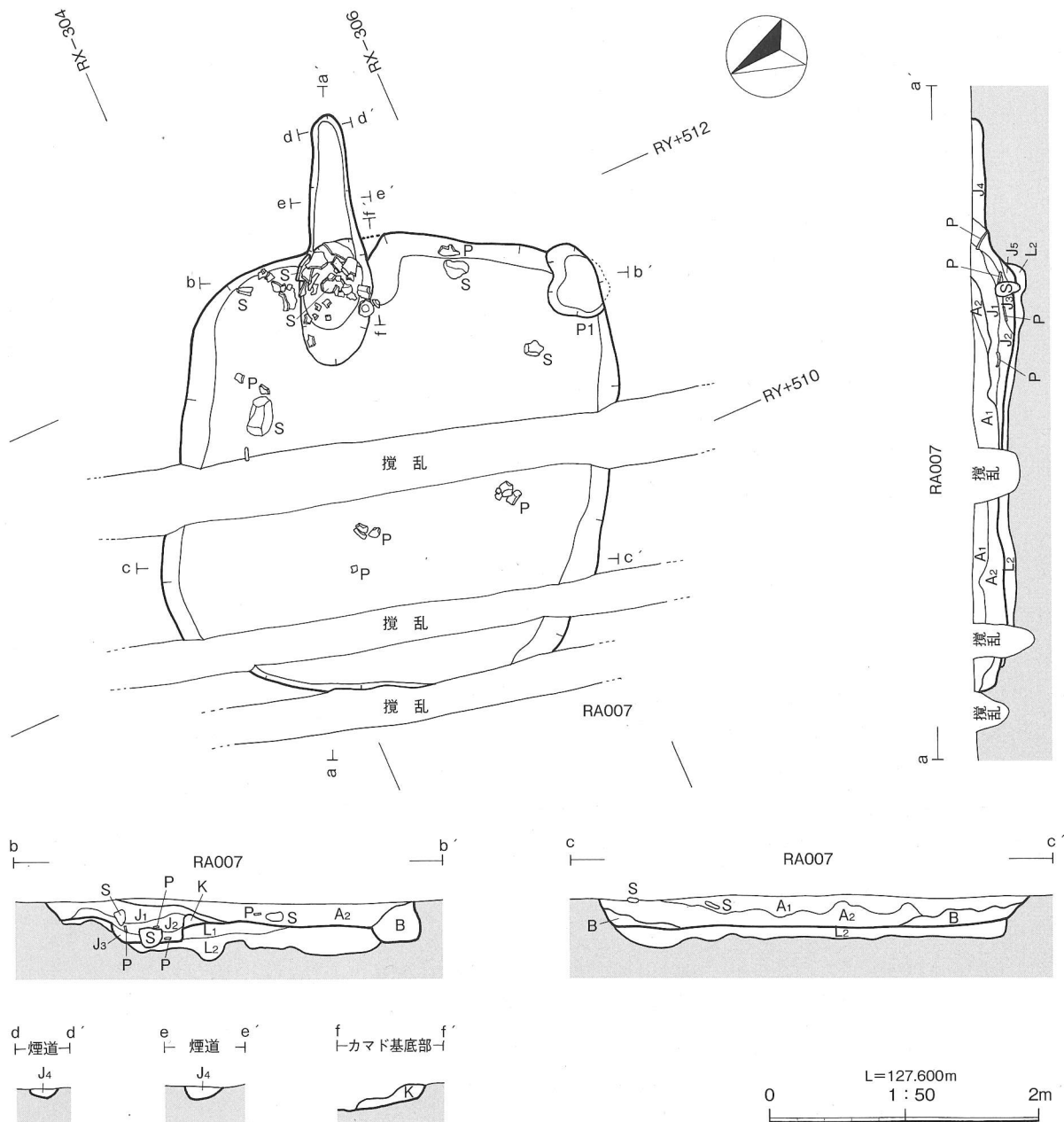
RA009 竪穴住居跡（第24図）

- 位置** 調査区南東 **平面形** 方形 **主軸方向** ほぼ北
- 規模** 南北2.75m×東西2.62m
- 重複関係** なし **掘込面** 削平 **検出面** 褐色シルト層上面
- 埋土** A層以外は自然堆積によるものである。A～C層に大別される。
A層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粒～塊状に含む。人為堆積。
B層—黒褐色土を主体に黄褐色シルトを粒～塊状に少～多量含む。3層に細別される。
C層—褐色シルトを主体に黒褐色土を粒状に少量含む
- 壁の状態** 検出面から床面までの深さは0.25～0.35mで、外傾して立ち上がる。
- 床の状態** 床面はほぼ平坦である。構築土（L層）の厚さは0.01～0.16mで、暗褐色シルトに黒色土と褐色シルトを塊状に微量に含む。
- かまど** かまどは東壁中央に位置し、煙道は中間部分が削平されているが刳り貫きのトンネル状である。断面は不整形を呈し、底面は煙出しに向かって緩やかに傾斜している。煙道内にはかまど崩壊土（J層）が堆積している。J層は黒色土と暗褐色土を主体とし、塊状の褐色シルトや焼土、微量の炭化物を含む。混入土の割合により5層に細別される。煙道の規模は燃焼部から煙出しの先端までの長さが1.65m、幅0.25m、底面から天井までの高さは0.24m、検出面から煙出し底面までの深さは0.47mをはかる。

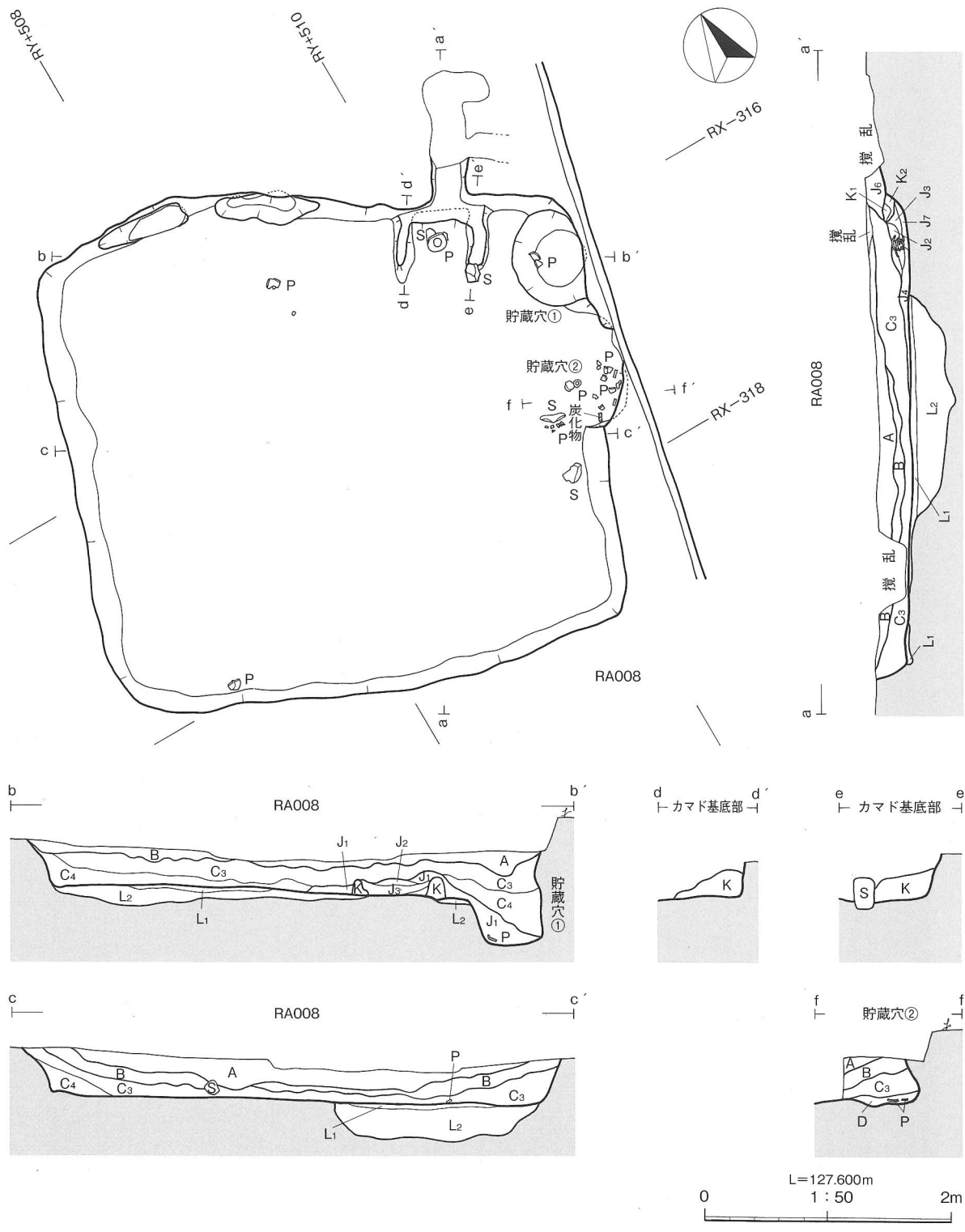
燃 焼 部 かまど基底は南側のみ残存し、褐色シルトを主体とする黒色土との混合土（K層）で構築されている。規模は、長さ0.59m、幅0.17m、高さ0.23mをはかる。火床面は0.33×0.25mの範囲で、熱浸透層の厚さは0.02mである。

ピ ッ ト ピットは床面上で4口検出した。それぞれの床面からの深さはP1-0.22m、P2-0.14、P3-0.17、P4-0.30である。P1～3の埋土（B層）は暗褐色土を主体に粒状の焼土と炭化物を含む層である。P4の埋土（D層）は、黒褐色土を主体に焼土を粒状に少量含む。4層に細別される。

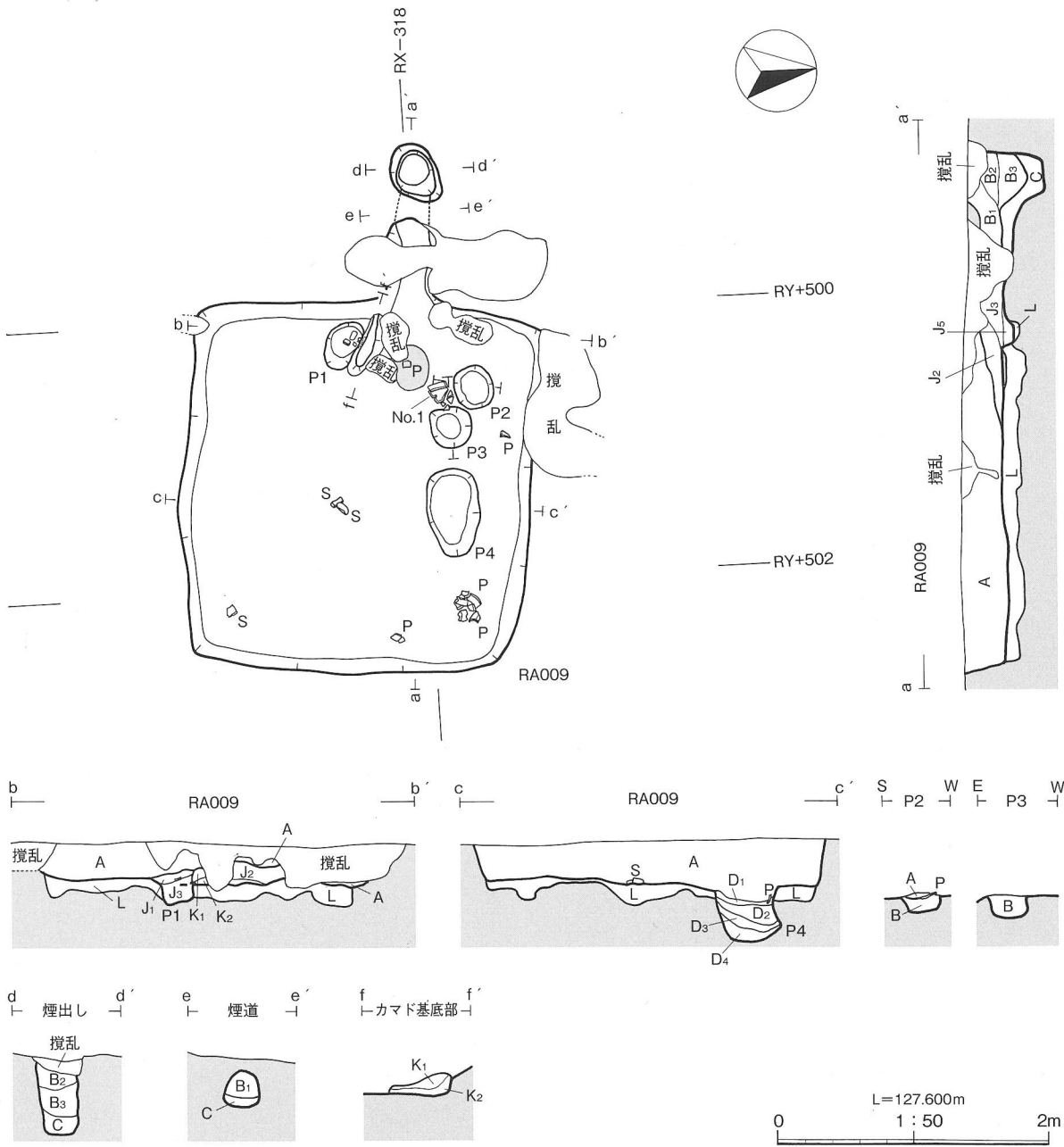
遺 物 (第31図1～3) 1は須恵器の坏である。底部は回転糸切の無調整である。2・3は土師器の坏である。2は、内面に黒色処理の後ヘラミガキが施され、外面はロクロ成形のち部分的にヘラミガキが施されている。3は内外に黒色処理とヘラミガキが施されている。4は土師器の甕である。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデが施されている。



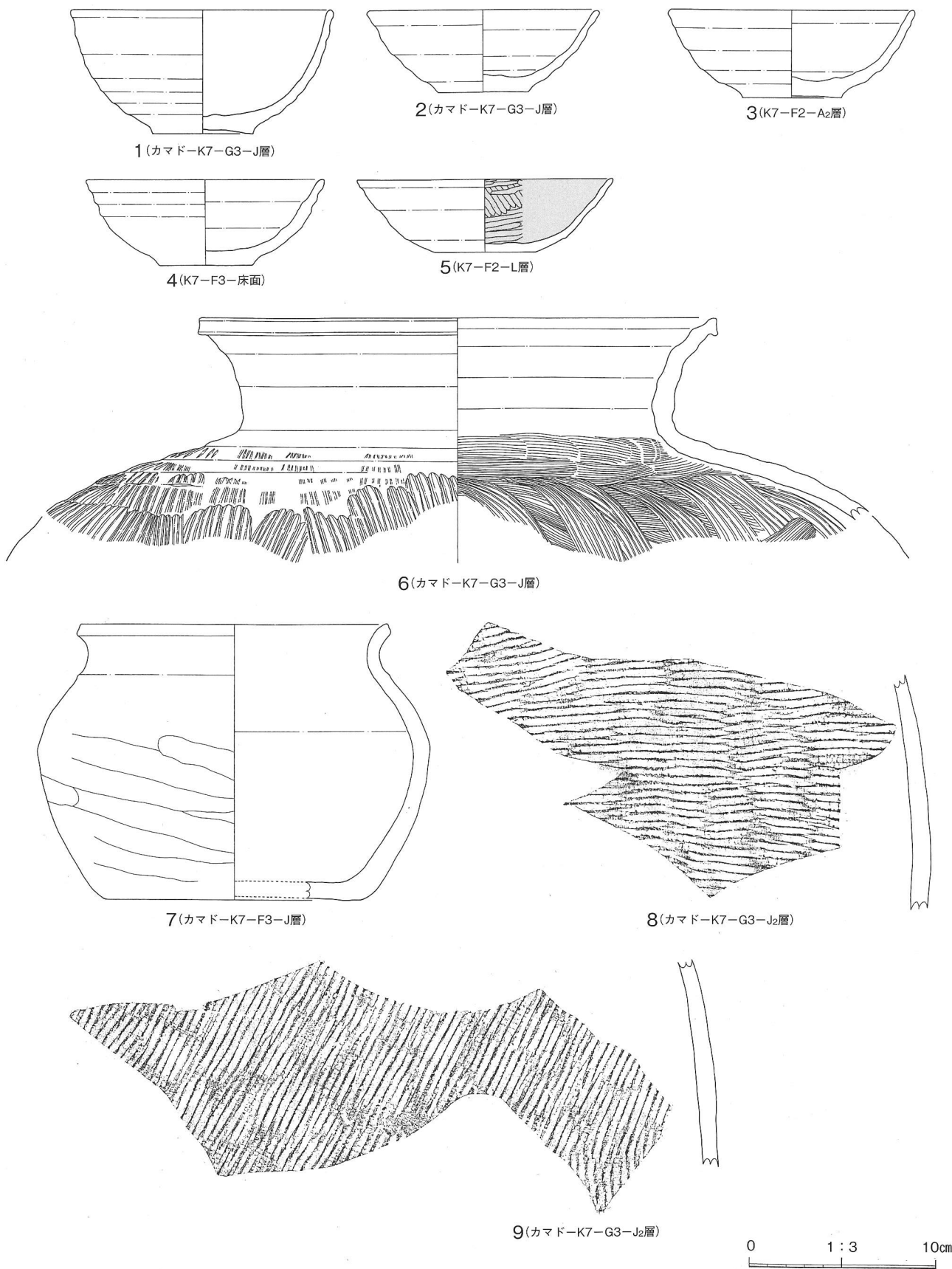
第 22 図 R A 007 竪穴住居跡



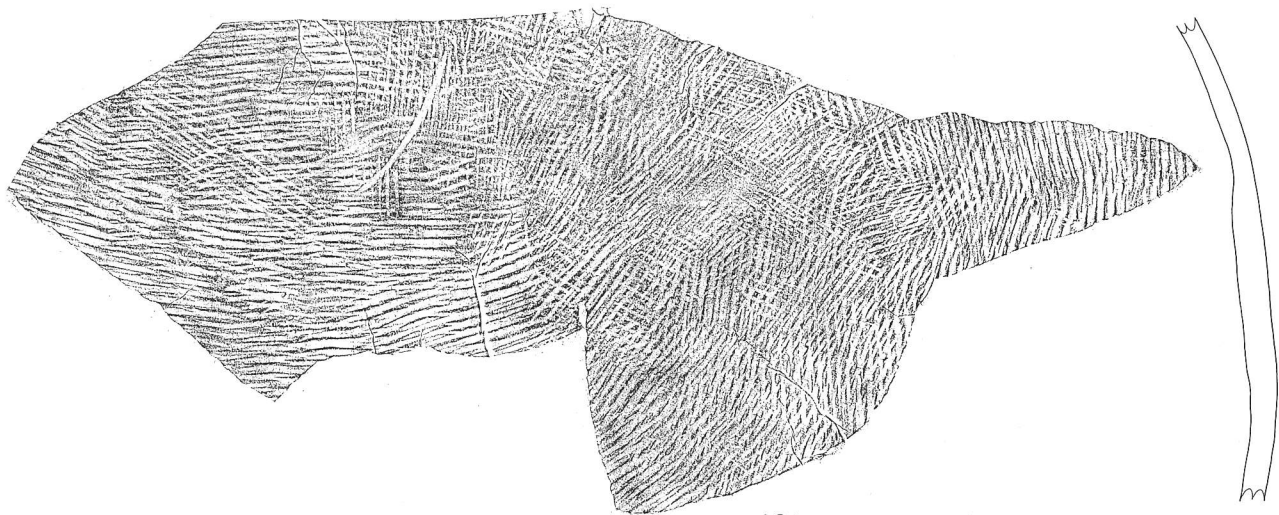
第23図 RA008 竪穴住居跡



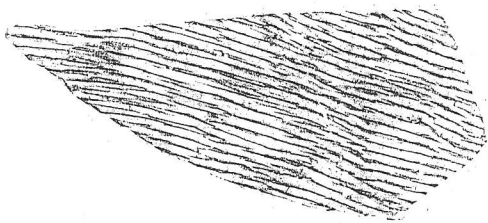
第 24 図 RA009 竪穴住居跡



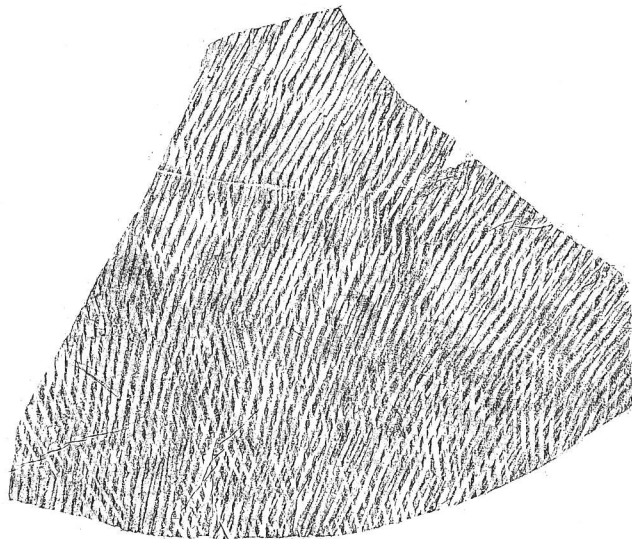
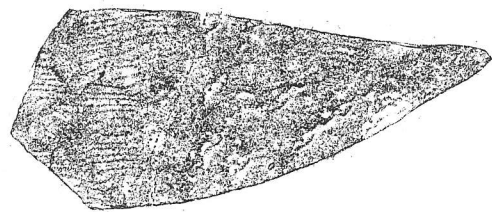
第 25 図 R A007 竪穴住居跡出土遺物 (1)



10(カマド-K7-G3-J層)



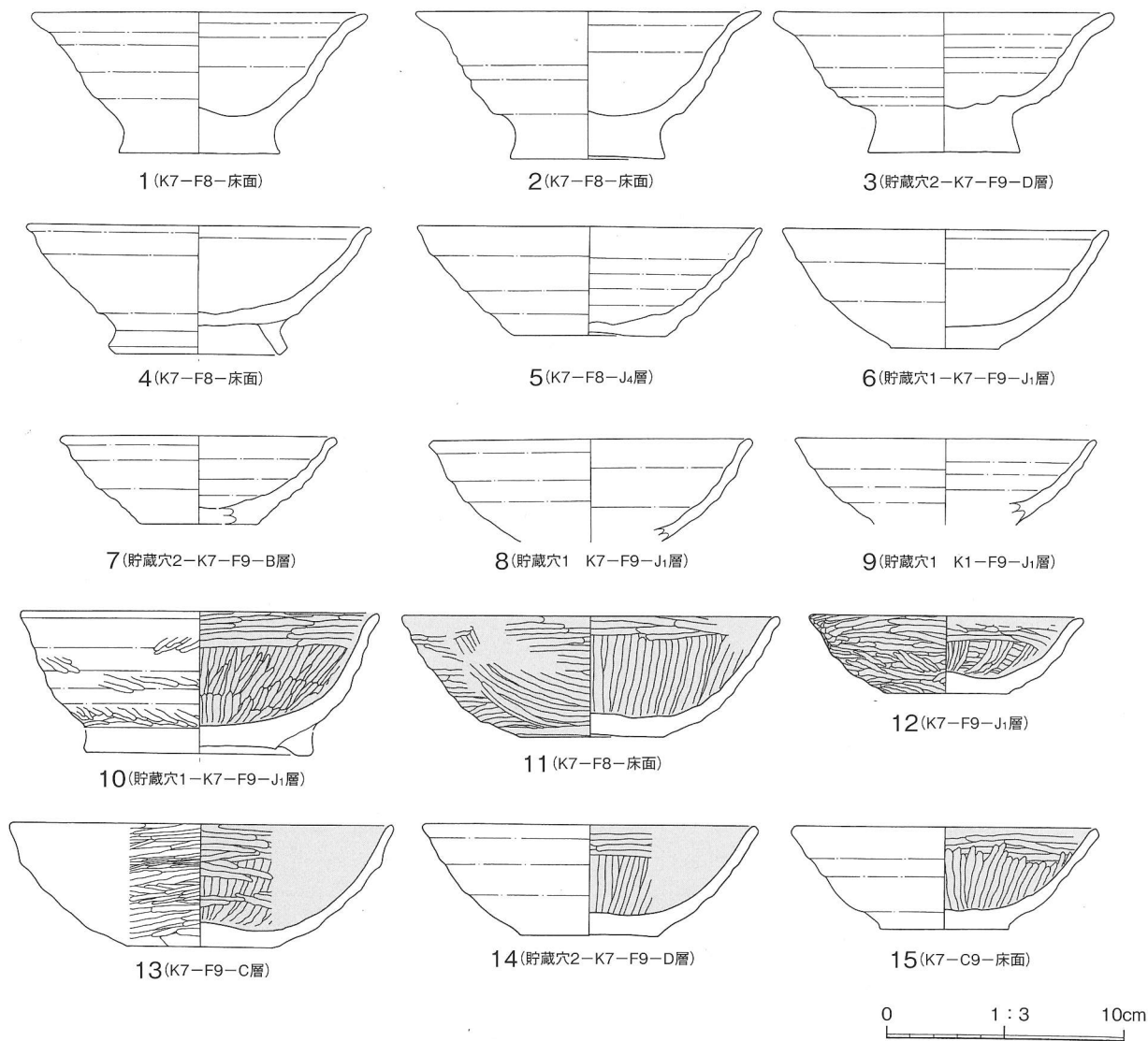
11(K7-F3-J₂層)



12(カマド-K7-G3-J層)

0 1:3 10cm

第26図 RA007 竪穴住居跡出土遺物(2)



第 27 図 R A 008 竪穴住居跡出土遺物

RE001 竪穴跡 (第 28 図)

位置 調査区北西 平面形 方形か 重複関係 RE005 を切る。
規模 東南—西北 2.40m×南東—北西 1.83m以上 (調査区外)
掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋土 自然堆積によるものである。A～D層に大別される。
A層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に微量に含む。2層に細別される。
B層—黒色土を主体に褐色シルトを粒～塊状に含む。
C層—暗褐色土を主体に褐色シルトを粒～塊状に多量に含む。
D層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粒～塊状に少量含む。
壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.29～0.37mで、外傾して立ち上がる。
床の状態 層厚 0.01～0.04mの構築土 (L層) で、黄褐色シルトに黒褐色土を粒状に含む混合土である。
遺物 (第 31 図 5) 5 はあかやきの坏である。底部は回転糸切り無調整である。

RE002 竪穴跡 (第 29 図)

位置 調査区北西 平面形 方形 重複関係 なし
規模 東南—西北 2.13m×南東—北西 2.00m
掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋土 自然堆積によるものである。A～B層に大別される。
A層—黒色土を主体に褐色シルトを粒状に多～少量含む。3層に細別される。A1層は白色火山灰を粒状に少量含む。
B層—黒色土を主体に褐色シルトを粒～塊状に含む。
壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.19～0.26mで、外傾して立ち上がる。
床の状態 層厚 0.01～0.09mの構築土 (L層) で、黄褐色シルトに黒褐色土を粒状に含む混合土である。
遺物 (第 31 図 6) 6 は底部回転糸切り無調整のあかやきの坏である。磨滅が著しい。

RE003 竪穴跡 (第 29 図)

位置 調査区北西 平面形 方形か 重複関係 なし
規模 東南—西北 1.75m×南東—北西 0.82m以上 (調査区外)
掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋土 自然堆積によるものである。A～B層に大別される。
A層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に少量含む。
B層—黒色土を主体に褐色シルトを粒状に少量含む。
壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.17～0.24mで、外傾して立ち上がる。
床の状態 層厚 0.03～0.10mの構築土 (L層) で、暗褐色シルトに褐色シルトを粒状に含む混合土である。
遺物 図示していないが、平安時代の土師器・須恵器・あかやき土器片が出土している。

RE004 竪穴跡 (第 29 図)

位置 調査区北西 平面形 方形か 重複関係 なし
規模 南東—北西 1.94m×東南—西北 1.11m以上 (東側攪乱, 西側調査区外)
掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋土 自然堆積によるものである。A～C層に大別される。

A層—黒褐色土を主体に黄褐色シルトを粒～塊状に少量に含む。

B層—黄褐色シルトを主体に黒褐色土を粒～塊状に含む。

C層—黒色土を主体に黄褐色シルトを塊状に多量に含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.34～0.47mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 層厚0.04～0.12mの構築土（L層）で、黄褐色シルトに黒色土を粒～塊状に含む混合土である。

遺物（第31図7・8） 7・8はあかやきの坏である。底部は回転糸切り無調整である。

RE005 竪穴跡（第28図）

位置 調査区北西 平面形 方形か 重複関係 RE001に切られる。

規模 東南—西北1.14m（調査区外）×南東—北西0.86m以上（調査区外）

掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 自然堆積によるものである。A～B層に大別される。

A層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に多～少量含む。2層に細別される。

B層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粒～塊状に含む。2層に細別される。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.42～0.45mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 層厚0.02～0.12mの構築土（L層）で、黄褐色シルトに黒褐色土を含む混合土である。

遺物 図示していないが、平安時代の土師器・あかやき土器片が出土している。

RD003 土坑（第30図）

位置 調査区北西 平面形 円形 重複関係 なし 規模 直径0.67m

掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 自然堆積によるものである。A～B層に大別される。

A層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に少量に含む。

B層—褐色シルトを主体に黒褐色土を粒状に含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.10～0.19mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦である。

遺物（第31図9） 9は土師器の高台付坏である。内外面に黒色処理の後ヘラミガキが施されている。

RD004 土坑（第30図）

位置 調査区北西 平面形 楕円形 重複関係 なし

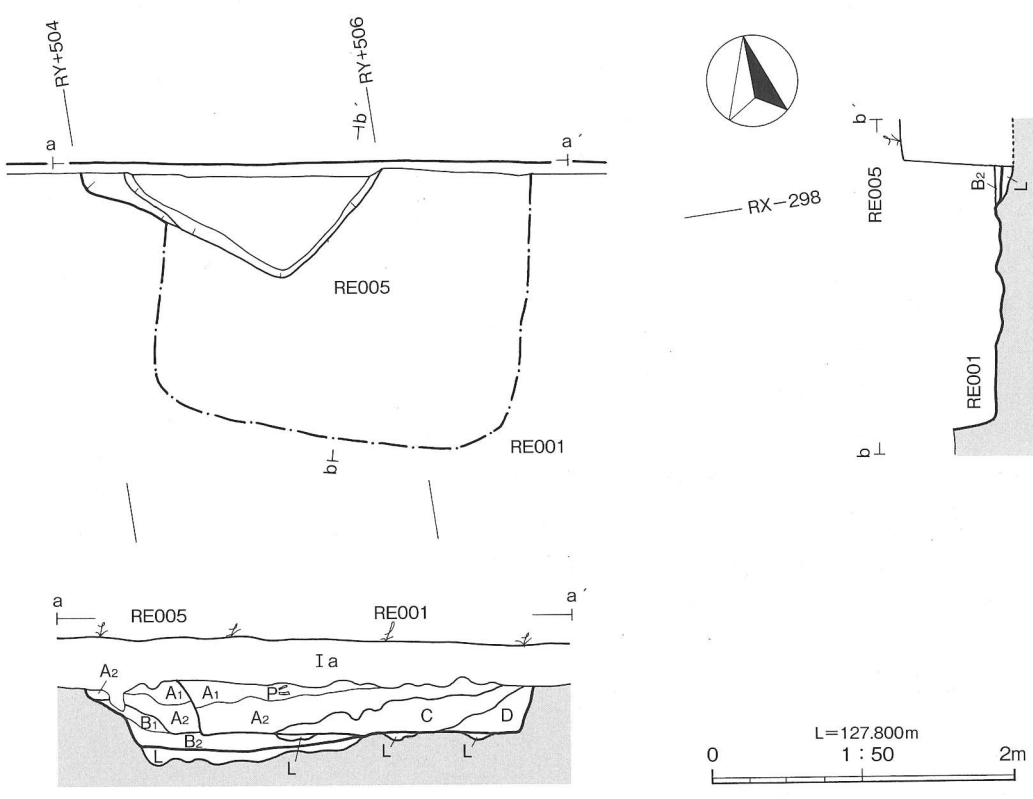
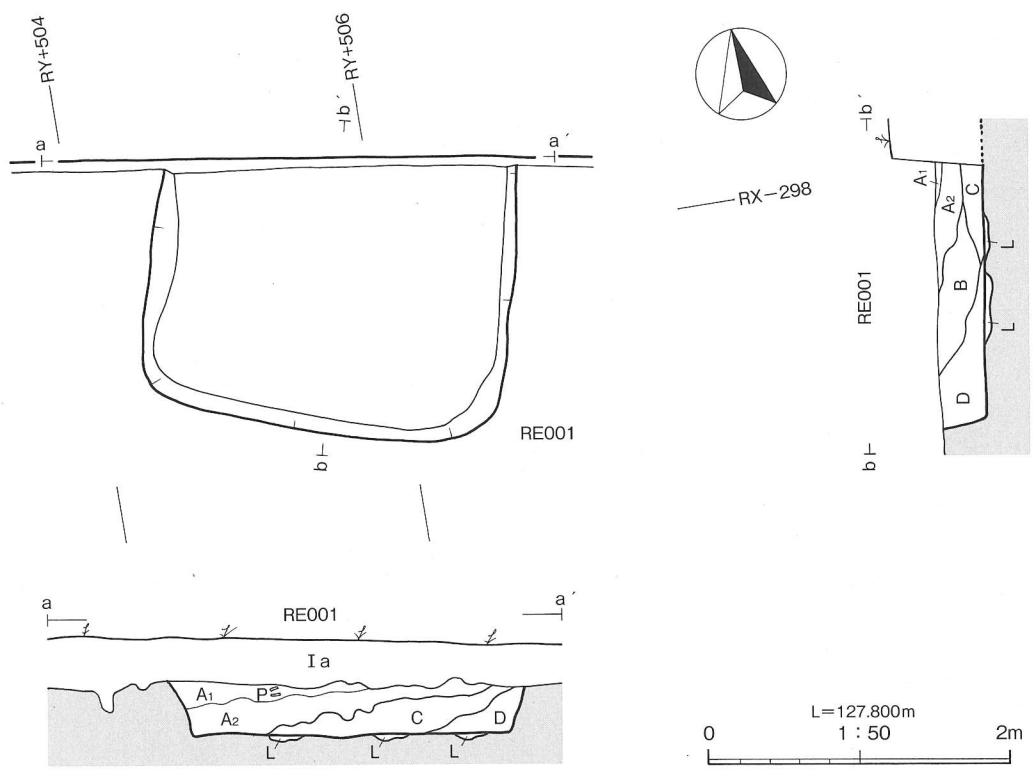
規模 長軸1.51m、短軸0.93m 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 自然堆積によるものである。2層に細別される。A1層は黒褐色土を主体として粒～塊状の褐色シルトを多量に含む、A2層は褐色シルトに黒褐色土を含む。

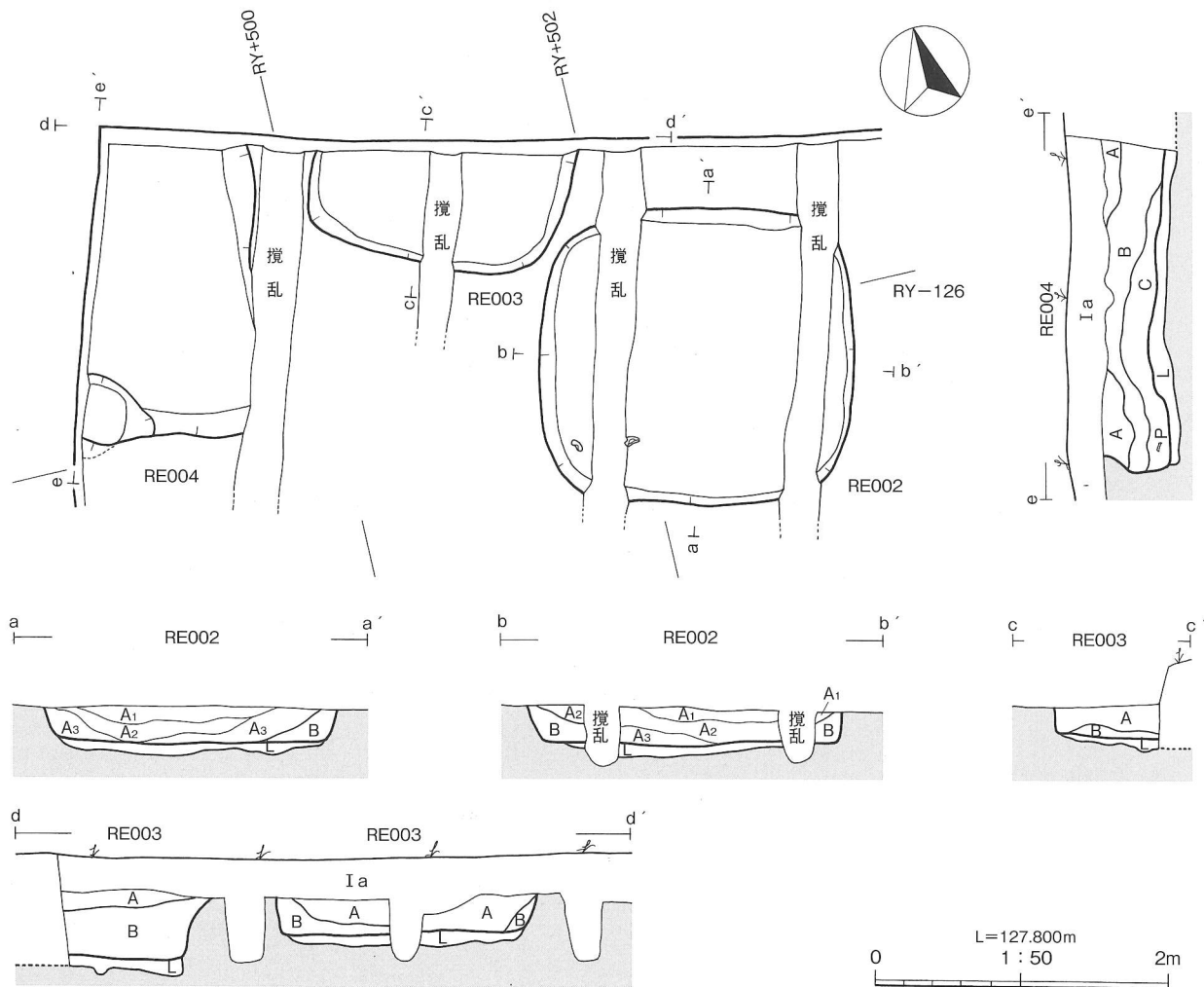
壁の状態 検出面から床面までの深さは0.10～0.28mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦である。

遺物 図示していないが、平安時代の土師器・須恵器・あかやき土器片が出土している。



第 28 図 RE001・005 豎穴跡



第 29 図 R E 002~004 豎穴跡

R D 005 土坑 (第 30 図)

位 置 調査区北西 平面形 楕円形 重複関係 なし
 規 模 長軸 1.42m, 短軸 0.73m 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
 埋 土 自然堆積によるものである。黒色土を主体に黄褐色シルトを含む層で、3層に細分される。A 1・A 3層は粒状に少量含み、A 2層は塊状に多量に含む。
 壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.33~0.35mで、外傾して立ち上がる。
 床の状態 ほぼ平坦である。
 遺 物 図示していないが、平安時代の土師器片が出土している。

R D 0 0 6 土坑 (第 30 図)

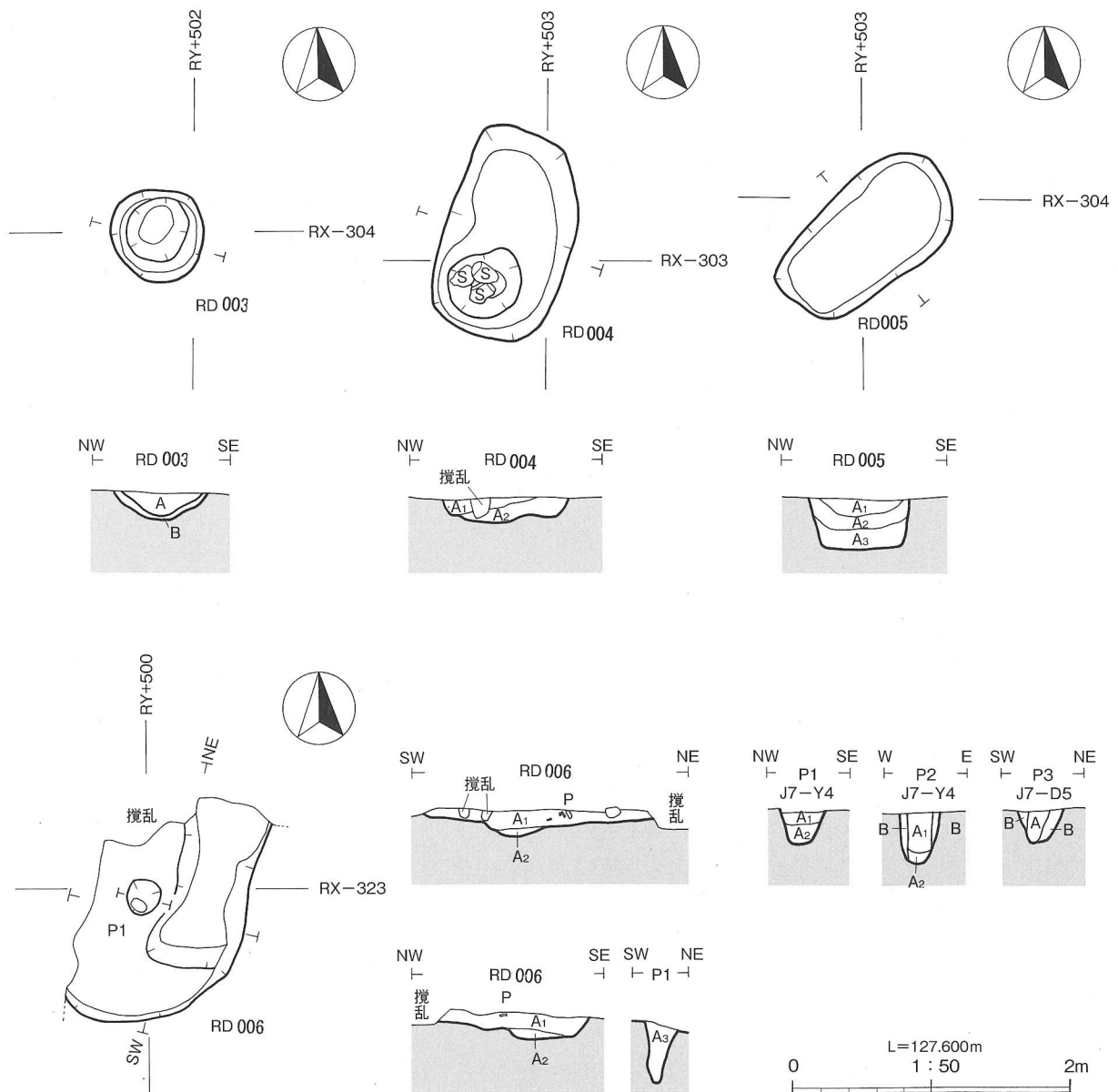
位 置 調査区南 平面形 楕円形 重複関係 攪乱に切られる。
 規 模 長軸 1.66m以上, 短軸 1.07以上 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
 埋 土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体に黄褐色シルトを含む層で、2層に細分される。A 1は粒状に少量含み、A 2層は粒~塊状に含む。
 壁の状態 検出面から床面までの深さは 0.10~0.18mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦である。

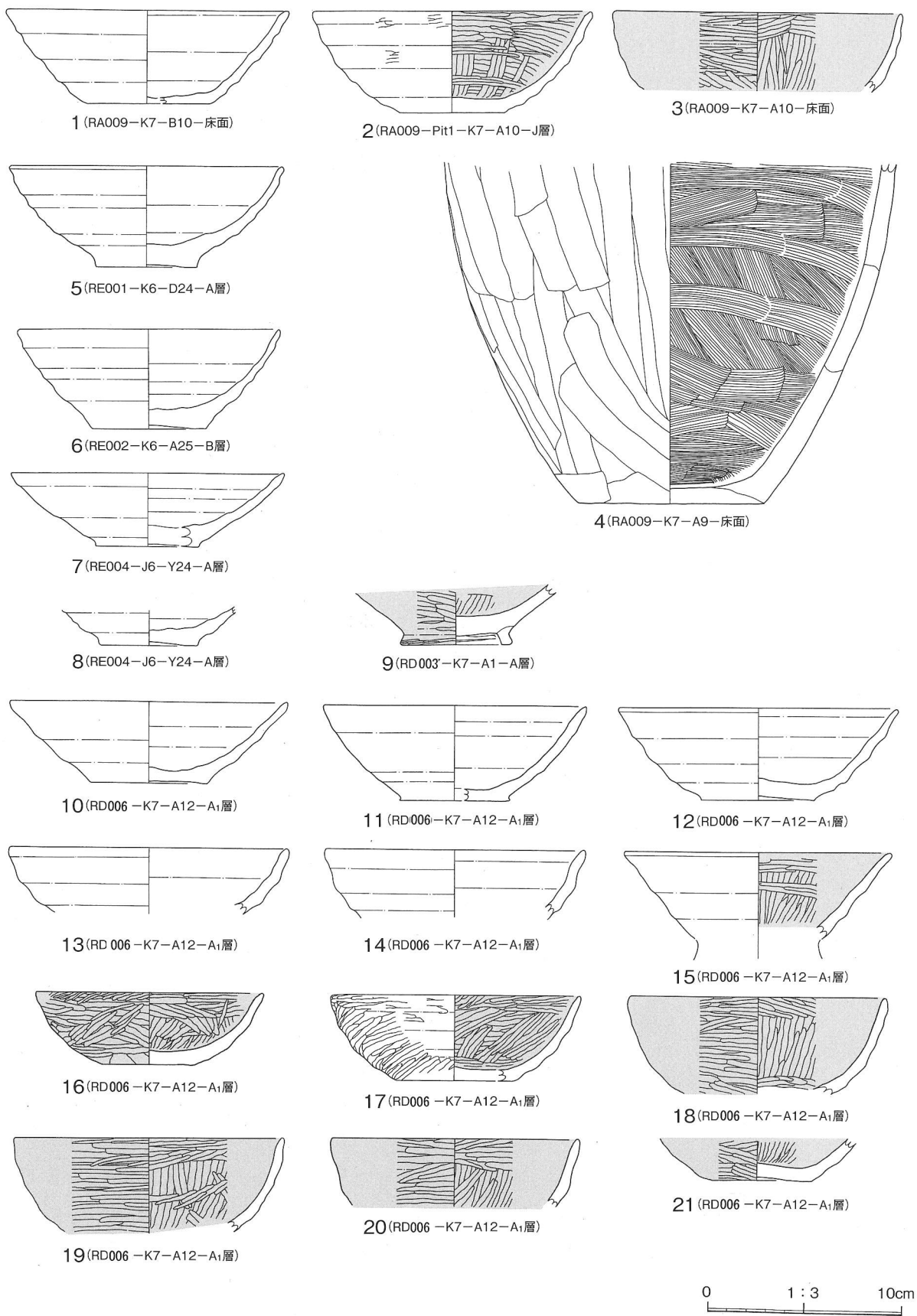
ピット ピットは床面上で1口検出した。床面からの深さはP 1 -0.43mである。ピット内の埋土(A 3層)は黒色土を主体に粒~塊状の褐色シルトを少量含む層である。

遺物 (第31図 10~21) 10~14はあかやきの坏である。15は土師器の高台付坏である。内面は黒色処理の後ヘラミガキを施している。外面はロクロ痕がみられる。16は土師器の小型坏である。内外面に黒色処理の後ヘラミガキが施されている。17~21は土師器の坏である。17は内面に黒色処理の後ヘラミガキを、外面はロクロを使用した後ヘラミガキを施している。18~21は、内外面に黒色処理の後ヘラミガキを施している。

ピット群 (第21・30図) ピットは調査区内から3口(P 1~P 3)検出されている。埋土は黒褐色土を主体として褐色シルトを少量~多量に含む。P 2, P 3には柱痕跡が認められる。いずれのピットからも遺物は出土していない。以下、ピットの深さである。P 1 -0.24m, P 2 -0.37m, P 3 -0.23m。



第30図 RD-003~006土坑、グリットピット断面図



第 31 图 R A 009 竖穴住居跡、R E 001 · 002 · 004 竖穴跡、R D 003 · 006 土坑出土遺物

(3) 二又遺跡第 10 次調査

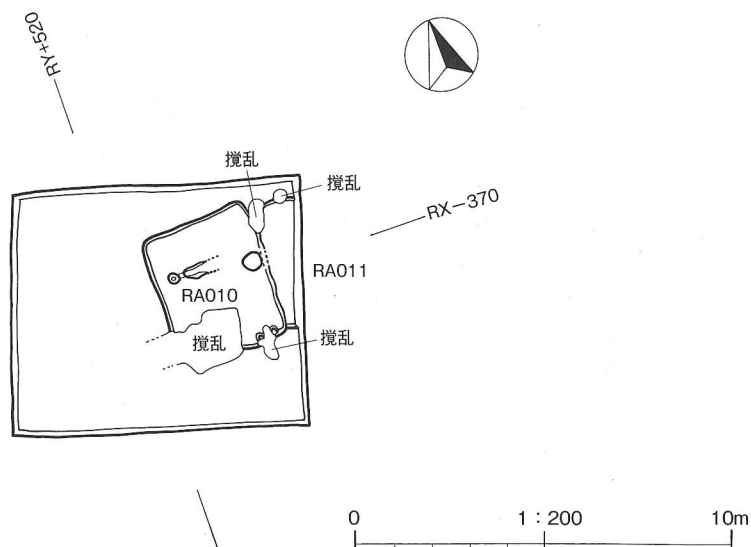
第 10 次調査区は遺跡東側に位置する (第 20 図)。市内遺跡群発掘調査事業 (国庫補助) として農業用倉庫建築部分の試掘調査を実施した結果, 現地表面下約 30~40cm で遺構が検出されたため, 遺構該当部分の精査を行った。調査期間は平成 22 年 6 月 4 日~6 月 9 日まで行い, 調査面積は 40m²である。

検出遺構 検出された遺構は平安時代の堅穴住居跡 2 棟である。堅穴住居跡からは, 土師器や須恵器, あかやき土器などが出土している (第 32 図)。

(4) 古代の遺構・遺物

RA010 堅穴住居跡 (第 33 図)

位置	調査区東	平面形	方形	主軸方向	ほぼ南
規模	東西 2.94m × 南北 3.65m	重複関係	RA011 を切る。		
掘込面	削平	検出面	褐色シルト層上面		
埋土	自然堆積によるものである。A~C 層に大別される。 A 層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に少量含む。 B 層—黒褐色土を主体に褐色シルトと黄褐色シルトを粒~塊状に含む。 C 層—黒褐色土を主体に粒状の黄褐色シルトとカーボン, 焼土を含む。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは 0.19~0.25m, 外傾して立ち上がる。				
床の状態	層厚 0.02~0.13m の構築土 (L 層) で, 褐色シルトに黒褐色土を粒~塊状に多量に含む混合土である。				
かまど	かまどは南壁東端に位置している。煙道は削平により残存していない。				
燃焼部	かまど基底は西側が少し削平されているものの, 残存している。黄褐色シルトに黒褐色土を微量に含む混合土 (K 層) で構築している。規模は, 長さ 0.60m, 幅 0.21m, 高さ 0.11m をはかる。火床面は 0.21 × 0.31m の範囲で拡がる。				
ピット	ピットは床面上で 1 口検出した。床面からの深さは P 1 - 0.23m である。ピット内の埋土 (C 層) は黒褐色土を主体に粒状の黄褐色シルトを含む層である。2 層に細別され, C 2 層には焼土を少量含む。				

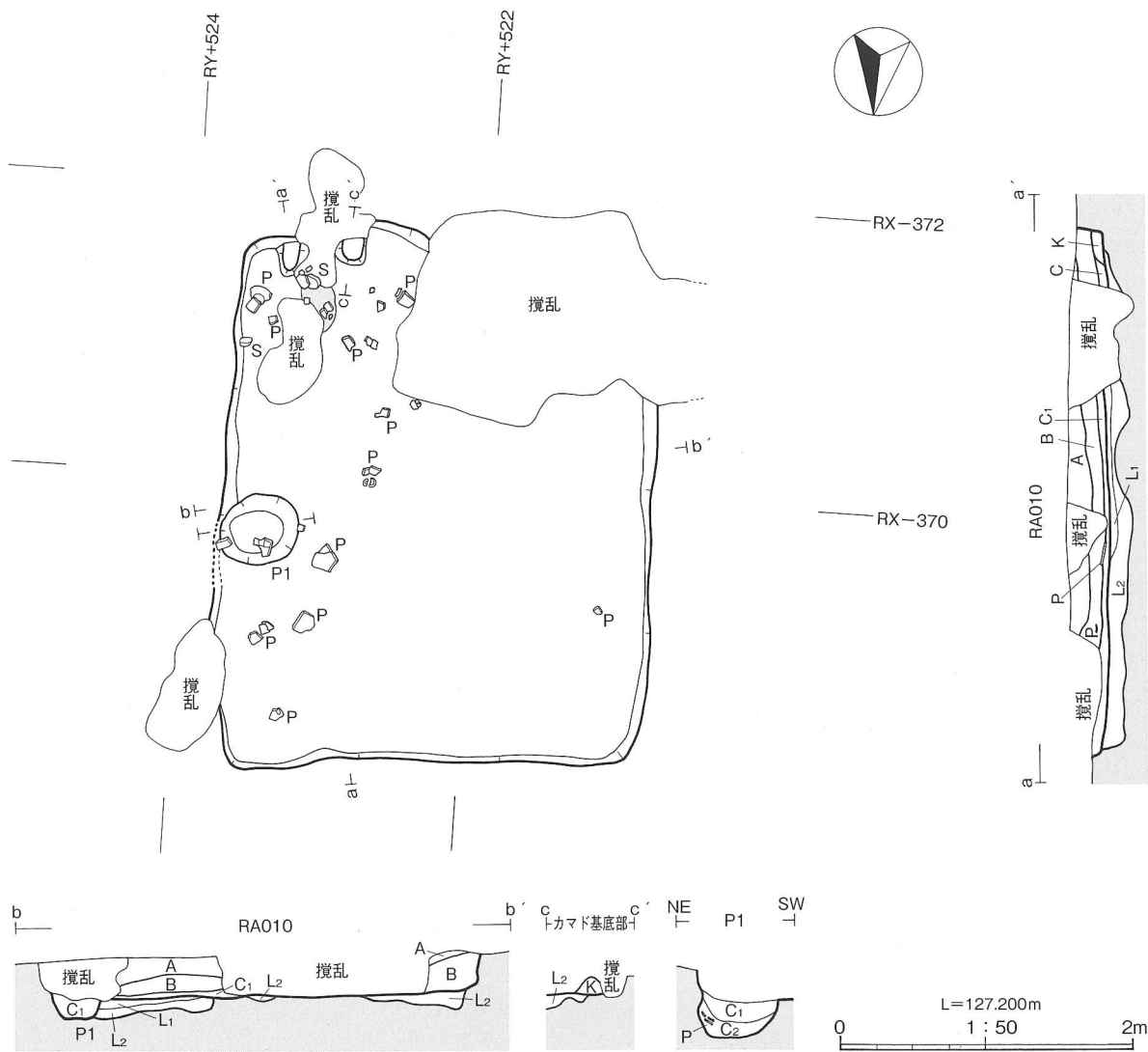


第 32 図 二又遺跡第 10 次調査区全体図

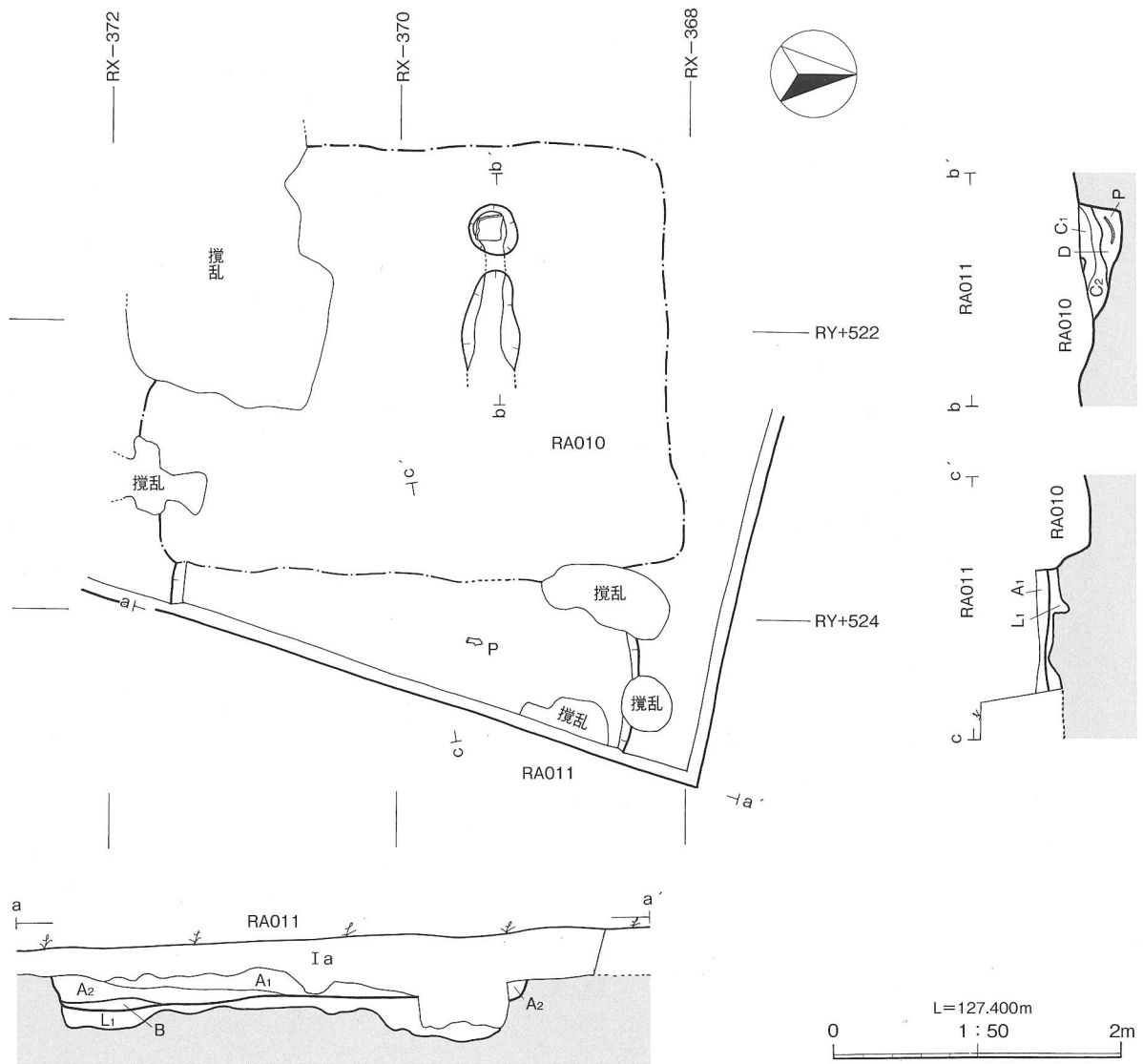
遺物(第35図1~10) 1はあかやきの高台付坏である。柱状の高台が付く。磨滅している。2~6はあかやきの坏である。底部は回転糸切の無調整である。2・3は、磨滅しているが煤が付着していることが確認できる。7は土師器の高台付坏である。内面に黒色処理が施され、外面はヘラミガキがみられる。底部は菊花文が施されている。8はあかやきの甕である。内面はヘラナデ、外面はヘラケズリが施されている。9は土師器の甕である。口縁部にはユビナデ、内外面はヘラケズリが施されている。10は須恵器の大甕である。外面には平行タタキが施されている。

RA011 竪穴住居跡(第34図)

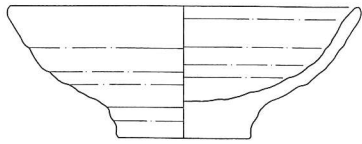
位置	調査区東	平面形	方形	主軸方向	ほぼ西
規模	南北3.28m×東西0.90m以上				
重複関係	RA010に切られる。	掘込面	削平	検出面	褐色シルト層上面
埋土	自然堆積によるものである。A~B層に大別される。 A層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に含む。2層に細別される。 B層—黒褐色土を主体に多量の黄褐色シルトと少量の焼土を含む。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.16~0.21m、外傾して立ち上がる。				
床の状態	層厚0.03~0.23mの構築土(L層)で、黄褐色シルトに黒褐色土と暗褐色土を粒状に含む混合土である。				
かまど	かまどは西壁中央に位置している。RA010に切られて火床面から煙道の途中までは残存していないが、煙道平面形は割り貫きのトンネル状で、煙出しに向かってゆるやかに傾斜している。煙道内にはかまど崩壊土(J層)が堆積している。C1・2層は黒褐色土主体に黄褐色シルトを含む層である。D層は黒褐色土に褐色シルトを少量含む。残存部分から煙出しの先端までの長さが1.15m、幅0.42m、底面から天井までの高さは0.20m、検出面から煙出し底面までの深さは0.30mをはかる。				
燃焼部	かまど基底部分、火床面共に残存していない。ピットなし				
遺物(第35図11・12)	11は須恵器の坏である。12はあかやきの長胴甕である。内外面にロクロ痕がみられ、外面には煤が付着している。				



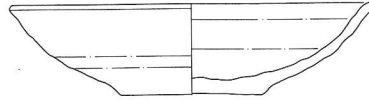
第 33 図 RA010 竪穴住居跡



第 34 图 R A 011 竖穴住居跡



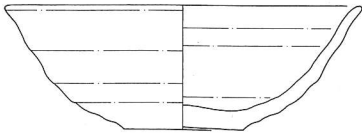
1 (RA010-K8-L11-床面)



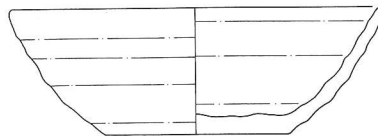
2 (RA010-K8-L11-床面)



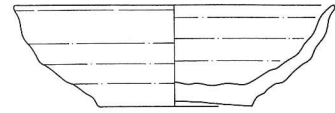
3 (RA010-K8-L10-床面)



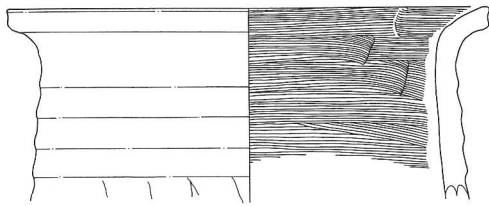
4 (RA010-K8-L11-床面)



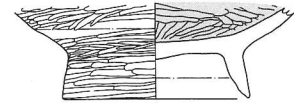
5 (RA010-K8-L11-床面)



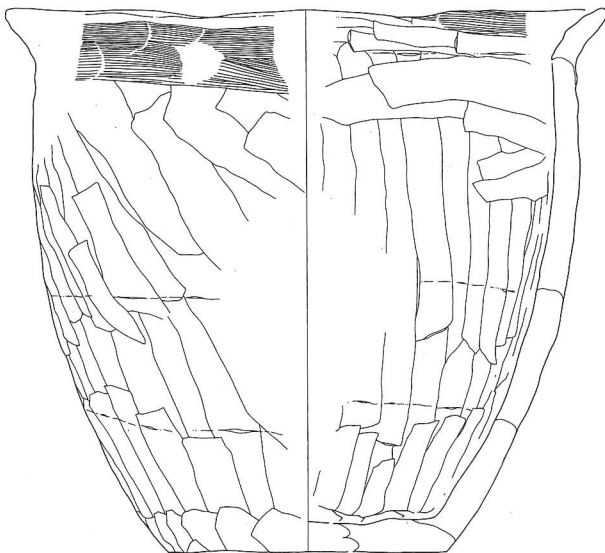
6 (RA010-Pit 1-K8-L10-C₂層)



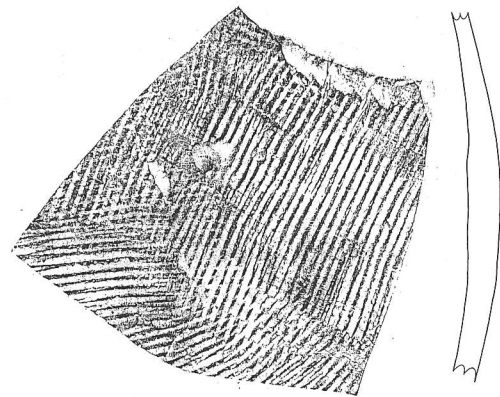
8 (RA010-K8-L11-床面)



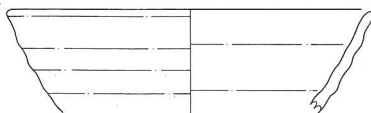
7 (RA010-K8-L10-床面)



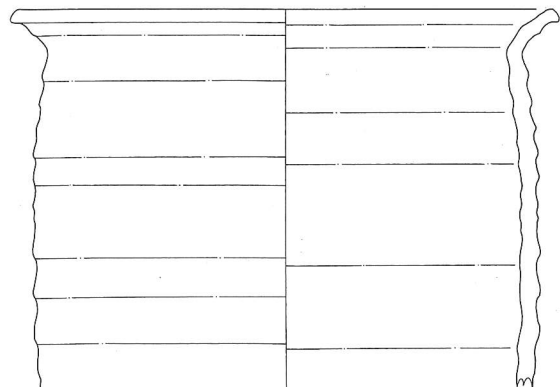
9 (RA010-K8-L11-床面)



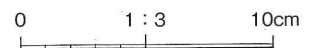
10 (RA010-K8-L10-床面)



11 (RA011-K8-M10-床面)



12 (RA011-K8-K10-煙道D層)



第 35 図 R A 010・011 豎穴住居跡出土遺物

3. 総括

今回の調査の結果、第9・10次調査合わせて平安時代の竪穴住居跡5棟、竪穴跡5棟、土坑4基が確認された。

竪穴住居跡 竪穴住居跡の規模は概ね、一辺が3～4m範囲におさまるものである。カマドの向きは一定ではなく、東西南北全ての方位に構築されている。竪穴住居跡からは、須恵器大甕・坏、あかやき土器坏・甕、土師器坏などが多数出土している。RA007のカマド周辺には、須恵器大甕や坏などが意図的に廃棄されている。また、RA008のカマド燃焼部には坏が数個体重ねて埋納した状態で出土している。これらは住居廃棄の際の儀礼的行為と考えられるが、住居によって廃棄方法や土器の器種に違いがある。

竪穴跡 カマドを持たない竪穴跡は、第9次調査区の北西部に集中して確認された。一辺が2m前後の方形で、床面積は4㎡を前後の小形なものである。出土遺物は竪穴住居跡ほど多くはないが、あかやき土器の坏が出土している。土器以外の出土遺物も無く、床面に地床炉等も確認されていないことから用途は不明である。

出土遺物 これまでに二又遺跡で出土した遺物は、9世紀中～後半に属するものが主体を占めている（盛岡市教委2005）。しかし、RA008竪穴住居跡より出土した土器は、これまでに出土したものと異なる特徴を備えている。

第27図1～3のあかやき土器の坏の高台は、底部の厚みが1.5～2.0cm、所謂、柱状高台と呼ばれるものである。市内では中津川流域に位置する、堰根遺跡などで同様の高台坏が出土しており、10世紀中～後葉に比定されている。堰根遺跡では第27図10のような内黒土師器の高台が低い三角高台坏も出土しており、やはり10世紀中～後葉に出現するものとされている。また、RA008から出土した土器は、須恵器の坏や大甕などは姿を消して、あかやき土器と土師器が主体を占めている。10世紀以降は須恵器窯業生産が衰退することが指摘されていることや（金ヶ崎町教委2012）、出土した土器の特徴から、RA008竪穴住居跡は10世紀中～後葉の年代が考えられる。その他の遺構から出土した土器も全体的に坏の底径が小形化（6cm以下）する特徴が見て取れることから、やはり10世紀代に近い年代が想定されるのではないだろうか。

遺跡の全体像 今回の調査では、これまで事例が少なかった10世紀代の竪穴住居跡を確認することができた。二又遺跡は県道拡幅に伴い、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下、県埋文）でも平成23・24年度に、今次調査区の隣接地を約6,000㎡調査実施している。今回と同様に、平安時代の竪穴住居跡や大形の掘立柱建物跡などが確認されている（岩手県文化振興事業団2012）。今後、県埋文から刊行される調査報告と合わせると、遺跡全体の様相と竪穴住居など遺構の時期変遷が明らかになると考えられる。

【引用・参考文献】

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2012 『平成23年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第603集

金ヶ崎町教育委員会 2012 『安倍氏のうつわ検討会』

盛岡市教育委員会 2005 『盛岡市内遺跡群—平成15年度・16年度発掘調査報告—』

写真図版



西黒石野遺跡第13次調査区 全景（北から）



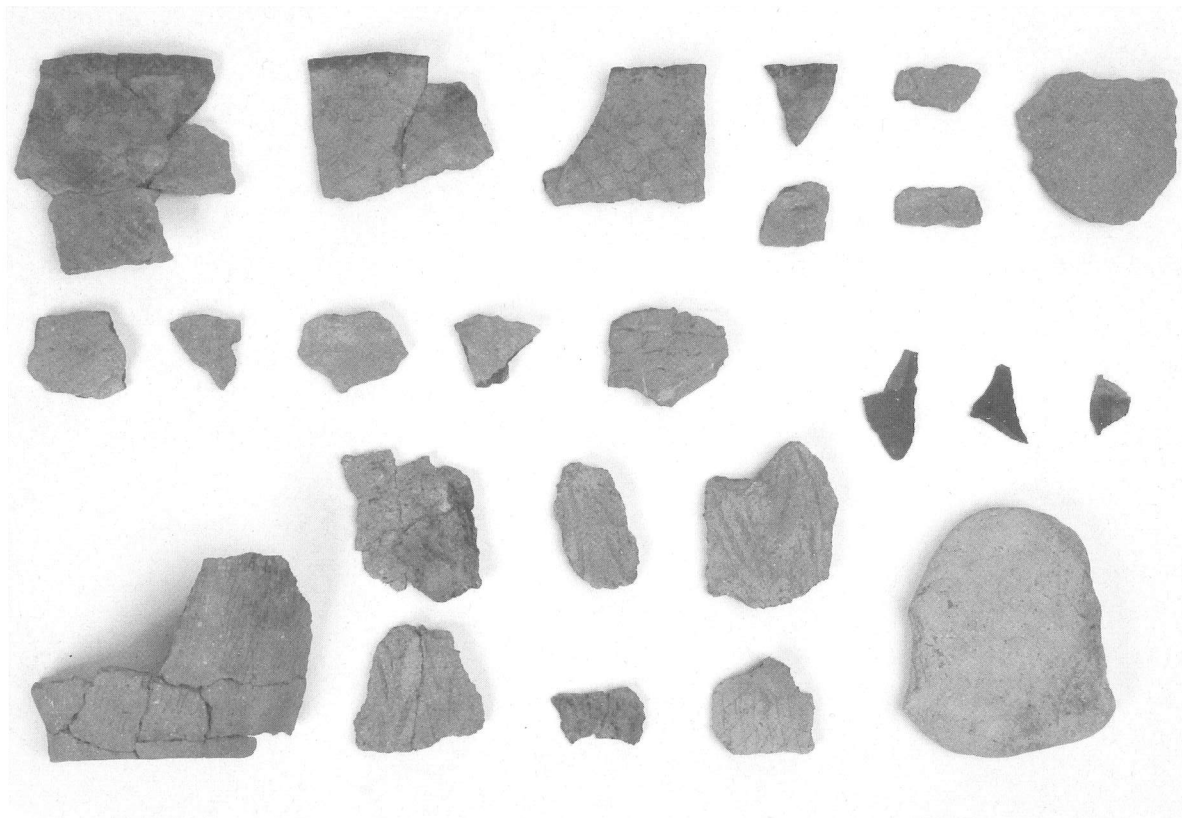
西黒石野遺跡第13次調査区 全景（西から）



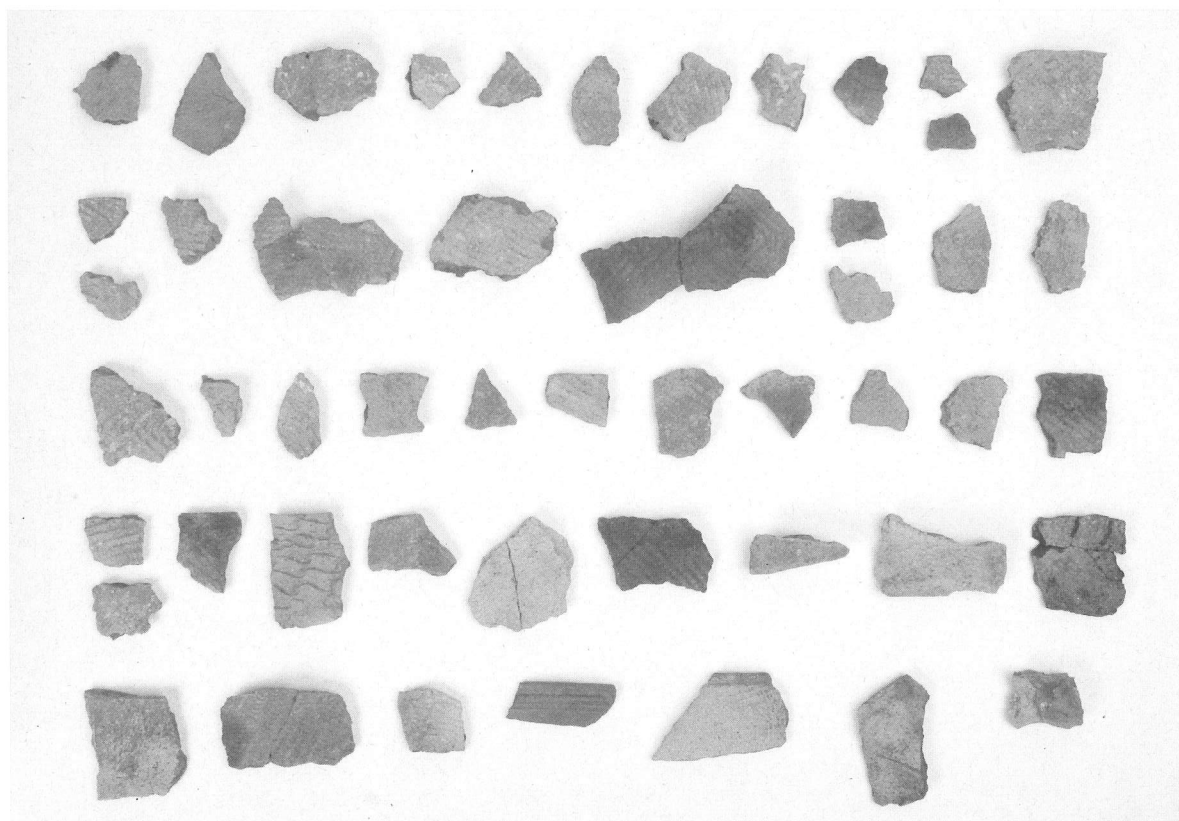
西黒石野遺跡第13次調査 RA003 竪穴住居跡（西から）



西黒石野遺跡第13次調査 RA003 竪穴住居跡（東から）



西黒石野遺跡第13次調査 RA003 竪穴住居跡 出土遺物

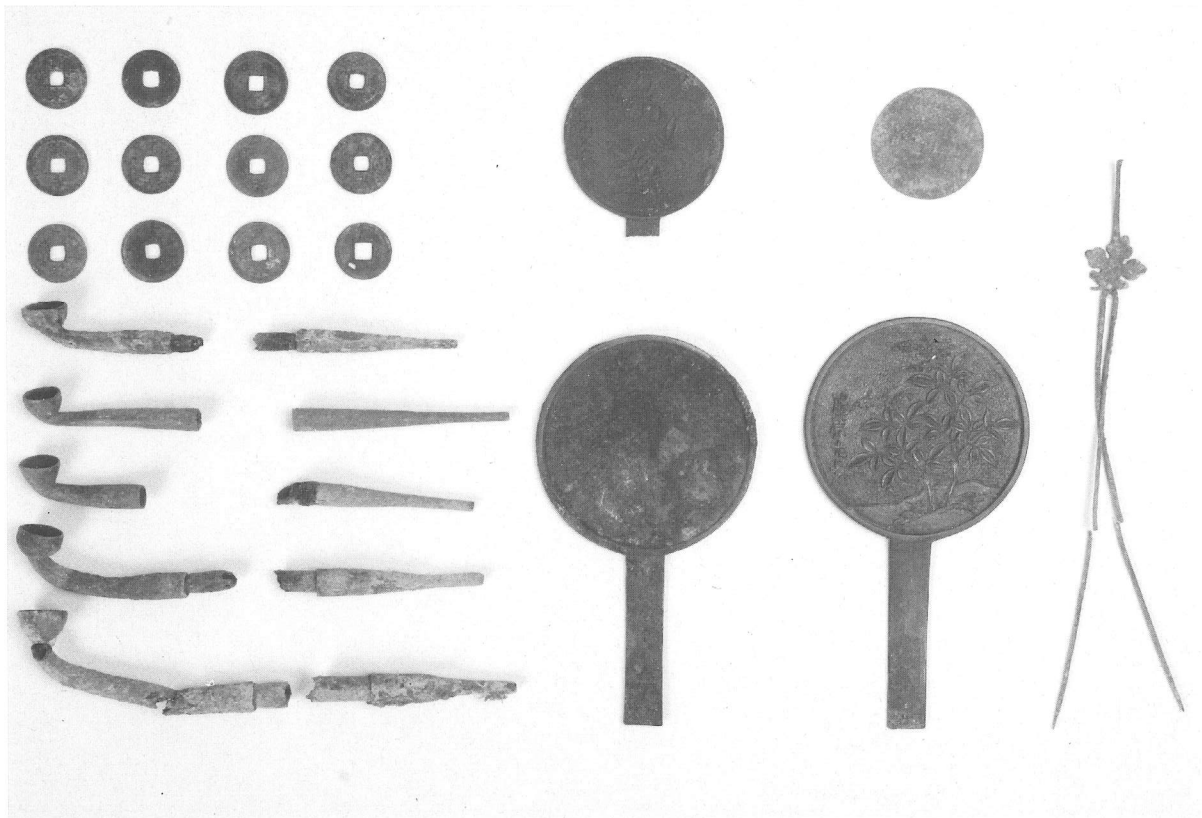


西黒石野遺跡第13次調査 遺物包含層出土遺物

第4図版



西黒石野遺跡第13次調査 RD1002・1003 土坑出土遺物



西黒石野遺跡第13次調査 RD1002~1010 土坑出土遺物



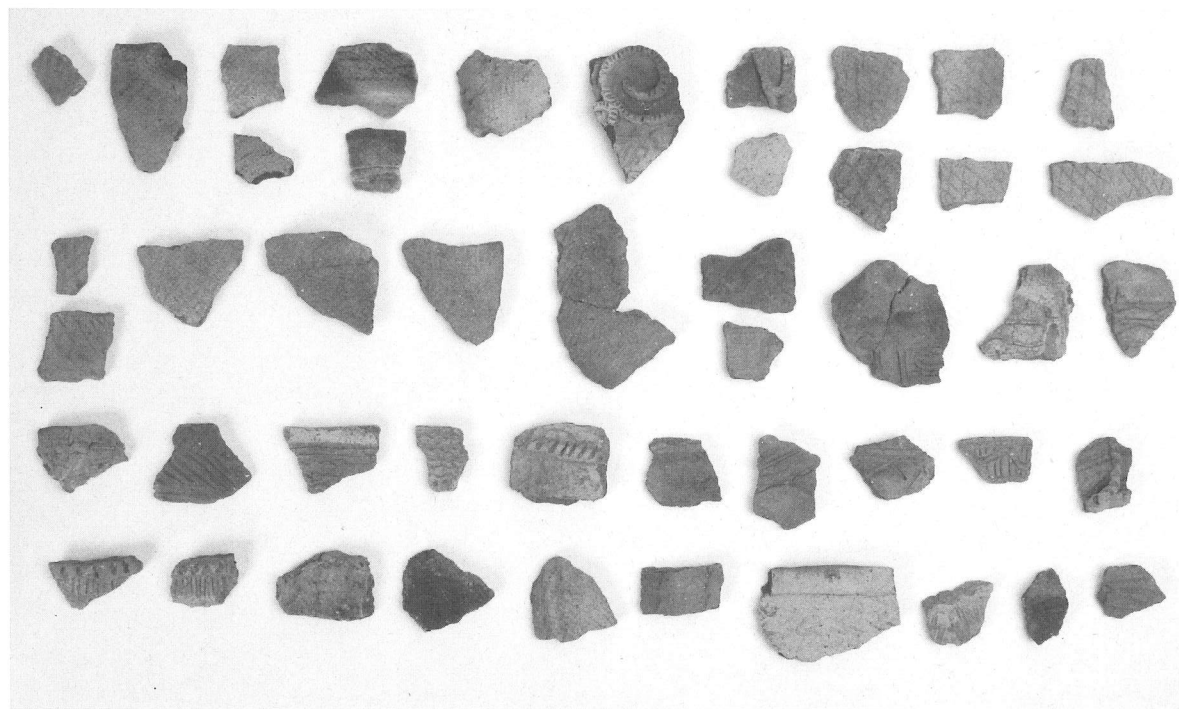
小山遺跡第35次調査区 全景（北から）



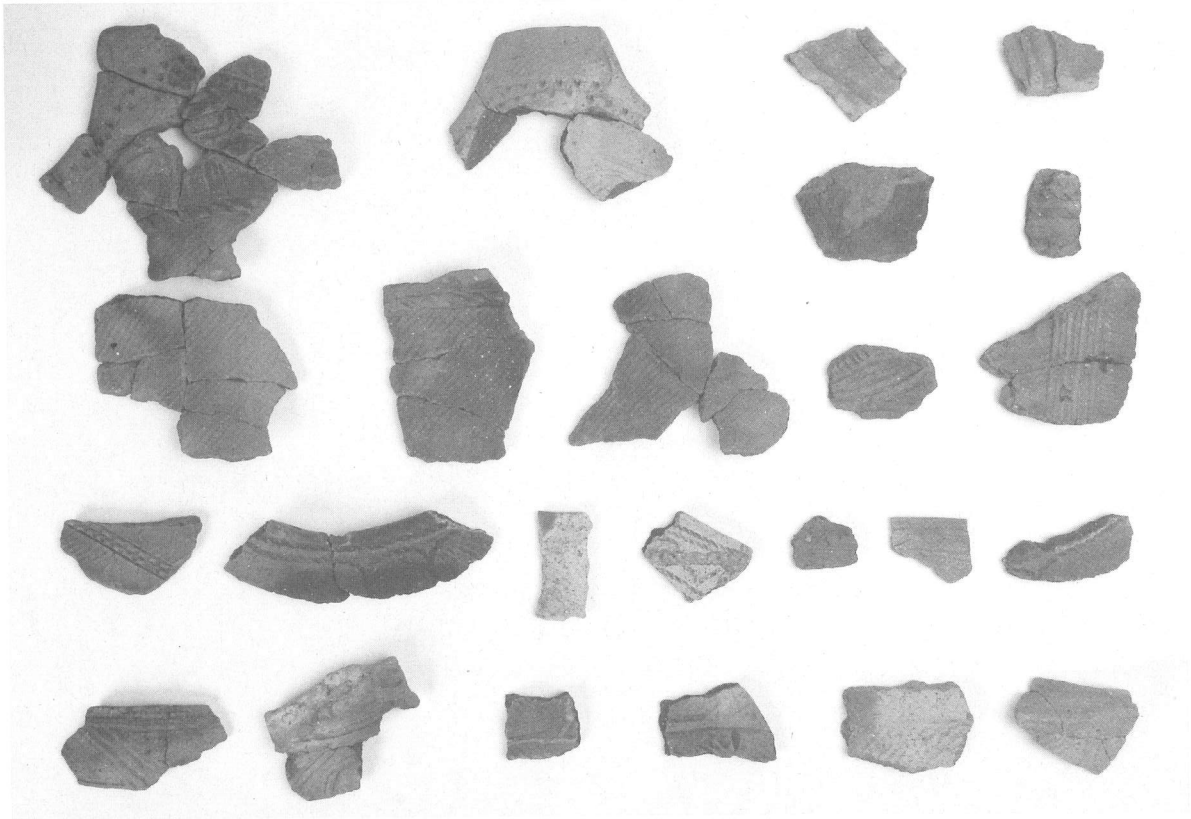
小山遺跡第35次調査 RA001 竪穴住居跡（南から）



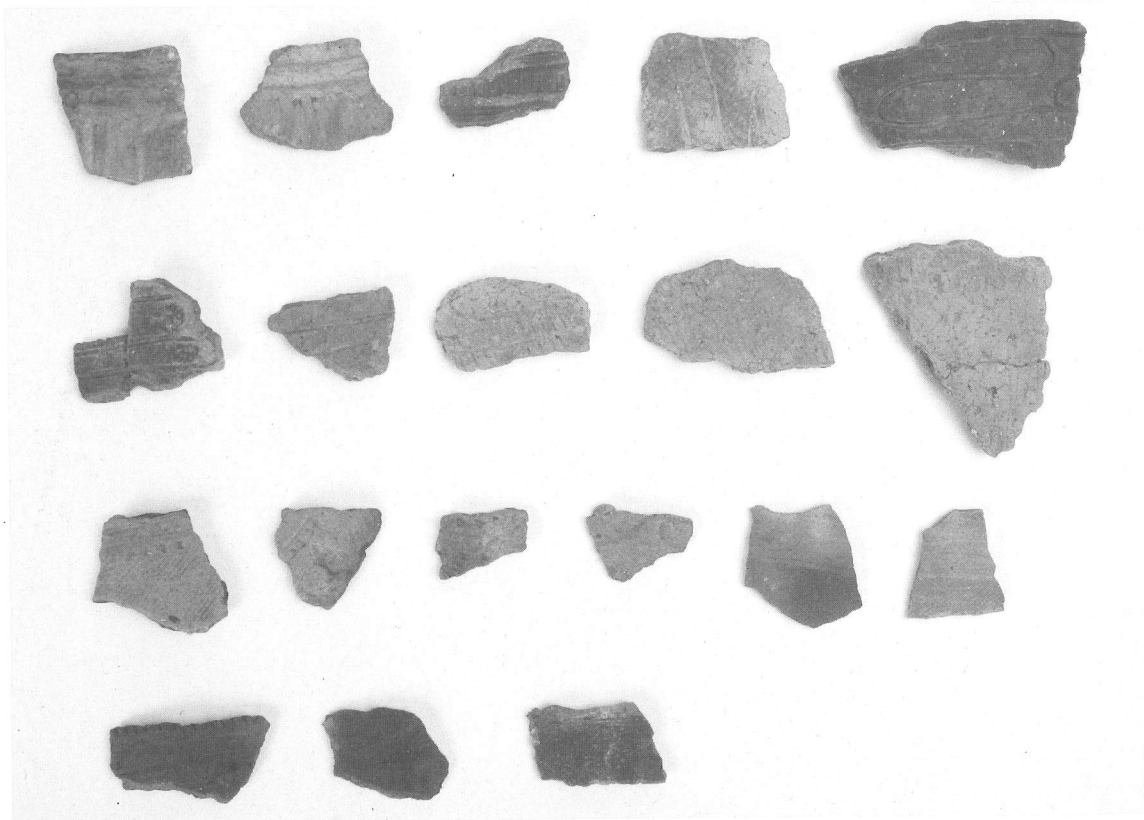
小山遺跡第35次調査 RA001 竪穴住居跡出土遺物



小山遺跡第35次調査 遺物包含層出土遺物(1)



小山遺跡第35次調査 遺物包含層出土遺物(2)



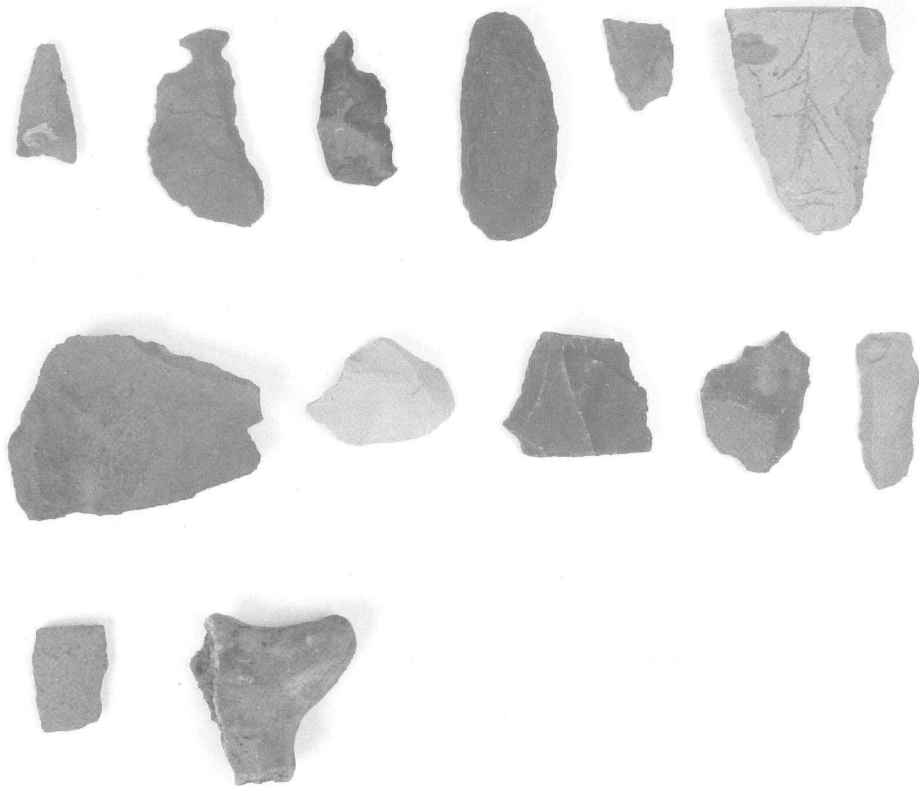
小山遺跡第35次調査 遺物包含層出土遺物(3)



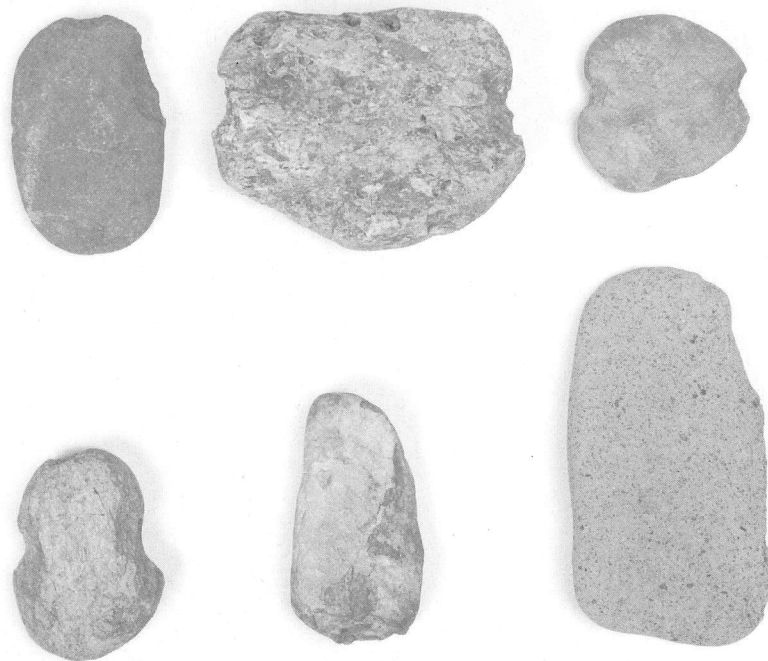
小山遺跡第 35 次調査 遺物包含層出土遺物 (4)



小山遺跡第 35 次調査 遺物包含層出土遺物 (5)



小山遺跡第35次調査 遺物包含層出土遺物(6)



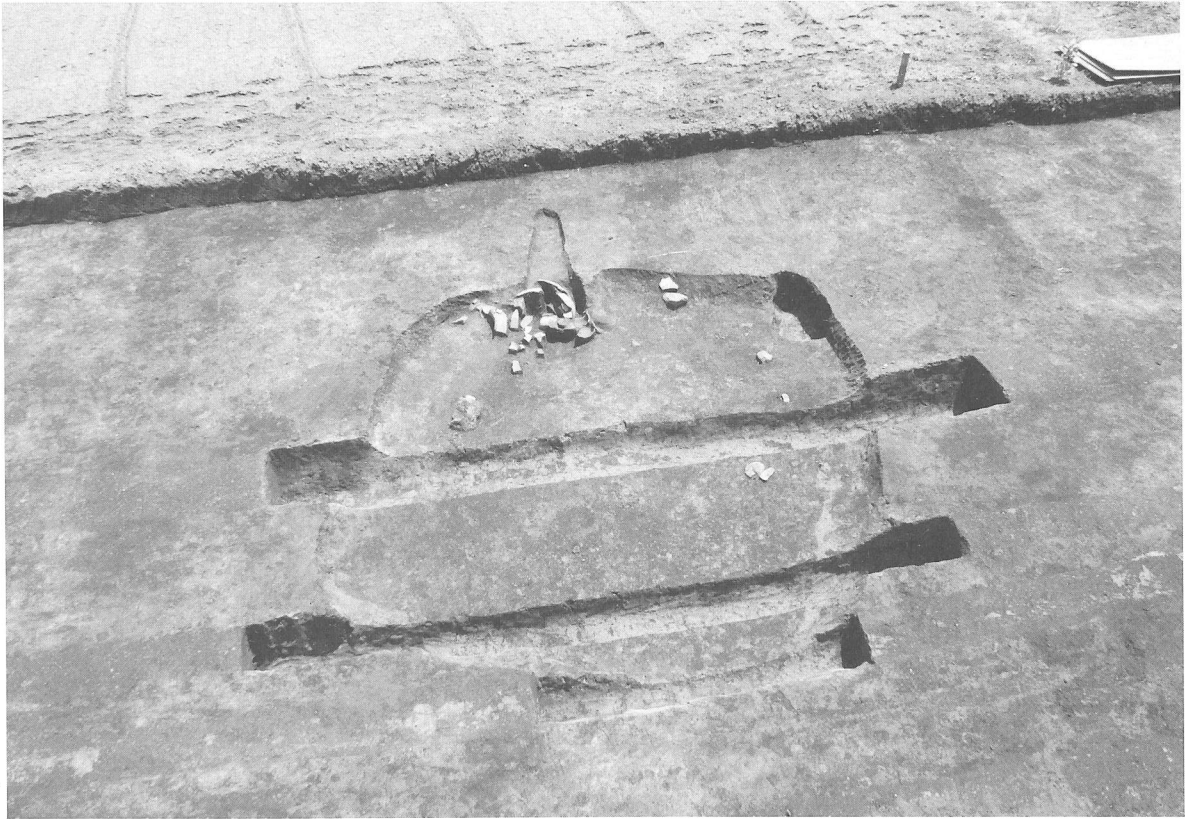
小山遺跡第35次調査 遺物包含層出土遺物(7)



二又遺跡第9次調査区北 全景（西から）



二又遺跡第9次調査区南 全景（西から）



二又遺跡第9次調査 R A 007 竪穴住居跡（西から）



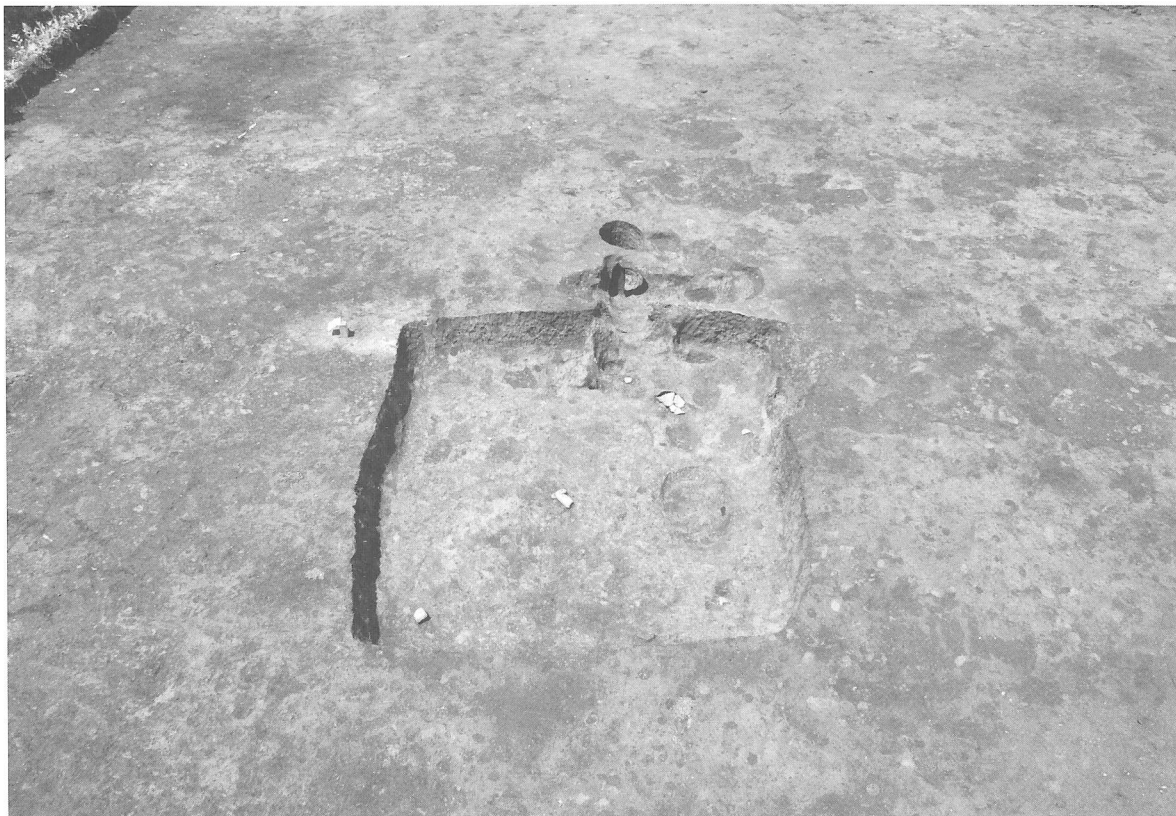
二又遺跡第9次調査 R A 007 竪穴住居跡 遺物出土状況（西から）



二又遺跡第9次調査 R A 008 竪穴住居跡（南から）



二又遺跡第9次調査 R A 008 竪穴住居跡 遺物出土状況（南から）



二又遺跡第9次調査 RA009 竪穴住居跡 (東から)



二又遺跡第9次調査 RE001~005 竪穴跡 (南から)



二又遺跡第 10 次調査 RA010・011 竪穴住居跡 (西から)



二又遺跡第 10 次調査 RA010 竪穴住居跡 遺物出土状況 (北から)



二又遺跡第 9 次調査 R A 007 竪穴住居跡出土遺物



二又遺跡第 9 次調査 R A 008・009 竪穴住居跡出土遺物



二又遺跡第 9 次調査 RE001・002・004 竪穴跡、RD003・006 土坑出土遺物



二又遺跡第 10 次調査 RA010・011 竪穴住居跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん							
書名	「盛岡市内遺跡群」							
副書名	平成 22・23 年度発掘調査報告							
編著者名	佐々木亮二 神原雄一郎 佐々木紀子 三品花菜子							
編集機関	盛岡市 遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1 TEL019-635-6600							
発行年月日	2013 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
にしくろいしのいせき 西黒石野遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 くろいしのちやうめ 黒石野 2 丁目	3201		39° 44' 16"	141° 08' 47"	第 13 次 2010.06.10～ 2010.06.29	350	個人住宅建設
こやまいせき 小山遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 ひがしなかのちやう 東中野 町 17			39° 41' 31"	141° 10' 40"	第 35 次 2010.07.26～ 2010.08.23	200	個人住宅建設
ふたまたいせき 二又遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 しもいわかちわり 下飯岡 1 地割			39° 40' 19"	141° 07' 06"	第 9 次 2010.06.01～ 2010.06.10 第 10 次 2010.06.04～ 2010.06.09	500 40	個人住宅建設 農業用倉庫建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西黒石野遺跡 第 13 次	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 1 土坑 4	縄文時代前期土器, 石器		縄文時代前期の竪穴住居跡と近世の土坑墓を確認した。		
		近世以降	土坑 10	陶磁器, 古銭, 煙管, 鏡, 簪				
小山遺跡 第 35 次	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 1	縄文時代前期～弥生時代中期土器, 石器		縄文前期～弥生中期の遺物包含層を確認した。		
二又遺跡 第 9 次	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 3 竪穴跡 5 土坑 3	土師器, 須恵器 あかやき土器		遺跡内の古代集落の広がりを確認した。		
二又遺跡 第 10 次			竪穴住居跡 2	土師器, 須恵器 あかやき土器				

盛岡市内遺跡群

—平成 22・23 年度発掘調査報告—

2013 年 3 月 26 日 発行

編 集 盛岡市遺跡の学び館

〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1

TEL 019-635-6600 FAX 019-635-6605

発 行 盛岡市教育委員会

〒020-8532 岩手県盛岡市津志田 14 地割 37 番 2

印 刷 河北印刷株式会社

〒020-0015 岩手県盛岡市本町通 2 丁目 8 番 7 号